

最終戦争論・戦争史大観

石原莞爾

目次（クリックで飛びます）

第一部 最終戦争論

第一章 戦争史の大観

第一節 決戦戦争と持久戦争

第二節 古代および中世

第三節 文芸復興

第四節 フランス革命

第五節 第一次欧州大戦

第六節 第二次欧州大戦

第二章 最終戦争

第三章 世界の統一

第四章 昭和維新

第五章 仏教の予言

第六章 結び

第一章	緒論
第三篇	戦争史大観の説明
観の由来記	
第二篇	戦争史大観の序説（別名・戦争史大

第七	現在に於ける我が国防
第六	将来戦争の予想
第五	戦争参加兵力の増加と国軍の編成
第四	戦闘方法の進歩
第三	会戦指揮方針の変化
第二	戦争指導要領の変化

第一篇	戦争史大観
第一	緒論

第三部	戦争史大観
序文	

戦争史大観	
第二部	「最終戦争論」に関する質疑回答

第二章	第一節	戦争の絶滅
	第二節	戦争史の方向
	第三節	西洋戦史に依る所以
第二章		戦争指導要領の変化
	第一節	戦争の二種類
	第二節	両戦争と政戦略の関係
	第三節	持久戦争となる原因
	第四節	欧州近世に放ける両戦争の消長
	第五節	フリードリヒ大王の戦争
	第六節	ナポレオンの戦争
	第七節	ナポレオンより第一次欧州大戦
	第八節	第一次欧州大戦
	第九節	第二次欧州大戦
第三章		会戦指導方針の変化
	第一節	会戦の二種類
	第二節	二種類に分るる原因
	第三節	歴史的観察
第四章		戦闘方法の進歩
	第一節	隊形
	第二節	指揮単位

第三節 戦闘指導精神

第五章 戦争参加兵力の増加と国軍編制（

軍制）

第一節 兵役

第二節 国軍の編制

第六章 将来戦争の予想

第一節 次の決戦戦争は世界最終戦争

第二節 歴史の大勢

第三節 将来戦争に対する準備

第七章 現在に於ける我が国防

第一節 現時の国策

第二節 我が国防

第三節 満州国の責務

最終戦争論・戦争史大観

石原莞爾

第一部 最終戦争論

昭和十五年五月二十九日京都義方会に於ける

講演速記で同年八月若干追補した。

第一章 戦争史の大観

第一節 決戦戦争と持久戦争

戦争は武力をも直接使用して国家の国策を遂行する行為であります。今アメリカは、ほとんど全艦隊をハワイに集中して日本を脅迫しております。どうも日本は米が足りない、物が足りないと言って弱っているらしい、もうひとおどし、おどせば日支問題も日本側で折れるかも知れぬ、一つ脅迫してやれというのでハワイに大艦隊を集中しているのであります。つまりアメリカは、かれらの対日政策を遂行するために、海軍力を盛んに使ってい

るのでありますが、間接の使用でありますから、まだ戦争ではありません。

戦争の特徴は、わかり切ったことでありますが、武力戦にあるのです。しかしその武力の価値が、それ以外の戦争の手段に対してどれだけの位置を占めるかということによって戦争に二つの傾向が起きて来るのであります。武力の価値が他の手段にくらべて高いほど戦争は男性的で力強く、太く、短くなるのであります。言い換えれば陽性の戦争――これを私は決戦戦争と命名しております。ところが色々の事情によって、武力の価値がそれ以外の手段、即ち政治的手段に対して絶対的でない――比較的価値が低くなるに従って戦争は細く長く、女性的に、即ち陰性の戦争になるのであります。これを持久戦争と言います。

戦争本来の真面目（しんめんぼく）は決戦戦争であるべきですが、持久戦争となる事情については、単一でありませぬ。これがため

古代――ギリシャ、ローマの時代は国民皆

第二節 古代および中世

参照）。

考えて見ようと思えます（六四頁の付表第一
 争の歴史を、特に戦争の本場の西洋の歴史で
 参照）。

おり、且つ戦場の広さも手頃でありますから
 西洋では似た力を持つ強国が多数、隣接して
 西洋の方が本場らしいのでございます。殊に
 戦争の時代を交互に現出して参りました。

に同じ時代でも、ある場合には決戦戦争が行
 なわれ、ある場合には持久戦争が行なわれる
 ことがあります。しかし両戦争に分かれる最
 大原因は時代的影響でありまして、軍事上か
 ら見た世界歴史は、決戦戦争の時代と持久戦
 争の時代を交互に現出して参りました。

戦争のこととなりますと、あの喧嘩好きの

兵であります。これは必ずしも西洋だけでは
 ありません。日本でも支那でも、原始時代は
 社会事情が大体に於て人間の理想的形態を取
 っていることが多いらしいのでありまして、
 戦争も同じことであります。ギリシャ、ロー
 マ時代の戦術は極めて整然たる戦術であつた
 のであります。多くの兵が密集して方陣を作
 り、巧みにそれが進退して敵を圧倒する。今
 日でもギリシャ、ローマ時代の戦術は依然と
 して軍事学に於ける研究の対象たり得るので
 あります。国民皆兵であり整然たる戦術によ
 つて、この時代の戦争は決戦的色彩を帯びて
 おりました。アレキサンダーの戦争、シイザ
 ーの戦争などは割合に政治の掣肘（せいちゆ
 う）を受けないで決戦戦争が行なわれました。
 ところがローマ帝国の全盛時代になります
 と、国民皆兵の制度が次第に破れて来て傭兵
 （ようへい）になつた。これが原因で決戦戦
 争的色彩が持久戦争的なものに変化しつつあ
 つたのであります。これは歴史的に考えれば

東洋でも同じことであります。お隣りの支那では漢民族の最も盛んであった唐朝の中頃から、国民皆兵の制度が乱れて傭兵に墮落するその時から漢民族の国家生活としての力が弛緩しております。今日まで、その状況がずっと継続しましたが、今次日支事変の中華民国は非常に奮発をして勇敢に戦っております。それでも、まだどうも真の国民皆兵にはなり得ない状況であります。長年文を尊び武を卑しんで来た漢民族の悩みは非常に深刻なものであります。この事変を契機としまして何とか昔の漢民族にかえることを私は希望して

います。前にかえりますが、こうして兵制が乱れ政治力が弛緩して参りますと、折角ローマが統一した天下をヤソの坊さんに実質的に征服されたのであります。それが中世であります。

中世にはギリシャ、ローマ時代に発達した軍事的組織が全部崩壊して、騎士の個人的戦闘になつてしまいました。一般文化も中世は見

方によって暗黒時代であります。軍事的にも同じことでもあります。

第三節 文芸復興

それが文芸復興の時代に入って来る。文芸復興期には軍事的にも大きな革命がありました。それは鉄砲が使われ始めたことです。先代々武勇を誇っていた、いわゆる名門の騎士も、町人の鉄砲一発でやられてしまう。それでお侍（さむらい）の一騎打ちの時代は必

然的に崩壊してしまい、再び昔の戦術が生まれ、これが社会的に大きな変化を招来して来るのであります。

当時は特に十字軍の影響を受けて地中海方面やライン方面に商業が非常に発達して、いわゆる重商主義の時代でありましたから、金は何より大事で兵制は昔の国民皆兵にかえらないで、ローマ末期の傭兵にかえたのであります。ところが新しく発展して来た国家は皆小さいものですから、常に沢山の兵隊を養

ります。日本の軍隊は西洋流を学んだのですから自然の結果であります。たとえば号令をかけるときに剣を抜いて「気を付け」とやります。「言うことを聞かないと切るぞ」と、おどしをかける。もちろん誰もそんな考えで剣を抜いているのではありませんが、この指揮の形式は西洋の傭兵時代に生まれたものと考えます。刀を抜いて親愛なる部下に号令をかけるというのは日本流ではない。日本ではまあ必要があれば采配を振るのです。敬礼の際「頭右（かしらみぎ）」と号令をかけ指揮官は刀を前に投げ出します。それは武器を投げる動作です。刀を投げ捨てて「貴方にはかないません」という意味を示した遺風であるうと思われまます。また歩調を取って歩くのは専制時代の傭兵に、弾雨の下を臆病心を押えつけて敵に向かって前進させるための訓練方法だったのです。

金で備われて来る兵士に対しては、どうしても専制的にやって行かねばならぬ。兵の自

由を許すことはできない。そういう関係から鉄砲が発達して来ますと、射撃をし易くするためにも、味方の損害を減ずるためにも、隊形がだんだん横広くなって深さを減ずるようになりましたが、まだ専制時代であつたので横隊戦術から散兵戦術に飛躍することが困難だつたのであります。

横隊戦術は高度の専門化であり、従つて非常に熟練を要するものです。何万という兵隊を横隊に並べる。われわれも若いときに歩兵

中隊の横隊分列をやるのに苦心したものです。何百個中隊、何十個大隊が横隊に並んで、それが敵前で動くことは非常な熟練を要することとであります。戦術が煩瑣（はんさ）なものになつて専門化したことは恐るべき墮落であります。それで戦闘が思う通りにできないのです。ちよつとした地形の障害でもあれば、それを克服することができない。

そんな関係で戦場に於ける決戦は容易に行なわれぬ。また長年養つて商売化した兵隊

は非常に高価なものであります。それを濫費
 することは、君主としては惜しいので、なる
 べく斬り合いはやりたくない。そういうよう
 な考えから持久戦争の傾向が次第に徹底して
 来るのです。

三十年戦争や、この時代の末期に出て来た
 持久戦争の最大名手であるフリードリヒ大王
 の七年戦争などは、その代表的なものであり
 ます。持久戦争では会戦、つまり斬り合いで
 勝負をつけるか、あるいは会戦をなるべくや

らないで機動によって敵の背後に迫り、犠牲
 を少なくしつつ敵の領土を蚕食する。この二
 つの手段が主として採用されるのであります。
 フ्रीドリヒ大王は、最初は当時の風潮に
 反して会戦を相当に使ったのであります。が、
 さすがのフリードリヒ大王も、多く血を見る
 会戦では戦争の運命を決定しかね、遂に機動
 主義に傾いて来たのであります。

フリードリヒ大王を尊敬し、大王の機動演
 習の見学を許されたこともあったフランスの

るが多数の兵を備うには非常に金がかかる。備い兵を使うのがよいと思われていた。ところが

フランス革命当時はフランスでも戦争には

第四節 フランス革命

にフランス革命が起りました。

す。そういうふうには持久戦争の徹底したとき一七八九年はフランス革命勃発の年でありま

も、この軍事学者がそういう発表をしているに徹底したときが革命の時なんです。皮肉に

たのであります。しかし世の中は、あること

ろうという意味であります。

兵の血を流さないで戦争をやるようになるだ

争が起きても会戦などという血なまぐさいこ

う。将来は大きな戦争は起きまい。また戦

ある有名な軍事学者は、一七八九年、次の如

く言っております。「大戦争は今後起らない

だろうし、もはや会戦を見ることはないだろ

しかるに残念ながら当時、世界を敵とした貧乏国フランスには、とてもそんな金がありません。何とも仕様がな。国の滅亡に直面して、革命の意気に燃えたフランスは、とうとう民衆の反対があつたのを押し切り、徴兵制度を強行したのであります。そのために暴動まで起きたのであります。活気あるフランスは、それを弾圧して、とにかく百万と称する大軍―――をまとめて、四方からフランスにおりますが―――をまとめて、四方からフランスに殺到して来る熟練した職業軍人の連合軍に對抗したのであります。その頃の戦術は先に申しました横隊です。横隊が余り窮屈なものですから、横隊より縦隊がよいとの意見も出ていたのであります。軍事界では横隊論者が依然として絶対優勢な位置を占めておりました。

ところが横隊戦術は熟練の上にも熟練を要するので、急に狩り集めて来た百姓に、そんな高級な戦術が、できっこはないのです。善

これに加えて、傭兵の時代とちがい、ただで兵隊を狩り集めて来るのですから、大将は国王の財政的顧慮などにしづられず、思い切った作戦をなし得ることとなったのであります。こういう関係から、十八世紀の持久戦争でなければならなかった理由は、自然に解消してしまいました。

ところが、そういうように変わっても、敵の大將はむろんのこと新しい軍隊を指揮したフランスの大將も、依然として十八世紀の古い戦略をそのまま使っていたのであります。土地を攻防の目標とし、広い正面に兵力を分散し、極めて慎重に戦いをやって行く方式をとっていたのです。このとき、フランス革命によって生じた軍制上、戦術上の変化を達観して、その直感力により新しい戦略を発見し、果敢に運用したのが不世出の軍略家ナポレオンであります。即ちナポレオンは当時の用兵術を無視して、要点に兵力を集めて敵線突破し、突破が成功すれば逃げる敵をどこまで

も追っかけて行って徹底的にやっつける。敵の軍隊を撃滅すれば戦争の目的は達成され、土地を作戰目標とする必要などは、なくなり
ます。

敵の大將は、ナポレオンが一点に兵を集めて、しゃにむに突進して来ると、そんなことは無理じゃないか、乱暴な話だ、彼は兵法を知らぬなどと言っている間に、自分はやられてしまった。だからナポレオンの戦争の勝利は対等のことをやっていたのではありません

在来と全く変わった戦略を巧みに活用したのであります。ナポレオンは敵の意表に出て敵軍の精神に一大電撃を加え、遂に戦争の神様になつてしまつたのです。白い馬に乗って戦場に出て来る。それだけで敵は精神的にやられてしまった。猫ににらまれた鼠のように、立ちすくんでしまいました。

それまでは三十年戦争、七年戦争など長い戦争が当り前であつたのに、数週間か数カ月で大きな戦争の運命を一挙に決定する決戦戦

ますと、「そんなら兵器の製造能力に革命が
 「新兵器はなかったのです」と言って頑張り
 新兵器があつたでしょう」と言われますから
 帝大の教授がたが、このことについて「何か

たした直接の原因であります。このあいだ、
 のです。社会制度の変化が軍事上の革命を来
 砲とナポレオンの使つたものとは大差がない
 のです。社会制度の変化が軍事上の革命を来

命で横隊戦術から散兵戦術に、持久戦争から
 決戦戦争に移つた直接の動機は兵器の進歩で
 はありません。フリードリヒ大王の使つた鉄
 砲とナポレオンの使つたものとは大差がない
 のです。社会制度の変化が軍事上の革命を来

争の時代になつたのであります。であります
 から、フランス革命がナポレオンを生み、ナ
 ポレオンがフランス革命を完成したと言うべ
 きです。

特に皆さんに注意していただきたいのは、

フランス革命に於ける軍事上の変化の直接原
 因は兵器の進歩ではなかつたことであります。

中世暗黒時代から文芸復興へ移るときに軍事

上の革命が起つたのは、鉄砲の発明という兵

器の関係でありました。けれどもフランス革

したとか、いい加減なことを言いますけれど
 淋病で活動が鈍ったとか、用兵の能力が低下
 まいました。世の中では末期のナポレオンは
 はドイツの兵隊に容易には勝てなくなっ
 にモスコー敗戦後は、遺憾ながらナポレオン
 術をまねし出しました。さあそうになると、殊
 ナポレオンの用兵を研究し、ナポレオンの戦
 はじめて夢からさめ、科学的性格を活かして
 エーナでナポレオンに徹底的にやられてから
 うぬぼれていたのでしたが、一八〇六年、イ

プロイセン軍はフリードリヒ大王の偉業に
 れを阻止していたと見る事ができます。
 ったのに、社会制度がフランス革命まで、こ
 し兵器の進歩は既に散兵の時代となりつつあ
 くて現実には都合が悪いらしいのですが、都合が悪
 者には都合が悪いらしいのですが、都合が悪
 ランス革命を来たしたことにしなければ、学
 ざるを得ないので。兵器の進歩によってフ
 し、そんなこともありませんでした」と答え
 あったのでしうか」と申されます。「しか

も、ナポレオンの軍事的才能は年とともに発
 達したのです。しかし相手もナポレオンのや
 ることを覚えてしまったのです。人間はそん
 なに違うものではありません。皆さんの中に
 も、秀才と秀才でない人がありましよう。け
 れども大した違いではありません。ナポレオ
 ンの大成功は、大革命の時代に世に率先して
 新しい時代の用兵術の根本義をとらえた結果
 であります。天才ナポレオンも、もう二十年
 後に生まれればなら、コルシカの砲兵隊長ぐら
 いで死んでしまったらと思うます。諸君
 のように大きな変化の時代に生まれた人は非
 常に幸福であります。この幸福を感謝せねば
 なりません。ヒットラーやナポレオン以上に
 なれる特別な機会に生まれたのです。
 フリードリヒ大王とナポレオンの用兵術を
 徹底的に研究したクラウゼウィッツというド
 イツの軍人が、近代用兵学を組織化しました。
 それから以後、ドイツが西洋軍事学の主流に
 なります。そうしてモルトケのオーストリア

して四年半の持久戦争になりました。
 しかし今日、静かに研究して見ると、第一
 変っているのです。あらゆる人間の予想に反
 らまで、そう思ったときには、もう世の中は
 って欧州戦争を迎えたのであります。ぼんく
 誰も彼も戦争は至短期間に解決するのだと思
 は決戦戦争発達の頂点に於て勃発したのです。
 前に死んでおります。つまり第一次欧州大戦

第五節 第一次欧州大戦

シュリーフェンは一九一三年、欧州戦争の
 して、欧州戦争に向ったのであります。

との戦争（一八六六年）、フランスとの戦争
 （一八七〇―七一年）など、すばらしい決戦
 戦争が行なわれました。その後シュリーフェ
 ンという参謀総長が長年、ドイツの参謀本部
 を牛耳っておりまして、ハンニバルのカンネ
 会戦を模範とし、敵の両翼を包囲し騎兵をそ
 の背後に進め敵の主力を包囲殲滅（せんめつ）
 すべきことを強調し、決戦戦争の思想に徹底
 して、

次欧州大戦前に、持久戦争に対する予感が潜在し始めていたことがわかります。ドイツでは戦前すでに「経済動員の必要」が論ぜられておりました。またシュリーフェンが参謀総長として立案した最後の対仏作戦計画である一九〇五年十二月案には、アルザス・ロートリンゲン地方の兵力を極端に減少してベルダンを以西に主力を用い、パリを大兵力をもって攻囲した上、更に七軍団（十四師団）の強大な兵団をもってパリ西南方から遠く迂回し、敵主力の背後を攻撃するという真に雄大なものでありました（二五頁の図参照）。ところが一九〇六年に参謀総長に就任したモルトケ大将の第一次欧州大戦初頭に於ける対仏作戦は、御承知の通り開戦初期は破竹の勢いを以てベルギー、北フランスを席捲して長駆マル又河畔に進出し、一時はドイツの大勝利を思わせたのでありましたが、ドイツ軍配置の重点はシュリーフェン案に比して甚だしく東方に移り、その右翼はパリにも達せず、敵のパ

回作戦を不徹底ならしめたのは、モルトケ大
 兵力増加の原因であります。また大規模な迂
 と判断されるに至ったことが、この方面への
 業地帯であるザール地方への攻勢をとるもの
 のに、その後、フランス軍はドイツの重要産
 代にはフランス軍は守勢をとると判断された
 いたことを認めます。即ちシュリーフェン時
 対する予感が無意識のうちに力強く作用して
 算が、必ずしも絶無でなかったと思われませ
 しかし私は、この計画変更にも持久戦争に

も決戦戦争となつて、ドイツの勝利となる公
 十分な準備があつたならば、第一次欧州大戦
 ン案を決行する鉄石の意志と、これに対する
 なものと言わねはなりません。シュリーフェ
 したドイツの作戦計画としては、甚だ不徹底
 しかにモルトケ大将の案は、決戦戦争を企図
 は、大いに批難されているのであります。た
 となりました。この点についてモルトケ大将
 敗れて後退のやむなきに至り、遂に持久戦争
 リ方面よりする反撃に遇（あ）うともろくも

将が、シュリーフェン元帥の計画では重大事件であったオランダの中立侵犯を断念したことが、最も有力な原因となっているものと私は確信いたします。ザール鉱工業地帯の掩護（えんご）、特にオランダの中立尊重は、戦争持久のための経済的考慮によったのであります。即ち決戦を絶叫しつつあったドイツ参謀本部首脳部の胸の中に、彼らのはっきり自覚しない間に持久戦争的考慮が加わりつつあったことは甚だ興味深いものと思えます。

「#底本25頁に「ドイツの対仏作戦に於ける軍主力の前進方向」の図がある」

四年半は三十年戦争や七年戦争に比べて短いようでありますが緊張が違う。昔の戦争は三十年戦争などと申しましても中間に長い休みがあります。七年戦争でも、冬になれば傭兵を永く寒い所に置くと皆逃げてしまいますから、お互いに休むのです。ところが第一次欧州戦争には徹底した緊張が四年半も続きました。

四年余の持久戦争でしたが、十八世紀頃の戦戦から持久戦争に変わったのであります。戦では兵器の進歩と兵力の増加によって、決戦戦争になったのでしたが、第一次欧州大変化を及ぼして、戦争の性質が持久戦争から決戦戦争になったのでしたが、第一次欧州大

フランス革命のときは社会の革命が戦術に持久戦争になったのであります。戦線は兵力の増加によってスイスから北海までのびているので迂回することもできない。突破もできなければ迂回もできない。それで持久戦争になったのであります。

ばと言つて敵の背後に迂回しようとするとなつたのです。それで正面が抜けない。され

なぜ持久戦争になったかと申しますと、第一に兵器が非常に進歩しました。殊に自動火器――機関銃は極めて防禦に適当な兵器であります。だからして簡単には正面が抜けない。第二にフランス革命の頃は、国民皆兵でも兵数は大して多くなかったのですが、第一次欧州戦争では、健康な男は全部、戦争に出る。歴史で未だかつてなかったところの大兵力となつたのです。それで正面が抜けない。され

持久戦争のように会戦を避けることはなく決戦が連続して行なわれ、その間に自然に新兵器による新戦術が生まれました。

砲兵力の進歩が敵散兵線の突破を容易にするので、防者は数段に敵の攻撃を支えることとなり、いわゆる数線陣地となりましたが、それでは結局、敵から各個に撃破される危険があるため、逐次抵抗の数線陣地の思想から自然に面式の縦深防禦の新方式が出てきました。

「#底本27頁、左上に図あり」
すなわち自動火器を中心とする一分隊ぐらい（戦闘群）の兵力が大間隔に陣地を占め、さらにこれを縦深に配置するのであります（上図参照）。このような兵力の分散により敵の砲兵火力の効力を減殺するのみならず、この縦深に配置された兵力は互に巧妙に助け合うことによつて、攻者は単に正面からだけでなく前後左右から不規則に不意の射撃を受ける結果、攻撃を著しく困難にします。

こうなると攻撃する方も在来のような線の敵兵では大損害を受けますから、十分縦深に疎開し、やはり面の戦力を発揮することにとめます。横隊戦術は前に申しましたように専制をその指導精神としたのに対し、散兵戦術は各兵、各部隊に十分な自由を与え、その自主的活動を奨励する自由主義の戦術であります。しかるに面式の防禦をしている敵を攻撃するに各兵、各部隊の自由にまかせて置いては大きな混乱に陥るから、指揮官の明確な統制が必要となりました。面式防禦をするのには、一貫した方針に基づく統制が必要であります。

即ち今日の戦術の指導精神は統制であります。しかし横隊戦術のように強権をもって各兵の自由意志を押えて盲従させるものとは根本に於て相違し、各部隊、各兵の自主的、積極的、独断的活動を可能にするために明確な目標を指示し、混雑と重複を避けるに必要な統制を加えるのであります。自由を抑制する

第六節 第二次欧州大戦

きな疑問を生じて参りました。

ましたが、最近はドイツ軍の大成功により大

にも誰もが持久戦争になるだろうと考えてい

いうのが常識になり、第二次欧州大戦の初期

力戦で、武力のみでは戦争の決がつかないと

明らかになり、数年来は戦争は長期戦争・総

魂をもつてせば即戦即決が可能であるという

勇ましい議論も盛んでありましたが、真相が

は西洋人の精神力の薄弱に基づくもので大和

ております。

また第一次欧州大戦中に、戦争持久の原因

採用し、今日、熱心にその研究訓練に邁進し

犠牲をまぬがれた日本は一番遅れて新戦術を

大きな進歩の動機となりました。欧州大戦の

然に発生し、戦後は特にソ連の積極的研究が

右のような新戦術は第一次欧州大戦中に自

めであるとは申すべきです。

ための統制ではなく、自由活動を助長するた

敵フランスに停戦を乞わしめるに至りました。これを抜き、オランダ侵入以来わずか五週間で強てマジノ線以西の地区からパリに迫ってこれを打ち、これを撃滅し、更に矛（ほこ）を転じベルギーに進出した仏英の背後に迫り、たちまち、これを撃滅し、更に矛（ほこ）を転じてマジノ線以西の地区からパリに迫ってこれを抜き、オランダ侵入以来わずか五週間で強敵フランスに停戦を乞わしめるに至りました。

第二次欧州大戦では、ドイツのいわゆる電撃作戦がポーランド、ノールウェーのような弱小国に対し迅速に決戦戦争を強行し得たことは、もちろん異とするに足りません。しかし仏英軍との間には恐らくマジノ、ジークフリートの線で相對峙し、お互にその突破が至難で持久戦争になるものと考えたのであります。ドイツがオランダ、ベルギーに侵入することはあっても、それは英国に対する作戦基地を得るためで、連合軍の主力との間に真の大決戦が行なわれるだろうとは考えられませんでした。しかるに五月十日以来のドイツの猛撃は瞬時にオランダ、ベルギーを屈伏せしめ難攻と信ぜられたマジノ延長線を突破して、

即ち世界史上未曾有の大戦果を挙げ、フランスに対しても見事な決戦戦争を遂行したのであります。しからば、果してこれが今日の戦争の本質であるかと申せば、私は、あえて「否」と答えます。

第一次欧州大戦に於ては、ドイツの武力は連合軍に比し多くの点で極めて優秀でありましたが、兵力は遥かに劣勢であり、戦意は双方相譲らない有様で大体互角の勝負でありました。ところがヒットラーがドイツを支配し

て以来、ドイツは真に挙国一致、全力を挙げ、て軍備の大拡充に努力したのに対し、自由主義の仏英は漫然これを見送ったために、空軍は質量共に断然ドイツが優勢であることは世界がひとしく認めていたのであります。今度いよいよ戦争の幕をあけて見ると、ドイツ機械化兵団が極めて精鋭且つ優勢であるのみならず、一般師団の数も仏英側に対しドイツは恐らく三分の一以上も優勢を保持しているらしいのです。しかも英雄ヒットラーにより全

国力が完全に統一運用されているのに反し、数年前ドイツがライン進駐を決行したとき、フランスが断然ベルサイユ条約に基づきドイツに一撃を加えることを主張したのに対し、英国は反対し、その後も作戦計画につき事毎に意見の一致を見なかつたと信ぜられます。フランスの戦意はこんな関係で第一次欧州大戦のようではなく、マジノ延長線も計画に止まり、ほとんど構築されていなかっただらしいのです。

戦力の著しく劣勢なフランスは、国境で守勢をとるべきだと思われます。恐らく軍当局はこれを欲したのでしようが、政略に制せられてベルギーに前進し、この有力なベルギー派遣軍がドイツの電撃作戦に遇（あ）つて徹底的打撃を受け、英軍は本国へ逃げかえりました。英国が本気でやる気なら、本国などは海軍に一任し全陸軍はフランスで作戦すべきであります。英仏の感情は恐らく極めて不良となったことと考えられます。かくてド

イツが南下するや、仏軍は遂に抵抗の実力なく、名将ペタン將軍を首相としてドイツに降伏しました。

このように考えますと、今次の戦争は全く互格の勝負ではなく、連合側の物心両面に於ける甚だしい劣勢が必然的にこの結果を招いたのであります。そもそも持久戦争は大体互格の競争力を有する相手の間に於てのみ行なわれるものです。第一次欧州大戦では開戦初期の作戦はドイツの全勝を思わせたのでしたが、マルヌで仏軍の反撃に敗れ、また最後の一九一八年のルーデンドルフの大攻勢では、北フランスに於ける戦場付近で仏英軍に大打撃を与え、一時は全く敵を中断して戦争の運命を決し得るのではないかとさえ見えたのでしたが、遂に失敗に終わりました。両軍は大体互格で持久戦争となり、ドイツは主として經濟戦に敗れて遂に降伏したのであります。フィンランドはソ連に屈伏はしたものの、極めて劣勢の兵力で長時日ソ連の猛撃を支え

した通りであります。やがて次の決戦戦争
 質はまだ持久戦争の時代であることは前に申
 で所々に決戦戦争が行なわれても、時代の本
 争の時代に呼吸しています。第二次欧州戦争
 言えは戦闘群の戦術、戦争から言えは持久戦

われわれは第一次欧州大戦以後、戦術から

第二章 最終戦争

れます。

が多く、まだ持久戦争の時代であると観察さ

日も依然として至難で、戦争持久に陥る公算
 十分の戦備と決心を以て戦う敵線の突破は今
 空軍の大進歩、戦車の進歩などがあります。が

子です。現在は第一次欧州大戦に比べると、
 に遇い、容易には敵線を突破できなかった様

から敵の正面を攻めたドイツ軍は大きな抵抗
 まだ詳細は判りませんが、ブリュッセル方面
 るかを示しました。またベルギー戦線でも、
 今日兵器に対しても防禦威力の如何に大な

集隊形の指揮単位は大隊です。今のようにはなかつたのでありますが、理屈としては密

変化したかと言うと、必ずしも公式の通りで
 （三次元）の戦法であると想像されます。

それでは戦闘の指揮単位はどういうふう
 あり、戦闘群の戦法は面の戦術であります。

陣は点であり横隊は実線であり散兵は点線
 あります。これを幾何学的に観察すれば、方
 ら横隊になり散兵になり戦闘群になったの
 になります。

戦術の変化を見ますと、密集隊形の方陣か
 底すれば老若男女全部、戦争に参加すること
 次の戦争では男ばかりではなく女も、更に徹
 は全部戦争に参加するのでありますが、この
 う。まず兵数を見ますと今日では男という男
 これを今までのことから推測して考えましょ
 観察によって疑いのないところであります。
 その決戦戦争がどんな戦争であるだろうか
 の時代に移ることは、今までお話した歴史的

よう。われわれは体以上のもの、即ち四次元戦法即ち空中戦を中心としたものであります。とです。そうして、その戦争のやり方は体の民の持っている戦争力を全部最大限に使うことです。そうして、その戦争のやり方は体の民の持っている戦争力を全部最大限に使うこと

と考えるのが至当であろうと思います。単位は個人で量は全国民ということとは、国民の持っている戦争力を全部最大限に使うこととです。そうして、その戦争のやり方は体の民の持っている戦争力を全部最大限に使うこと

では明瞭に分隊——通常は軽機一挺（ちよう）と鉄砲十何挺を持っている分隊が単位であります。大隊、中隊、小隊、分隊と逐次小さくなって来た指揮単位は、この次は個人になると考えるのが至当であろうと思います。単位は個人で量は全国民ということとは、国民の持っている戦争力を全部最大限に使うこととです。そうして、その戦争のやり方は体の民の持っている戦争力を全部最大限に使うこと

は小隊になったのであります。戦闘群の戦術長ではとても号令は通らないので、小隊長が号令を掛けねばいけません。それで指揮単位は小隊になったのであります。戦闘群の戦術指揮単位は中隊です。次の散兵となると中隊長ではとても号令は通らないので、小隊長が号令を掛けねばいけません。それで指揮単位は小隊になったのであります。戦闘群の戦術

声器が発達すれば「前へ進め」と三千名の連隊を一斉に動かし得るかも知れませんが、肉声では声のよい人でも大隊が単位です。われわれの若いときに盛んにこの大隊密集教練をやったものであります。横隊になると大隊ではどんな声のよい人でも号令が通りません。指揮単位は中隊です。次の散兵となると中隊長ではとても号令は通らないので、小隊長が

の世界は分からないのです。そういうものが
 あるならば、それは恐らく霊界とか、幽霊な
 どの世界でしょう。われわれ普通の人間には
 分からないことです。要するに、この次の決
 戦戦争は戦争発達の極限に達するのでありま
 す。
 戦争発達の極限に達するこの次の決戦戦争
 で戦争が無くなるのです。人間の闘争心は無
 くなりません。闘争心が無くならなくて戦争
 が無くなるとは、どういふことか。国家の対
 立が無くなる――即ち世界がこの次の決戦戦
 争で一つになるのであります。
 これまでの私の説明は突飛だと思ふ方があ
 るかも知れませんが、私は理論的に正しいも
 のであることを確信いたします。戦争発達の
 極限が戦争を不可能にする。例えば戦国時代
 の終りに日本が統一したのは軍事、主として
 兵器の進歩の結果であります。即ち戦国時代
 の末に信長、秀吉、家康という世界歴史でも
 最も優れた三人の偉人が一緒に日本に生まれ

て来ました。三人の協同作業です。信長が、あの天才的な閃（ひらめ）きで、大革新を妨げる堅固な殻を打ち割りしました。割った後もあまり天才振りを発揮されると困ります。それで明智光秀が信長を殺した。信長が死んだのは用事が終わったからであります。それで秀吉が荒削りに日本の統一を完成し、朝鮮征伐までやって統一した日本の力を示しました。そこに家康が出て来て、うるさい婆さんのように万事キチンと整頓してしまった。徳川が信長や秀吉の考えたような皇室中心主義を実行しなかったのは遺憾千万ですが、この三人で、ともかく日本を統一したのであります。なぜ統一が可能であったかと言えば、種子島へ鉄砲が来たためです。いくら信長や秀吉が偉くても鉄砲がなくて、槍と弓だけであったならば旨く行きません。信長は時代を達観して尊皇の大義を唱え、日本統一の中心点を明らかにしましたが、彼は更に今の堺（さかい）から鉄砲を大量に買い求めて統一の基礎作業

を完成しました。

今の世の中でも、もしもピストル以上の飛び道具を全部なくしたならば、選挙のときには恐らく政党は演壇に立って言論戦なんかやりません。言論では勝負が遅い。必ず腕力を用いることになります。しかし警察はピストルを持っている。兵隊さんは機関銃を持っている。いかに剣道、柔道の大家でも、これではダメだ。だから甚だ迂遠な方法であるが、言論戦で選挙を争っているのです。兵器の発

達が生の中を泰平にしているのです。この次の、すごい決戦戦争で、人類はもうとても戦争をやることはできないということになる。そこで初めて世界の人類が長くあこがれていた本当の平和に到着するのであります。

要するに世界の一地方を根拠とする武力が全世界の至るところに対し迅速にその威力を発揮し、抵抗するものを屈伏し得るようになります。世界は自然に統一することとなります。しからばその決戦戦争はこういう形を取る

な国家の施設が攻撃目標となります。工業都
 目標でありませぬ。最も弱い人々、最も大事
 の精神で死を決心している軍隊などは有利な
 いよいよ真の決戦戦争の場合には、忠君愛国
 施設を爆撃したとか言っておりますけれども
 せんから、無防禦の都市は爆撃しない。軍事
 戦でも空軍による決戦戦争の自信力がありま
 いものは全国民となるのです。今日の欧州大
 た軍隊であります。我慢しなければならな
 次の決戦戦争では敵を撃つものは少数の優れ
 え忍ぶことでもあります。この見地からすると

かを想像して見ます。戦争には老若男女全部
 参加する。老若男女だけではない。山川草木
 全部、戦争の渦中に入るのです。しかし女や
 子供まで全部が満州国やシベリヤ、または南
 洋に行つて戦争をやるものではありません。戦
 争には二つのことが大事です。
 一つは敵を撃つこと――損害を与えること。
 もう一つは損害に対して我慢することです。
 即ち敵に最大の損害を与え、自分の損害に堪
 え忍ぶことでもあります。この見地からすると

ません。それかと言って今の空軍ではとても
 のろと十日も二十日もかかっては問題になり
 ダメであります。軍艦のように太平洋をのろ
 それ動員だ、輸送だなど間ぬるいことでは
 いだは、最後の決戦戦争にはならないのです。
 今日のように陸海軍などが存在しているあ

を強行せねばなりません。
 於ける中等学校以上の全廃（教育制度の根本
 革新）、工業の地方分散等により都市人口の
 大整理を行ない、必要な部分は市街の大改築

を強く提案致します。官憲の大整理、都市に
 主要都市の根本的防空対策を断行すべきこと
 た自覚により国家は遅くも二十年を目途とし
 ことは周知の事実であります。国民の徹底し
 りません。また今日の建築は危険極まりない
 状に堪え得る鉄石の意志を鍛錬しなければな
 徹底した殲滅戦争となります。国民はこの惨
 じにやられるのです。かくて空軍による真に
 市や政治の中心を徹底的にやるのです。であ

ダメです。また仮に飛行機の発達により今、ドイツがロンドンを大空襲して空中戦で戦争の決をつけ得るとしても、恐らくドイツとロシアの間では困難であります。ロシアと日本の日本とアメリカが飛行機で決戦するのはまだまだ遠い先のことであります。一番遠い太平洋を挟んで空軍による決戦の行なわれる時が、人類最後の一大決勝戦の時であります。即ち無着陸で世界をぐるぐる廻れるような飛行機ができる時代であります。それから破壊の兵器も今度の欧州大戦で使っているようなものでは、まだ問題になりません。もつと徹底的な、一発あたると何万人もがペチヤンコにやられるところの、私どもには想像もされないような大威力のものができねはなりません。

飛行機は無着陸で世界をクルグル廻る。しかも破壊兵器は最も新鋭なもの、例えば今日戦争になって次の朝、夜が明けて見ると敵国

の首府や主要都市は徹底的に破壊されている。その代り大阪も、東京も、北京も、上海も、廃墟になっておりましよう。すべてが吹き飛んでしまおう。それぐらいの破壊力のものである。そうなる。戦争は短期間に終る。それ精神総動員だ、総力戦だなどと騒いでいる間は最終戦争は来ない。そんなまぬるいのは持久戦争時代のことで、決戦戦争では問題にならない。この次の決戦戦争では降ると見て笠取るひまもなくやつつけてしまおうのです。このような決戦兵器を創造して、この惨状にどこまでも堪え得る者が最後の優者であります。

第三章 世界の統一

西洋歴史を大観すれば、古代は国家の対立からローマが統一したのであります。それから中世はそれをキリスト教の坊さんが引受け、彼らが威力を失いますと、次には新しい

特の活躍をなしつつあるソ連の實力は絶対に
 驗に基づき、特に第二次欧州戦争に乗じ、独
 世界の魅力は失われましたが、二十年来の経
 の連合体であります。マルクス主義に対する
 第一はソビエト連邦。これは社会主義国家

大体、世界は四つになるようであります。
 の時代までは逆転しないで、国家連合の時代
 になったと私どもは言っているのであります。
 は達しかねて、国際連盟は空文になったので
 す。しかし世界は欧州戦争前の国家主義全盛

ることとなりました。けれども急に理想まで
 び世界主義である国際連盟の実験が行なわれ
 欧州戦争の深刻な破壊の体験によって、再

を迎えました。
 国家主義の全盛時代になって第一次欧州戦争
 でありますが、結局それは目的を達しない
 ナポレオンは本当に世界主義を理想としたの
 一時、世界主義が唱導されました。ゲーテや
 んだん発展して来て、フランス革命のときは
 国家が発生してまいりました。国家主義がだ

るといふことが、再びヨーロッパ人の真剣な度の大破局に当ってヨーロッパの連合体を作らなからぬ。今まで行かないでウヤムヤになったのです。今熱意を見せたのであります。とうとうそこストレーゼマンという政治家も、その実現に導きまして、フランスのブリアン、ドイツの州戦争が終りましてから、オーストリアのクレーデンホーフが汎ヨーロッパのことを唱導しまして、フランスのブリアン、ドイツの伏後に於けるドイツの態度から見ても、このことは間違いないと信ぜられます。第一次欧州戦争が終りましてから、オーストリアのクレーデンホーフが汎ヨーロッパのことを唱導しまして、フランスのブリアン、ドイツの

理想であるだろうと思ひます。フランスの屈辱に於けるドイツの態度から見ても、このことは間違いないと信ぜられます。第一次欧州戦争が終りましてから、オーストリアのクレーデンホーフが汎ヨーロッパのことを唱導しまして、フランスのブリアン、ドイツの伏後に於けるドイツの態度から見ても、このことは間違いないと信ぜられます。第一次欧州戦争が終りましてから、オーストリアのクレーデンホーフが汎ヨーロッパのことを唱導しまして、フランスのブリアン、ドイツの

た。トルコ駐在のドイツ大使フォン・パーペンがドイツに帰る途中、イスタンブールで新聞記者にドイツの戦争目的如何という質問を受けた。ナチでないのでありますから、比較的慎重な態度を採らなければならぬパーペンが、言下に「ドイツが勝つたならばヨーロッパ連盟を作るのだ」と申しました。ナチスの世界観である「運命協同体」を指導原理とするヨーロッパ連盟を作るのが、ヒットラーの理想であるだろうと思ひます。フランスの屈辱に於けるドイツの態度から見ても、このことは間違いないと信ぜられます。第一次欧州戦争が終りましてから、オーストリアのクレーデンホーフが汎ヨーロッパのことを唱導しまして、フランスのブリアン、ドイツの

っていたのです。強大な実力を有する国家がヨーロッパにしかない時代に、英国は制海権を確保してヨーロッパから植民地に行く道を独占し、更にヨーロッパの強国同士を絶えず喧嘩させて、自分の安全性を高めて世界を支配していたのです。

今度の事変を契機として新しい世界の趨勢に即応したものに進展することを信ずるものであります。今日の世界の形勢に於て、科学文明に立ち遅れた東亜の諸民族が西洋人と太刀打ちしようとするならば、われわれは精神力道義力によつて提携するのが最も重要な点でありますから、聡明な日本民族も漢民族も、もう間もなく大勢を達観して、心から諒解するようになるだろうと思ひます。

もう一つ大英帝国というブロックが現実にはあるのであります。カナダ、アフリカ、インド、オーストラリア、南洋の広い地域を支配してあります。しかし私は、これは問題にならないと見ております。あれは十九世紀で終

思ったときに東洋の一角では日本が相当なも
 おしまいであったのです。まあ、やれやれと
 ました。しかしこの名誉を得たときが実は、
 諸国家の争覇戦に於ける全勝の名誉を獲得し

英国は第一次欧州戦争の勝利により、欧州
 ります。諸国家の争覇戦に於ける全勝の名誉を獲得し
 ました。しかしこの名誉を得たときが実は、
 諸国家の争覇戦に於ける全勝の名誉を獲得し

年前、世界政策に乗り出して以来、スペイン
 ます。幸いにドイツをやっつけました。数百
 す。それが第一次欧州大戦の根本原因であり

とところが十九世紀の末から既に大英帝国の
 鼎（かなえ）の軽重は問われつつあった。殊
 にドイツが大海軍の建設をはじめただけでな
 く、三B政策によって陸路ベルリンからバグ
 ダッド、エジプトの方に進んで行こうとする
 に至って、英国は制海権のみによってはドイ
 ツを屈伏させることが怪しくなってきたので
 す。それが第一次欧州大戦の根本原因であり

しろうと考えて考えて見ると、アジアの西部

人類の歴史を、学問的ではありませんが、

と思いません。私の想像では東亜と米州だろうと

でありませぬ。それが準決勝で優勝戦に残るか
 と言え、私の想像では東亜と米州だろうと
 二つの代表的勢力となるものと考えられるの
 でありませぬ。それが準決勝で優勝戦に残るか
 と言え、私の想像では東亜と米州だろうと

ちつつも、大体は米州に多く傾くように判断
 されませぬが、われわれの常識から見れば結局
 二つの代表的勢力となるものと考えられるの
 でありませぬ。それが準決勝で優勝戦に残るか
 と言え、私の想像では東亜と米州だろうと

つあります。この国家連合の時代には、英帝国のよう
 分散した状態ではいけないので、どうしても
 地域的に相接触したものが一つの連合体にな
 ることが、世界歴史の運命だと考えます。そ
 して私は第一次欧州大戦以後の国家連合の時
 代は、この次の最終戦争のための準決勝戦時
 代だと観察しているのであります。先に話し
 ました四つの集団が第二次欧州大戦以後は恐
 らく日、独、伊即ち東亜と欧州の連合と米州
 との対立となり、ソ連は巧みに両者の間に立

地方に起った人類の文明が東西両方に分かれて進み、数千年後に太平洋という世界最大の海を境にして今、顔を合わせたのです。この二つが最後の決勝戦をやる運命にあるのではないでしようか。軍事的にも最も決勝戦争の困難なのは太平洋を挟んだ両集団であります。軍事的見地から言っても、恐らくこの二つの集団が準決勝に残るのではないかと私は考えます。

そういう見当で想像して見ますと、ソ連は非常に勉強して、自由主義から統制主義に飛躍する時代に、率先して幾多の犠牲を払い幾百万の血を流して、今でも国民に驚くべき大犠牲を強制しつつ、スターリンは全力を尽しておられますけれども、どうもこれは瀬戸物のようではないか。堅いけれども落とすと割れそうだ。スターリンに、もしものことがあるならば、内部から崩壊してしまうのではなからうか。非常にお気の毒ではありますが、でも。

それからヨーロッパの組はドイツ、イギリス、それにフランスなど、みな相当なものです。とにかく偉い民族の集まりです。しかし偉くても場所が悪い。確かに偉いけれどもそれが隣り合わせている。いくら運命協同体を作ろう、自由主義連合体を作ろうと言ったところ、考えはよろしいが、どうも喧嘩はヨーロッパが本家本元であります。その本能が何と言っても承知しない、なぐり合いを始め。因業な話で共倒れになるのじゃないか。

ヒットラー統率の下に有史以来未曾有の大活躍をしている友邦ドイツに対しては、誠に失礼な言い方と思いますが、何となくこのように考えられます。ヨーロッパ諸民族は特に反省することが肝要と思えます。そうなって来ると、どうも、ぐうたらのような東亜のわれわれの組と、それから成金のようでキザだけれども若々しい米州、この二つが大体、決勝に残るのではないか。この両者が太平洋を挟んだ人類の最後の大決戦、極端な大戦争をや

紘一字の御精神を拝すれば、天皇が東亜連盟
 連盟が真に完成した日であります。しかし八
 諸民族から盟主と仰がれる日こそ、即ち東亜
 掛けねばならぬことでもあります。天皇が東亜
 御位置を信仰するに至ることを妨げぬよう心
 犠牲を甘受して、東亜諸民族が心から天皇の
 につれ、国民は特に謙讓の徳を守り、最大の
 意して頂きたいのは、日本の国力が増進する
 堅い信仰であります。今日、特に日本人に注
 で世界の天皇と仰がれることは、われわれの

れた天皇が、間もなく東亜連盟の盟主、次い
 悠久の昔から東方道義の道統を伝持遊ばさ
 きかが決定するのであります。
 霸道の、いずれが世界統一の指導原理たるべ
 思うのであります。即ち東洋の王道と西洋の
 人類の最も重大な運命が決定するであろうと
 力の大統領が世界を統制すべきものかという
 世界の天皇で在らせらるべきものか、アメリ
 期間でバタバタと片が付く。そうして天皇が
 ります。その戦争は長くは続きません。至短

くの人に聞いて見ると大体の結論は五十年内
 言う。今度はどのくらいの見当だろうか。多
 るか。千年、三百年、百二十五年の割合から
 戦争の時期までどのくらいと考えるべきであ
 推して、第一次欧州戦争の初めから次の最終
 である。千年、三百年、百二十五年から
 から第一次欧州戦争までは明確に百二十五年
 であります。千年、三百年、百二十五年から
 推して、第一次欧州戦争の初めから次の最終
 戦争の時期までどのくらいと考えるべきであ
 るか。千年、三百年、百二十五年の割合から
 言う。今度はどのくらいの見当だろうか。多
 くの人に聞いて見ると大体の結論は五十年内

の盟主、世界の天皇と仰がれるに至っても日
 本国は盟主ではありません。
 しからは最終戦争はいつ来るか。これも、
 まあ占いのようなもので科学的だとは申しま
 せんが、全くの空想でもありません。再三申
 しました通り、西洋の歴史を見ますと、戦争
 術の大きな変転の時期が、同時に一般の文化
 史の重大な変化の時期であります。この見地
 に立って年数を考えますと、中世は約一千年
 くらい、それに続いてルネッサンスからフラ
 ンス革命までは、まあ三百年乃至四百年。こ
 れも見方によって色々の説もありましようが
 大体こういう見当になります。フランス革命
 から第一次欧州戦争までは明確に百二十五年
 であります。千年、三百年、百二十五年から
 推して、第一次欧州戦争の初めから次の最終
 戦争の時期までどのくらいと考えるべきであ
 るか。千年、三百年、百二十五年の割合から
 言う。今度はどのくらいの見当だろうか。多
 くの人に聞いて見ると大体の結論は五十年内

く実現することと信じます。科学の進歩から
 というのであります。成層圏の征服も間もな
 今年はアメリカの旅客機が亜成層圏を飛ぶ

ん。

べきでないことを深く考えなければなりません。
 であり、今日までの常識で将来を推しはかる
 ます。文明の急激な進歩は全く未曾有の勢い
 内外、しかも飛躍的進歩は、ここ数年であり
 何年、本当の飛行機らしくなってから二十年
 考えてご覧なさい。飛行機が発明されて三十

になります。余りに短いようでありませんが、
 ち最終戦争の時期に入るだろう、ということ
 十数年、まあ三十年内外で次の決戦戦争、即
 から二十数年経過しております。今日から二
 ところが第一次欧州戦争勃発の一九一四年
 断せざるを得なくなつたのであります。
 ども結局、極く長く見て五十年内だろうと判
 分になり、最初は七十年とか言いましたけれ
 これは余り短いから、なるべく長くしたい気
 外だろうということになつたのであります。

た次第であります。

なるだろう。こういうふうには算盤を弾いた次第であります。

戦の時期に入り、五十年以内に世界が一つになるだろう。こういうふうには算盤を弾いた次第であります。

えれば今から三十年内外で人類の最後の決勝戦の時代は二十年見当であろう。言い換

争がなくなり人類の前史が終るまで、即ち最終戦争の時代は二十年見当であろう。言い換えれば今から三十年内外で人類の最後の決勝戦の時期に入り、五十年以内に世界が一つになるだろう。こういうふうには算盤を弾いた次第であります。

この最終戦争の期間はどのくらい続くだろうか。これはまた更に空想が大きくなるのであります。例えば東亜と米州とで決戦をやると仮定すれば、始まったら極めて短期間で片付きます。しかし準決勝で両集団が残った

のであります。他にまだ沢山の相当な国々

があるので、本当に余震が鎮静して戦

争がなくなり人類の前史が終るまで、即ち最

終戦争の時代は二十年見当であろう。言い換

えれば今から三十年内外で人類の最後の決勝

戦の時期に入り、五十年以内に世界が一つに

フランス革命は持久戦争から決戦戦争、横隊戦術から散兵戦術に変わる大きな変革でありました。日本では、ちょうど明治維新時代がそれであります。第一次欧州大戦によって決戦戦争から持久戦争、散兵戦術から戦闘群の戦術に変化し、今日はフランス革命以後最大の革新時代に入り、現に革新が進行中であります。即ち昭和維新であります。第二次欧州大戦で新しい時代が来たように考える人が多いのですが、私は第一次欧州大戦によって展開された自由主義から統制主義への革新、即ち昭和維新の急進展と見るのであります。

「#底本47頁、左上に図あり」

昭和維新は日本だけの問題ではありません。本当に東亜の諸民族の力を総合的に発揮して西洋文明の代表者と決勝戦を交える準備を完了するのであります。明治維新の眼目が王政復古にあったが如く、廃藩置県にあった如く、昭和維新の政治的眼目は東亜連盟の結成にあ

い。この立ち後れた東亜がヨーロッパまたは米州の生産力以上の生産力を持たなければならぬ。この精神、この気持が最も大切であります。第二に、われわれの相手になるものに劣らぬ物質力を作り上げなければならぬ。この立ち後れた東亜がヨーロッパまたは米州の生産力以上の生産力を持たなければならぬ。

る。満州事変によってその原則は発見され、今日ようやく国家の方針となろうとしています。東亜連盟の結成を中心問題とする昭和維新のためには二つのことが大事であります（四七頁の図参照）。第一は東洋民族の新しい道徳の創造であります。ちようど、われわれが明治維新で藩侯に対する忠誠から天皇に対する忠誠に立ち返った如く、東亜連盟を結成するためには民族の闘争、東亜諸国の対立から民族の協和、東亜の諸国家の本当の結合という新しい道徳を生み出して行かなければならないのであります。その中核の問題は満州建国の精神である民族協和の実現にあります。この精神、この気持が最も大切であります。第二に、われわれの相手になるものに劣らぬ物質力を作り上げなければならぬ。この立ち後れた東亜がヨーロッパまたは米州の生産力以上の生産力を持たなければならぬ。

以上の見地からすれば、現代の国策は東亜連盟の結成と生産力大拡充という二つが重要な問題をなしております。科学文明の後進者であるわれわれが、この偉大な生産力の大拡充を強行するためには、普通の通り一遍の方式ではダメです。何とかして西洋人の及ばぬ大きな産業能力を発揮しなければならぬのであります。

このごろ亀井貫一郎氏の『ナチス国防経済論』という書物を読んで非常に心を打たれま

した。ドイツは原料が足りない。ドイツがベルサイユ体制でいじめられて、いじめ抜かれたことが、ドイツを本当に奮発させまして、二十年この方、特に十年この方、ドイツには第二産業革命が発生していると言うのです。

私には、よくは理屈が判りませんが、要するに常温常圧の工業から高温高压工業に、電気化学工業に変遷をして来る、そうして今までの原料の束縛からまぬがれてあらゆる物が容易に生産されるに至る驚くべき第二産業革

自由に成層圏にも行動し得るすばらしい航空
 いるピーピーの飛行機では問題にならない。
 勝戦に向っているのですありますが、今持って
 われわれはもう既に三十年後の世界最後の決
 建設的であります。破壊的とは何かと言うと
 すと思う。一つは破壊的であります。一つは
 この産業大革命は二つの方向に作用を及ぼ
 の産業大革命を強行するのであります。

要件でなければなりません。ドイツに先ん
 じて、むしろアメリカに先んじて、われわれ
 の産業大革命を強行するのであります。

であります。これが、われわれの国策の最重
 の産業力を迅速に獲得しなくてはならないの
 産業の発達を追い越して最新の科学、最優秀
 の全知能を総動員してドイツの科学の進歩、
 才のような顔をしております。断然われわれ
 し頭は良いのです。皆さんを見ると、みな秀
 れは非常に科学文明で遅れております。しか
 に突進できたのであろうと思えます。われわ
 対する確信があつてこそ今度ドイツが大戦争
 命が今、進行しているのであります。それに

嘩は時々ありますが、空気喧嘩をしてなぐり
 なりません。ふんだんにありますから。水喧
 れにとって最も大事な水や空気は喧嘩の種に
 資材をどんどん造ることでありませす。われわ
 い建設の方面は、原料の束縛から離れて必要
 と建設的であります。同時に産業革命の美し
 界は政治的に一つになる。これは大きく見る
 世界の人口は半分になるかも知れないが、世
 純な破壊ではありません。最後の大決勝戦で
 もう一つは建設方面であります。破壊も単

よう、いや余り過ぎて困るではありませんか
 皆さんに二十年の時間を与えます。十分でし
 当に戦争の準備をして数年にしかありません
 の態勢を整え得るのであります。ドイツが本
 それによって初めて三十年後の決勝戦に必勝
 らない驚くべき決戦兵器が生産されるべきで
 った、ドイツの今度の新兵器なんか比較にな
 できなければなりません。この産業革命によ
 た一挙に敵に殲滅的打撃を与える決戦兵器が
 機が速やかに造られなければなりません。ま

合ったということは、まず無いのです。必要なものは何でも、驚くべき産業革命でどしどし造ります。持たざる国と持てる国の区別がなくなり、必要なものは何でもできることになるのです。

しかしこの大事業を貫くものは建国の精神日本国体の精神による信仰の統一であります。政治的に世界が一つになり、思想信仰が統一され、この和やかな正しい精神生活をするための必要な物資を、喧嘩してまで争わなければならぬことがなくなります。そこで真の世界の統一、即ち八紘一宇が初めて実現するであろうと考える次第であります。もう病気はなくなり、今の医術はまだ極めて能力が低いのですが、本当の科学の進歩は病気をなくして不老不死の夢を実現するでしょう。

それで東亜連盟協会の「昭和維新論」には昭和維新の目標として、約三十年内外に決勝戦が起きる予想の下に、二十年を目標にして東亜連盟の生産能力を西洋文明を代表するも

のに匹敵するものにしなければならぬと言
 って、これを経済建設の目標にしているの
 あります。その見地から、ある権威者が米州
 の二十年後の生産能力の検討をして見たとこ
 ろによりますと、それは驚くべき数量に達す
 るのであります。詳しい数は記憶しておりま
 せんが、大体の見当は鋼や油は年額数億トン
 石炭に至っては数十億トンを必要とすること
 となり、とても今のような地下資源を使って
 やるところの文明の方式では、二十年後には
 完全に行き詰まります。この見地からも産業
 革命は間もなく不可避であり、「人類の前史
 將に終らんとす」という観察は極めて合理
 的であると思われるのであります。

第五章 仏教の予言

今度は少し方面を変えまして宗教上から見
 た見解を一つお話ししたいと思います。非科学
 的な予言への、われわれのあこがれが宗教の

ると思います。
 ます。私は宗教の最も大切なことは予言である
 と思います。
 が生まれ、今日の状態に持って来たのであり
 民が考えたときに、ヒットラーに対する信頼
 が数年の間に、どうも本当でありそうだと国
 民が考えたときに、ヒットラーに対する信頼
 が生まれ、今日の状態に持って来たのであり
 ます。私は宗教の最も大切なことは予言であ
 ると思います。

ともあの苦境を脱する着想が考えられなかつ
 たときに、彼はベルサイユ条約を打倒して必
 ず民族の復興を果し得る信念を懐いたのです。
 大切なのはヒットラーの見通しであります。
 最初は狂人扱いをされましたが、その見通し
 が数年の間に、どうも本当でありそうだと国
 民が考えたときに、ヒットラーに対する信頼
 が生まれ、今日の状態に持って来たのであり
 ます。私は宗教の最も大切なことは予言であ
 ると思います。

大きな問題であります。しかし人間は科学的
 判断、つまり理性のみを以てしては満足安心
 のできないものがあって、そこに予言や見通
 しに対する強いあこがれがあるのであります。
 今の日本国民は、この時局をどういうふう
 して解決するか、見通しが欲しいのです。予
 言が欲しいのです。ヒットラーが天下を取り
 ました。それを可能にしたのはヒットラーの
 見通しであります。第一次欧州戦争の結果、
 全く行き詰まってしまったドイツでは、何び

の通りであります。それで、お釈迦様の年代
 似通った時代です。末法というのは読んで字
 純粹に行なわれる時代で、像法は大体それに
 けます。正法と申しますのは仏の教えが最も
 （ぞうほう）・末法（まっぼう）の三つに分
 して仏様の時代を正法（しょうほう）・像法
 薩という御方が出て来るのだそうです。そう
 次の後継者をちゃんと予定している。弥勒菩
 永劫この世界を支配するではありません。
 お釈迦様の時代です。しかしお釈迦様は未来
 永劫この世界を支配するではありません。

の年代があるのです。例えば地球では今は、
 世界を支配しております。その仏様には支配
 その世界には必ず仏様が一人おられて、その
 ます。もつとよいのがあるかも知れません。
 ません。西方極楽浄土というよい世界があり
 の世界であります。その中には、どれか知れ
 ります。仏教から言えば、あれがみんな一つ
 と考えます。空を見ると、たくさん星があ
 ら見て最も雄大で精密を極めたものであろう
 仏教、特に日蓮聖人の宗教が、予言の点か

は、いろいろ異論もあるそうですが、多く信ぜられているのは正法千年、像法千年、末法万年、合計一万二千年であります（五三頁の表参照）。

「#底本53頁に図あり」

ところが大集経（だいしつきょう）という

お経には更にその最初の二千五百年の詳細な予言があるのです。仏滅後（お釈迦様が亡くなってから後）の最初の五百年が解脱（げだつ）の時代で、仏様の教えを守ると神通力が

得られて、靈界の事柄がよくわかるようになる時代であります。人間が純朴で直感が鋭い、よい時代であります。大乘經典はお釈迦様が書いたものでない。お釈迦様が亡くなられてから最初の五百年、即ち解脱の時代にいろいろな人によって書かれたものです。私はそれを不思議に思うのです。長い年月かかって多くの人が書いたお経に大きな矛盾がなく、一つの体系を持っているということとは、靈界に於て相通ずるものがあるから可能になった

与えました。その最高の仕事をしたのが天台も何回も読みこなして、それに一つの体系をお経を、支那人の大陸的な根気によって何回めなのです。インドで雑然と説かれた万卷の那に來たのはこの像法の初め、教学時代の初めなのです。インドで雑然と説かれた万卷のお経を、支那人の大陸的な根気によって何回も何回も読みこなして、それに一つの体系を与えました。その最高の仕事をしたのが天台

その次の像法の最初の五百年は読誦多聞（どくじゆたもん）の時代であります。教学の時代であります。仏典を研究し仏教の理論を研究して安心を得ようとしたのであります。瞑想の国インドから組織の国、理論の国、支

の人間を救ったのであります。

は、仏教が冥想の国インドで普及し、インドの人間を救ったのであります。正法千年にります。以上の千年が正法です。正法千年にります。以上の千年が正法です。正法千年に

代で、解脱の時代ほど人間が素直でなくなり、解脫の時代ほど人間が素直でなくなり、座禅によって悟りを開く時代でありますから、座禅によって悟りを開く時代であります。以上の千年が正法です。正法千年に

のだろうと思えます。大乘仏教は仏の説でな

いとて大乘経を軽視する人もありますが、大

乗經典が仏説でないことが却（かえ）って仏

教の靈妙不可思議を示すものと考えられます。

その次の五百年は禅定（ぜんじょう）の時

大師であります。天台大師はこの教学の時代に生まれ、現在でも多くの宗派の間で余り大きな異存はないのです。

その次の像法の後の五百年は多造塔寺（たぞうとうじ）の時代、即ちお寺をたくさん造った時代、つまり立派なお寺を建て、すばらしい仏像を本尊とし、名香を薫じ、それに綺麗な声でお経を読む。そういう仏教芸術の力によって満足を得て行こうとした時代であります。この時代になると仏教は実行の国日本に入ってきて来ました。奈良朝・平安朝初期の優れた仏教芸術は、この時に生まれたのであります。

次の五百年、即ち末法最初の五百年は闘争（とうじょう）時代であります。この時代になると闘争が盛んになって普通の仏教の力はもうなくなってしまうと、お釈迦様が予言しています。末法に入ると、叡山の坊さんは、ねじり鉢巻で山を降りて来て三井寺を焼打ち

その時になつたら自分が節刀將軍を出すから
 その命令に服従しろ、と言つて、お釈迦様は
 亡くなつていゝのです。末法に入つてから二
 百二十年ばかり過ぎたときに仏の予言によつ
 て日本に、しかもそれが承久の乱、即ち日本
 が未曾有の国体の大難に際会したときに、お
 母さんの胎内に受胎された日蓮聖人が、承久
 の乱に疑問を懐きまして仏道に入り、ご自分
 が法華經で予言された本化上行（ほんげじよ
 うぎょう）菩薩であるという自覚に達し、法
 華經に従つてその行動を律せられ、お經に述
 べてある予言を全部自分の身に現わされた。
 そして内乱と外患があるという、ご自身の予
 言が日本の内乱と蒙古の襲来によつて的中し
 たのであります。それで、その予言が実現す
 るに従つて逐次、ご自分の仏教上に於ける位
 置を明らかにし、予言の的中が全部終つた後
 みずから末法に遣わされた釈尊の使者本化上
 行だという自覚を公表せられ、日本の大国難
 である弘安の役の終つた翌年に亡くなられま

どれが本当か判らないと言つて、みずから慰
 日蓮聖人の門下は、歴史が曖昧で判らない、
 か否かという大問題が出現したというのに、
 ことになりませう。日蓮聖人の宗教が成り立つ
 すると日蓮聖人は予言された人でないという
 歴史的研究では像法に生まれたいらしい。そう
 に生まれて来なければならぬのに、最近の
 これは大変なことで、日蓮聖人は末法の初め
 年代に対する疑問が出て来たのであります。
 題が起きて来たのです。仏教徒の中に仏滅の

義が全面的に明らかになつたときに大きな問
 ところが不思議なことには、日蓮聖人の教
 組織的に明らかにされたのであります。
 つて田中智学先生によつて初めて全面的に、
 日蓮聖人の教え即ち仏教は、明治の御代にな
 即ち日本国体論を明らかにしました。それで
 聖人の宗教の組織を完成し、特に本門戒壇論
 れた田中智学先生が生まれて来まして、日蓮
 界的意義を持ちだしたときに、昨年亡くなら
 それで明治時代になりまして日本の国体が世

めています。そういう信者は結構でしょう。そうでない人は信用しない。一天四海皆帰妙法は夢となります。

この重大問題を日蓮聖人の信者は曖昧にして過ごしているのです。観心本尊鈔に「当二知ルベシ此ノ四菩薩、折伏（シヤクブク）ヲ現ズル時ハ賢王ト成ツテ愚王ヲ誠責（カイシヤク）シ、摂受（シヨウジユ）ヲ行ズル時ハ僧ト成ツテ正法ヲ弘持（グジ）ス」とあります。この二回の出現は経文の示すところによるも、共に末法の最初の五百年であると考えられます。そして摂受を行ずる場合の闘争は主として仏教内の争いと解すべきであります。明治の時代までは仏教徒全部が、日蓮聖人の生まれた時代は末法の初めの五百年だと信じていました。その時代に日蓮聖人が、いまだ像法だと言ったって通用しない。末法の初めとして行動されたのは当然であります。仏教徒が信じていた年代の計算によりますと、末法の最初の五百年は大体、叡山の坊さんが乱

ます。末法の最初の五百年を巧みに二つに使い分けをされたので、世界の統一は本当の歴史上の仏滅後二千五百年に終了すべきものであろうと私は信ずるのであります。そうなって参りますと、仏教の考える世界統一までは約六、七十年を残されているわけであります。私は戦争の方では今から五十年と申しましたが、不思議に大体、似たことになっております。あれだけ予言を重んじた日蓮聖人が、世界の大战争があつて世界は統一され本門戒壇が建つという予言をしておられるのに、それが何時来るといふ予言はやっていないのです。それでは無責任と申さねばなりません。けれども、これは予言の必要がなかったのです。ちゃんと判っているのです。仏の神通力によつて現われるときを待っていたのです。そうでなかったら、日蓮聖人は何時だという予言をしておられるべきものだと思つるのであります。

この見解に対して法華の専門家は、それは

すべくインドに行つて太鼓をたたいていると
 日本山妙法寺の藤井行勝師がこの予言を實現
 の闇を照らすべきものだと言っています。
 日本の仏法はインドに帰って行き、永く末法
 また日蓮聖人は、インドから渡来して来た

を持ってしていると信じます。
 教えを準備された如く、田中先生は時来たつ
 て日蓮聖人の教義を全面的に発表した――即
 ち日蓮聖人の教えを完成したところの予定さ
 れた人でありますから、この一語は非常な力

述べてありませんが、天台大師が日蓮聖人の
 年から四十八年くらいで世界が統一されると
 言つております。どういふ算盤を弾かれたか
 輯三六七頁）と述べていることです。大正八

皆帰妙法は四十八年間に成就し得るといふ算
 学先生が、大正七年のある講演で「一天四海
 とは、日蓮聖人以後の第一人老である田中智
 うかと存じますが、私の最も力強く感ずるこ
 素人のいい加減なこじつけだと言われるだろ

ころに支那事変が勃発しました。英国の宣伝
 が盛んで、日本が苦戦して危いという印象を
 インド人が受けたのです。そこで藤井行勝師
 と親交のあったインドの「耶羅陀耶」という
 坊さんが「日本が負けると大変だ。自分が感
 得している仏舍利があるから、それを日本に
 納めて貰いたい」と行勝師に頼みました。行
 勝師は一昨年帰って来てそれを陸海軍に納め
 たのであります。行勝師の話によると、セイ
 ロン島の仏教徒は、やはり仏滅後二千五百年
 に仏教国の王者によって世界が統一されると
 いう予言を堅く信じているそうで、その年代
 はセイロンの計算では間もなく来るのであり
 ます。

第六章 結び

今までお話して来たことを総合的に考えま
 すと、軍事的に見ましても、政治史の大勢か
 ら見ましても、また科学、産業の進歩から見

革命と革命との間には相当に長い非非常時、
 即ち常時があつたのです。フランス革命から
 第一次欧州大戦の間も、一時はかなり世の中
 が和やかでありました。第一次欧州大戦以後
 の革命時は、まだ安定しておりません。しか
 しこの革命が終ると引きつづき次の大変局、
 即ち人類の最後の大決勝戦が来る。今日の非
 常時は次の超非常時と隣り合わせであります。
 今後数十年の間は人類の歴史が根本的に変化
 するところの最も重大な時期であります。こ

世の中には、この支那事変を非常時と思つ
 て、これが終れば和やかな時代が来ると考え
 ている人が今日もまだ相当にあるようです。
 そんな小つぽけな変革ではありません。昔は

ましても、信仰の上から見ましても、人類の
 前史は將に終ろうとしていることは確實であ
 り、その年代は数十年後に切迫していると見
 なければならぬと思ふのであります。今は
 人類の歴史で空前絶後の重大な時期でありま
 す。

和を達成するには、なるべく戦争などという通のあこがれであった世界の統一、永遠の平
 はないので。世界人類の本当に長い間の共
 決勝戦というのは、そんな利害だけの問題で
 かれこれ言っているのではありません。世界の
 係の戦争でありましょう。私はそんな戦争を
 とは怪しからぬというわけで、多くは利害関
 義を振り廻しながら東亜の安定に口を入れる
 言え、何だアメリカは自分勝手のモンロー主
 を日本に独占されては困ると考え、日本から

なるかも知れません。かれらから見れば蘭印
 リ力は睨み合いであります。あるいは戦争に
 うものと思っております。今日、日本とアメ
 国との戦争は多く自分の国の利益のために戦
 解して戴きたいことがあるのです。今は国と
 かと想像しました。しかし、よく皆さんに了
 るとして誰と戦うか。私は先に米州じゃない
 と私は考えます。東亜が仮に準決勝に残り得
 法を用いなくても自然に精神総動員はできる
 の事を国民が認識すれば、余りむずかしい方

観し得る聡明な民族、聡明な国民が結局、世

こういう時代の大きな意義を一日でも早く達

りします。

しかし断わって置かなければならないのは

戦いをやらなければならぬ。こう思うのであ

ります。

準備をやれ、こっちも準備をやり、堂々たる

戦いをやらなければならぬ。こう思うのであ

ります。

準備をやれ、こっちも準備をやり、堂々たる

戦いをやらなければならぬ。こう思うのであ

ります。

準備をやれ、こっちも準備をやり、堂々たる

戦いをやらなければならぬ。こう思うのであ

ります。

準備をやれ、こっちも準備をやり、堂々たる

戦いをやらなければならぬ。こう思うのであ

ります。

準備をやれ、こっちも準備をやり、堂々たる

戦いをやらなければならぬ。こう思うのであ

て堂々と戦わなければなりません。

ある人がこう言うのです。君の言うことは

本当らしい、本当らしいから余り言いふらす

な、向こうが準備するからコッソリやれと。

これでは東亜の男子、日本男子ではない。東

方道義ではない。断じて皇道ではありません

よろしい、準備をさせよう、向こうも十分に

準備をやれ、こっちも準備をやり、堂々たる

戦いをやらなければならぬ。こう思うのであ

ります。

界の優者たるべき本質を持っているということとです。その見地から私は、昭和維新の大目的を達成するため、この大きな時代の精神を一日も速やかに全日本国民と全東亞民族に了解させることが、私たちの最も大事な仕事である。と確信するものであります。

「#底本64頁に「付表第一 戦争進化景況一覽表」がある」

「#改丁」

第二部 「最終戦争論」に関する質疑回答

昭和十六年十一月九日於酒田脱稿

第一問 世界の統一が戦争によってなされるということとは人類に対する冒瀆であり、人類は戦争によらないで絶対平和の世界を建設し得なければならぬと思う。

答 生存競争と相互扶助とは共に人類の本能であり、正義に対するあこがれと力に対する依頼は、われらの心の中に併存する。昔の

当らねばならぬと説いているのは、人類の本
 では不可能であり、身を以て、武器を執って
 釈尊が、正法を護ることは単なる理論の争い
 清、日露の大戦を御決行遊ばされたのである
 はらから」と仰せられた明治天皇は、遂に日
 度々武力を御用い遊ばされ、「よもの海みな
 下を平げん」と考えられた神武天皇は、遂に
 「鋒刃の威を仮らずして、坐（いなが）ら天
 も致し方がない。
 ない。誠に悲しむべきことではあるが、何と

剣な闘争の結果、神の審判を受ける外に途は
 人類に与えられた、あらゆる力を集中した真
 世界統一の如き人類の最大問題の解決は結局
 のみで争いを決することは通常、至難である
 等に関する現実問題は、単なる道義観や理論
 聞する。絶大な支配力のない限り、政治経済
 でさえ、理論闘争で解決し難い場面を時々見
 間には思い及ばぬことである。純学術的問題
 捧げ、帰伏改宗したものと聞くが、今日の人
 坊さんは宗論に負ければ袈裟をぬいで相手に

し最終戦争は、どこまでも統一に入るための

最終戦争によって世界は統一される。しか

しなればならない。あらゆる準備に精進

する必勝の信念の下に、あらゆる準備に精進

つある。最終戦争の近い今日、常にこれに対

的にならないで闘争がますます盛んになりつ

れねばならぬ。文明の進歩とともに世は平和

れる天皇が、絶対最強の武力を御掌握遊ばさ

それがためにも最高道義の護持者であらせら

能であろう。もし幸い可能であるとすれば、

それがためにも最高道義の護持者であらせら

が（六二頁）、悲しい哉、それは恐らく不可

より、われらの心から熱望するところである

70 - 5」らずして世界を統一することは固

刃（やいば）に※（ちぬ）「#「血＋半」、

いる。大闘争によってのみ実現することを予言して

日蓮聖人も、信仰の統一は結局、前代未聞の

天四海皆帰妙法の理想を実現すべく力説した

人三人百人千人と次第に唱え伝えて、遂に一

性に徹した教えと言わねばならない。一人二

世界は自然に統一されることとなる（三五頁）。

抗するものを迅速に屈伏し得るようになれば、抵抗するところに対し迅速にその威力を発揮し、世界的統一の範囲も広がって来たのであるが、政治的統一の範囲も広がって来たのである。政治的争力が増大し、その威力圏の拡大に伴って国内に於ては、戦争の発生は全く問題とならなく、争力が増大した（三五頁）。文明の進歩により戦

は、日本国内に於て戦争がなくなると誰が考

は、日本国内に於て戦争がなくなると誰が考

荒仕事であって、八紘一宇の発展と完成は武力によらず、正しい平和的手段によるべきである。

第二問 今日まで戦争が絶えなかったように、人類の闘争心がなくならない限り、戦争もまた絶対になくならないのではないか。

答 確かに、人類の歴史あって以来、戦争

は絶えたことがない。しかし今日以後もまた

しかりと断ずるは過早である。明治維新まで

は、日本国内に於て戦争がなくなると誰が考

えたであろうか。文明、特に交通の急速な発

達と兵器の大進歩によって、今日では日本

国内に於ては、戦争の発生は全く問題となら

なく、争力が増大した（三五頁）。文明の進歩により戦

の間にやら戦争を考えなくなるであろう（四
 資の取得を争う時代は過ぎ去り人類は、いつ
 の進歩は生活資材を充足し、戦争までして物
 戦争により思想、信仰の統一を来たし、文明
 から国家の対立と戦争の愚を悟る。且つ最終
 ことを考えるべきである。人類は自然に、心
 日の日本よりも狭いように感ずる時代である
 で世界の一周は可能となり、地球の広さは今
 一方、世界の交通状態を一変させる。数時間
 なるのみならず、かくの如き大威力の文明は
 一方、世界の交通状態を一変させる。数時間

大威力（三七頁）は、戦争の惨害を極端なら
 しめて、人類が戦争を回避するに大きな力と
 ぎない。瞬間に敵国の中心地を潰滅する如き
 及ばず今日の文明を基準とした常識判断に過
 争が行なわれ得る文明の超躍的大進歩に考え
 かということである。しかしそれは、最終戦
 起り、再び国家の対立を生むのではなからう
 なくその支配力に反抗する力が生じて戦争が
 争があつて世界が一度は統一されても、間も
 更に問題になるのは、たとい未曾有の大戦

九一五一頁）。

人類の闘争心は、ここ数十年の間はもちろ
ん、人類のある限り恐らくなくならないであ
ろう。闘争心は一面、文明発展の原動力であ
る。しかし最終戦争以後は、その闘争心を国
家間の武力闘争に用いようとする本能的衝動
は自然に解消し、他の競争、即ち平和裡に、
より高い文明を建設する競争に転換するので
ある。現にわれわれが子供の時分は、大人の
喧嘩を街頭で見ることにも決して稀ではなかつ

たが、今日ではほとんど見ることができない。
農民は品種の改善や増産に、工業者はすぐれ
た製品の製作に、学者は新しい発見・発明に
等々、各々その職域に応じ今日以上の熱を以
て努力し、闘争的本能を満足させるのである。
以上はしかし理論的考察で半ば空想に過ぎ
ない。しかし、日本国体を信仰するものには
戦争の絶滅は確乎たる信念でなければならぬ。
八紘一宇とは戦争絶滅の姿である。口に八紘
一宇を唱え心に戦争の不滅を信ずるものがあ

るならば、真に憐むべき矛盾である。日本主義が勃興し、日本国体の神聖が強調される今日、未だに真に八紘一宇の大理想を信仰し得ないものが少なくないのは誠に痛嘆に堪えない。

第三問 最終戦争が遠い将来には起るかも知れないが、僅々三十年内外に起るとは信じられない。

答 近い将来に最終戦争の来るとは私の確信である（三三―三五頁）。最終戦争が主

として東亜と米州との間に行なわれるであろうということは私の想像である（四四頁）。最終戦争が三十年内外に起るであろうという事は占いに過ぎない（四五頁）。私も常識を以てしては、三十年内外に起るとは、なかなか考えられない。

しかし最終戦争は実に人類歴史の最大関節であり、このとき、世界に超常識的大変化が起るのである。今日までの戦争は主として地上、水上の戦いであった。障害の多い地上戦

判断し難い。
 戦争術変化の年数が千年→三百年→百二十年と逐次短縮して来たことから、この次の変化が恐らく五十年内外に来るであろうとの推断は、固より甚だ粗雑なものであるが、全くのデタラメとは言えない。常識的には今後三十年内外は余りに短いようであるが、次の大変化は、われらの常識に超越するものであることを敬虔な気持で考えるとき、私は「三

の常識では、この次の戦争の大変化は容易に
 達無碍の空中への飛躍は、地上にあくせくする人々の想像に絶するものがある。地上戦争
 たのは、真に驚嘆すべき着想ではないか。通
 へりようじゅせん）上の説教場を空中に移し
 の大法門を説こうとしたとき、インド靈鷲山
 積尊が法華経で本門の中心問題、即ち超常識
 への飛躍は人類数千年のあこがれであった。
 に驚天動地の大変化を生ずるであろう。空中
 られるが、それが空中に飛躍するときは、真
 争の発達が急速に行かないことは常識で考え

思う人も少なくないようであるが、私はそれ

また統制主義を人類文化の最高方式の如く
テンポを、どう見るか。

準決勝の時期がそろそろ終わろうとするこの急
と枢軸の二大陣営に対立しようとしている。

あり、見方によっては、世界は既に自由主義
つの政治的単位になろうとする傾向が顕著で

速に国家連合の時代に突入して、今日では四
の政治的単位に分かれていたのがその後、急

た。更に、第一次欧州大戦までは世界が数十
争は必ずしも突飛とは言えないことを詳論し

状態、仏教の予言等から、三十年後の最終戦
私は技術・科学の急速な進歩、産業革命の

容易ならぬこととなるのである。
来ないと考えていたのに実際に来たならば、

害にならないのであるが、仮に三十年後には
びることがあっても、国家にとって少しも損

争が来ないで、五十年、七十年、百年後に延
信ずるものである。もし三十年内外に最終戦

十年内外」を否定することはよろしくないと

宿生活に入るための産物である。最終戦争ま

と無意識のうち直観して、それに対する合
 統制主義は、人類が本能的に最終戦争近し
 行なわれるべきものである。

りせざるを得ない。決戦直前の短期間にのみ
 けれども、年中合宿して緊張したら、うんざ
 合宿生活は能率を挙げる最良の方法である
 ようなものだと思う。

ならばざるを得ざらしめるのである。だから私
 は、統制主義は武道選手の決勝戦前の合宿の
 も、また安全性を犠牲にしても、統制主義に

率を發揮して戦争に備えるために、否が応で
 今日の世界の大勢は各国をして、その最高能
 して永く継続すべきものではないと確信する
 のと見るべきである。統制主義の時代は、決

副総統の脱走等の事件も、その傾向を示すも
 ももちろん、ドイツに於ける突撃隊長の銃殺、
 結果となる。ソ連に於ける毎度の肅清工作は
 に窮屈で過度の緊張を要求し、安全弁を欠く
 には賛成ができない。元来、統制主義は余り

での数十年は合宿生活が継続するであろう。この点から、最終戦争はわれらの眼前近く迫りつつあるものと推断する。

第四問 東洋文明は王道であり、西洋文明は霸道であると言うが、その説明をしてほしい。

答 かくの如き問題はその道の学者に教えを乞うべきで、私如きものが回答するのは僭越極まる次第であるが、私の尊敬する白柳秀湖、清水芳太郎両氏の意見を拝借して、若干の意見を述べる。

文明の性格は気候風土の影響を受けることが極めて大きく、東西よりも南北に大きな差異を生ずる。われら北種は東西を通じて、おしなべて朝日を礼拝するのに、炎熱に苦しめられてゐる南種は同じく太陽を神聖視しながらも、夕日に跪伏する。回教徒が夕日を礼拝するように仏教徒は夕日にあこがれ、西方に金色の寂光が降りそそぐ弥陀の浄土があると考えている。日蓮聖人が朝日を拝して立宗し

会制度、政治組織の改革は、北種の特徴であ
 制的で議会の運用を巧みに行ない得ない。社
 いる民族は、すべて北種に属する。南種は専
 強大な政治力が養われ今日、世界に雄飛して
 意義と狩猟生活の生んだ寄合評定によつて、
 発達を來たした。また農業に發した強い国家
 冷な風土に鍛錬されて、自然に科学的方面の
 い出された劣等種であつたろうが、逆境と寒
 となつた。

北種は元來、住みよい熱帯や亜熱帯から追
 千年前の制度を固持して政治的に無力となり
 少数の英人の支配に屈伏せざるを得ない状態
 制度は全く固定し、インドの如きは今なお四
 ある。半面、南種は安易な生活に慣れて社会
 わゆる三大宗教はみな亜熱帯に生まれたので
 の瞑想にふけり、宗教の発達を來たした。い
 に支配階級は奴隸經濟の上に抽象的な形而上
 熱帯では衣食住に心を勞することなく、殊
 する。

役立つものであって、これは人間にとって手
 である。寒帯文明は結局、人間の経済生活に
 芸術的であって、人間の目的生活にそうもの
 た。本当を言うと、熱帯文明の方が宗教的、
 かりでなくて、強いものも同時に不幸であつ
 人類の幸福をもたらさなかつた。弱いものば
 取するという力の科学の上に立つた世界は、
 なかつた。力の強いものが力の弱いものを搾
 決して寒帯民族そのものも真の幸福が得られ
 取するといふ力の科学の上に立つた世界は、

べている。
 清水氏は『日本真体制論』に次の如く述

る。アジアの北種を主体とする日本民族の歴
 史と、アジアの南種に属する漢民族を主体と
 する支那の歴史に、相当大きな相違のあるの
 も当然である。但し漢民族は南種と言つても
 黄河沿岸はもちろんのこと、揚子江沿岸でも
 亜熱帯とは言われず、ヒマラヤ以南の南種に
 比べては、多分に北種に近い性格をもつてい
 る。

段生活である。寒帯文明が中心となつてでき
 上がった人間の生活状態というものは、やは
 り主客転倒したものである。∴∴
 この二つのものは別々であつてよいかと言
 うに、これは一つにならなければならぬも
 のである。インド人や支那人は、実に深遠な
 精神文化を生み出した民族であるが今日、寒
 帯民族のもつ機械文明を模倣し成長せしめる
 ことに成功していない。白色人種は、物質文
 化の行き詰まりを一面に於て唱えながらも、
 これを刷新せんとする彼らの案は、依然とし
 て寒帯文明の範疇を出ることができない。∴
 ∴
 とにかく、日本民族は明白に、その特色を
 もっているのである。この熱帯文明と寒帯文
 明とが、日本民族によつて融合統一され、次
 の新しい人間の生活様式が創造されなければ
 ならない。どうも日本民族において、他にこ
 の二大文明の融合によつて第三文明を創造し
 うる能力をもつたものが、外にないと思われ

簡明に力強く宣明せられた建国の大理想は、
 とも劣らないのみならず、皇祖皇宗によつて
 ある。科学的能力は白人種の最優秀者に優る
 ている。日本民族の主体は、もちろん北種で
 の北種には、その文明に大きな相異を来たし
 ている。日本民族の主体は、もちろん北種で
 同じ北種でも、アジアの北種とヨーロッパ
 の北種には、その文明に大きな相異を来たし
 の第三文明でなければならぬ。
 道を守る人生の目的を堅持して、その目的達
 成のための手段として、物質文明を十分に生
 かさねばならない。即ち、王道文明は清水氏
 の第三文明でなければならぬ。

ない。王道は中庸を得て、偏してはならぬ。
 文明が王道文明であるかと言え、そうでは
 明は、即ち霸道文明である。これに対し熱帯
 寒帯文明に徹底した物質文明偏重の西洋文
 明は、即ち霸道文明である。これに対し熱帯
 文明が王道文明であるかと言え、そうでは
 ない。王道は中庸を得て、偏してはならぬ。
 道を守る人生の目的を堅持して、その目的達
 成のための手段として、物質文明を十分に生
 かさねばならない。即ち、王道文明は清水氏
 の第三文明でなければならぬ。

る。つまり、寒帯文明を手段として、東洋の
 精神文化を生かしうる社会の創造である。西
 洋の機械文明が、東洋の精神文明の手段とな
 るときに、初めて西洋物質文化に意味を生じ
 東洋精神文化も、初めて真の発達を遂げうる
 ののである。

民族不動の信仰として、われらの血に流れて
 いる。しかも適度に円満に南種の血を混じて
 熱帯文明の美しさも十分に摂取し、その文明
 を荘嚴にしたのである。古代支那の文明は今
 日の研究では、南種に属する漢人種のもので
 はなく、北種によって創められたものらしい
 と言われているが、その王道思想は正しく日
 本国体の説明と云うべきである。この王道思
 想が漢人種によって唱導されたものでないに
 せよ、漢民族はよくこの思想を容れ、それを
 堅持して今日に及んだ。今日の漢民族は多く
 の北種の血を混じて南北両文明を協調するに
 適する素質をもち、指導よろしきを得れば、
 十分に科学文明を活用し得る能力を備えてい
 ると信ずる。

西洋北種は古代に於て果して、東洋諸民族
 の如き大理想を明確にもっていたであろうか
 仮にあつたにせよ、物質文明の力に圧倒され
 かれらの信念として今日まで伝えられるだけ
 の力はなかつたのである。ヒットラーは古代

ゲルマン民族の思想信仰の復活に熱意を有す
 ると聞くが、ヒットラーの力を以てしても、
 民族の血の中に真生命として再生せしめるこ
 とは至難であろう。ヨーロッパの北種はフラ
 ンスを除けば、イギリスの如き地理的關係に
 あつても南種の混血は比較的少なく、ドイツ
 その他の北欧の諸民族は、ほとんど北種間の
 みの混血で、現実主義に偏する傾向が顕著で
 ある。殊にヨーロッパでは強力な国家が狭小
 な地域に密集して永い間、深刻な闘争をくり

返し、科学文明の急速な進歩に大なる寄与を
 なしたけれども、その覇道的弊害もますます
 増大して今日、社会不安の原因をなし、清水
 氏の主張の如く、これも根本的に刷新するこ
 とが不可能である。

西洋文明は既に覇道に徹底して、みずから
 行き詰まりつつある。王道文明は東亞諸民族
 の自覚復興と西洋科学文明の摂取活用により
 日本国体を中心として勃興しつつある。人類
 が心から現人神（あらひとがみ）の信仰に悟

ある。戦争の動機は経済以外に考えられない現状で社会の関心を経済上の利害に集中させた結果働きをなしている。近代の進歩した経済は、あつた。土地の争奪は経済問題が最も大きな封建時代には土地の争奪が戦争の最大動機で人種間の戦争や、宗教戦争などが行なわれ、深い関心を有するものに存する。昔は単純な答 戦争の原因は、その時代の人類の最も・霸道の決勝戦とは思われない。

ば、その原因は経済の争いで、観念的な王道第五問 最終戦争が数十年後に起るとすれば、空前絶後の大事件である。

を發揮する。最終戦争即ち王道・霸道の決勝戦は結局、天皇を信仰するものと然らざるものの決勝戦であり、具体的には天皇が世界の天皇となら

せられるか、西洋の大統領が世界の指導者となるかを決定するところの、人類歴史の中で

自由主義時代は経済が政治を支配するに至ったのであるが、統制主義時代は政治が経済を支配せねばならぬ。世の中には今や大なる変化を生じつつある。しかし僅々三十年後にはなお、社会の最大関心事が依然として経済であり、主義が戦争の最大原因となるとは考えられない。けれども最終戦争を可能にする文明の飛躍的進歩は、半面に於て生活資材の充足を来たし、次第に今日のような経済至上の時代が解消するであろう。経済はどこまでも人生の目的ではなく、手段に過ぎない。人類が経済の束縛からまぬがれ得るに従って、その最大関心は再び精神的方面に向けられ、戦争も利害の争いから主義の争いに変化するの、文明進化の必然的方向であると信ずる。即ち最終戦争時代は、戦争の最大原因が既に主義となる時代に入りつつあるべきはずである。

文明の実質が大変化をしても、人類の考えは容易にそれに追従できないために、数十年

後の最終戦争に於ける最初の動機は、依然として経済に関する問題であろう。しかし戦争の進行中に必ず急速に戦争目的に大変化を来たして、主義の争いとなり、結局は王覇両文明の雌雄を決することとなるものと信ずる。日蓮聖人が前代未聞の大闘争につき、最初は利益のために戦いつつも争いの深刻化するに従い、遂に頼るべきものは正法のみであることを頓悟して、急速に信仰の統一を来たすべきことを説いているのは、最終戦争の本質をよく示すものである。

第一次欧州大戦以来、大国難を突破した国が逐次、自由主義から統制主義への社会的革命を実行した。日本も満州事変を契機としてこの革新即ち昭和維新时期に入ったのであるが多くの知識人は依然として内心では自由主義にあこがれ、また口に自由主義を非難する人々も多くは自由主義的に行動していた。しかるに支那事変の進展中に、高度国防国家建設は、たちまち国民の常識となってしまうた。

冷静に顧みれば、平和時には全く思い及ばぬ驚異的变化が、何の不思議もなく行なわれてしまったのである。最終戦争の時代をおおむね二十年内外と空想したが（四六頁）、この期間に人類の思想と生活に起る変化は、全く想像の及ばぬものがある。経済中心の戦争が徹底せる主義の争いに変化するとの判断は、決して突飛なものとは言われない。

第六問 数十年後に起る最終戦争によって世界の政治的統一が一挙に完成するとは考えられない。

答 最終戦争は人類歴史の最大関節でありそれによって世界統一即ち八紘一宇実現の第一歩に入るのである。しかし真に第一歩であって、八紘一宇の完成はそれからの人類の永い精進によらねばならない。この点で質問者の意見と私の意見は大体一致していると信ずるが、それに関する予想を述べて見ることとする。

諸民族が長きは数千年の歴史によってその

文化を高め、人類は近時急速にその共通のあ
 こがれであった大統一への歩みを進めつつあ
 る。明治維新は日本の維新であったが、昭和
 維新は正しく東亜の維新であり、昭和十三年
 十二月二十六日の第七十四回帝国議会開院式
 の勅語には「東亜ノ新秩序ヲ建設シテ」と仰
 せられた。更にわれらは数十年後に近迫し来
 たった最終戦争が、世界の維新即ち八紘一宇
 への関門突破であると信ずる。

明治維新は明治初年に行なわれ、明治十年
 の戦争によって概成し、その後の数十年の歴
 史によって真に統一した近代民族国家として
 の日本が完成したのである。昭和維新の眼目
 である東亜の新秩序即ち東亜の大同は、満州
 事変に端を發し支那事変で急進展をなしつつ
 あるが、その完成には更に日本民族はもちろ
 ん、東亜諸民族の正しく深い認識と絶大な努
 力を要する。

今日われらは、まず東亜連盟の結成を主張
 している。東亜連盟は満州建国に端を發した

を經由することなく、一挙に東亞大同国家の
 ままに諸民族に対するならば、東亞連邦など
 がしむつみかわして栄ゆかん」との大御心の
 に日本人が「よもの海みなはらから」「西ひ
 亞大拡大が実現せられることは疑いない。特

熱望し、東亞大同国家の成立即ち大日本の東
 から進んで国境を撤廃し、その完全な合同を
 の最大能力を発揮するため諸国家は、みず
 更に各民族間の信頼が徹底したならば、東亞
 東亞の総合的威力の増進を計らねばならぬ。

一日も速やかに少なくとも東亞連邦に躍進して
 東亞諸民族の疑心暗鬼が除去されたならば、
 するため、なるべく強度の統一が希望される
 東亞の新秩序は、最終戦争に於て必勝を期
 する

のであり当時、在満日本人には一挙に天皇の
 下に東亞連邦の成立を希望するものも多かつ
 たが、漢民族は未だ時機熟せずとして、日満
 華の協議、協同による東亞連盟で満足すべし
 と主張し、遂に東亞新秩序の第一段階として
 採用されるに至った。

呼んだではないか。

の諸国家から指導者と仰がれる日は、案外急
 ために進んで最大の犠牲を払うならば、東亞
 日本が真に大御心を奉じ、謙讓にして東亞の
 の實力は東亞諸民族の認めるところである。

中に、みずから強権的にこれを主張するのは
 皇道の精神に合しないことを強調する。日本
 国家の自然推挙によるべきであり、紛争の最

家と平等に提携し、われらの徳と力により諸
 とならなければならぬ。しかしそれは諸国
 ら、日本国は連盟の中核的存在即ち指導国家
 独り日本のみが天皇を戴いているのであるか
 天皇をその盟主と仰ぎ奉るに至らない間は、
 ずる。東亞連盟の初期に於て、諸国家が未だ
 り、全く平等で天皇に仕え奉るべきものと信
 （ふよく）し奉るものは皆われらの同胞であ
 われらは、天皇を信仰し心から皇運を扶翼
 成立に飛躍するのではなからうか。

空前絶後の大変動期を過ごすことは、過去の
 人々は案外それほどの激変と思わず、この
 史の最大関節であるが、しかしそれを体験す
 ない。最終戦争は近く必ず行なわれ、人類歴
 考える人々が多いらしい。共に正鵠を得てい
 によって人類は直ちに黄金世界を造るよう
 意を表するものには、ややもすればこの戦争
 稽の放談のように考え、また最終戦争論に賛
 口にする資格がない。

最終戦争と言え、いかにも突飛な荒唐無
 行を期するものである。下手に出れば相手は
 つけあがるなどと恐れる人々は、八紘一宇を
 発展によるべきことを忘れず、最も着実な実
 対の大安心に立って、現実には自然の順序よき
 し八紘一宇の大理想必成を信ずるわれらは絶
 しかり、確かにいわゆる強硬ではない。しか
 は世人から、ややもすれば軟弱と非難される
 において連盟を結成せんとするわれらの主張
 も指導国家と自称せず、まず全く平等の立場
 東亜連盟は東亜新秩序の初歩である。しか

既に第一次欧州大戦でドイツはバクテリアを
 ようになる。これは決して夢物語ではなく、
 して、極めて簡単に蛋白質の食物が得られる
 クテリヤや、鶏肉の味のバクテリア等を発見
 バクテリアを養い、牛肉のような味のするバ
 また豚や鶏を飼う代りに、繁殖に最も簡単な
 の恐らく千五百倍ぐらいの食料が製造できる
 どん作られるようになり、一定の土地から今
 らば、試験管の中で、われわれの食物がどん
 植物の一枚の葉の作用の秘密をつかめたな

発展について種々面白い空想を述べている。
 郎氏は『日本真体制論』の中に、その文明の
 う。日本の有する天才の一人である清水芳太
 換せられ、八紘一宇の完成に邁進するである
 人類の新しい総合的大文明建設の原動力に転
 武力をもつて国家間に行なわれた闘争心は、
 うが、文明の進歩は案外早くその安定を得て
 ん初期には幾多の余震をまぬがれないである
 最終戦争によって世界は統一する。もちろん
 革命時代と大差ないのではなかるうか。

れる。なぜ人間が死ぬかと言えば、老廃物が

この時代になると不老不死の妙法が発見さ
めて容易である。

次に飛び上がるときにこれを使用する。この
ようにして世界をぐるぐる飛び廻ることは極

めて容易である。

りるときには、その水素を吸い込んで来て、
次に飛び上がるときにこれを使用する。この

ようにして世界をぐるぐる飛び廻ることは極
めて容易である。

動力とすれば、どこまでも飛べる。そして降
りるときには、その水素を吸い込んで来て、

次に飛び上がるときにこれを使用する。この
ようにして世界をぐるぐる飛び廻ることは極

めて容易である。

りるときには、その水素を吸い込んで来て、
次に飛び上がるときにこれを使用する。この

ようにして世界をぐるぐる飛び廻ることは極
めて容易である。

食べたのである。

次に動力は貴重な石炭は使わなくとも、地

下に放熱物体——ラジウムとかウラニウム——

——があつて、地殻が熱くなつていのである

から、その放熱物体が地下から掘り出される

ならば、無限の動力が得られるし、また成層

圏の上には非常に多くの空中電気があるから

これを地上にもつて来る方法が発見できれば

無限の電気を得ることになる。なお成層圏の

上の方には地上から発散する水素が充満して

いる。その水素に酸素を加えると、これがす

ばらしい動力資源になる。従つて飛行機でそ

こまで上昇し、その水素を吸い込んでこれを

動力とすれば、どこまでも飛べる。そして降

りるときには、その水素を吸い込んで来て、

次に飛び上がるときにこれを使用する。この

ようにして世界をぐるぐる飛び廻ることは極

めて容易である。

この時代になると不老不死の妙法が発見さ

れて、なぜ人間が死ぬかと言えば、老廃物が

たまって、その中毒によるのである。従ってその老廃物をどしどし排除する方法が採られるならば生命は、ほとんど無限に続く。現にバクテリアを枯草の煮汁の中に入れると、極めて元気に猛烈な繁殖をつづける。暫くして自分の排出する老廃物の中毒で次第に繁殖力が衰えてゆくが、また新しい枯草の汁の中に持ってゆくと再び活気づいて来る。かくして次々と煮汁を新しくしてゆけば何時までも生きていている。即ち不老不死である。

しからば人間が不老不死になると、人口が非常に多くなり世界に充満して困るではないかということ心配する人があるかも知れない。しかしその心配はない。自然の妙は不思議なもので、サンガー夫人をひっぱって来る必要がない。人間は、ちょうどよい工合に一人が千年に一人ぐらい子供を産むことになる。これは接木や挿木をくりかえして来た蜜柑には種子がなくなると同じである。早く死ぬから頻繁に子供を産むが、不老不死になると、

ることができない。要は質問者の言う如く、
 その闘争本能を戦争に求めることは到底考え
 清水氏の空想の如き時代となれば、人類が
 を弥勒（みろく）菩薩の時代というのである
 の世に生まれて来るのである。仏教ではそれ
 然変異によって、今の人類以上のものが、こ
 文明に入り、そして遂には、みずから作る突
 ち人類は最終戦争後、次第に驚くべき総合的
 よって、すばらしい大飛躍が考えられる。即
 更に進んで突然変異を人工的に起すことに

真に自由自在の世界となる。
 度にする、と、万物ごとく活動は止まって
 しまう。そうなる、と浦島太郎も夢ではない。
 温度を下げて零下二百七十三度という絶対温
 ちぢめることは、たやすいことである。逆に
 温度を上げることができれば、十年を一年に
 を殺さないで温度を変える。物を壊さないで
 また時間というものは結局温度である。人
 るであろう。
 人間は淡々として神様に近い生活をするに至

全世界が白人文明の下にひれ伏している。そ

過去数百年は白人の世界征服史であり今日

に達することを信ずるものである。必ず私と同一結論

究されることを切望する。更に広く総合的に研

西古今の戦争史により、更に広く総合的に研

究されることを切望する。必ず私と同一結論

に達することを信ずるものである。必ず私と同一結論

に達することを信ずるものである。必ず私と同一結論

に達することを信ずるものである。必ず私と同一結論

に達することを信ずるものである。必ず私と同一結論

に達することを信ずるものである。必ず私と同一結論

（一四四頁）。これが最終戦争論を西洋戦史

によった第一の原因である。有志の方々が東

西古今の戦争史により、更に広く総合的に研

究されることを切望する。必ず私と同一結論

に達することを信ずるものである。必ず私と同一結論

に達することを信ずるものである。必ず私と同一結論

に達することを信ずるものである。必ず私と同一結論

に達することを信ずるものである。必ず私と同一結論

答 「戦争史大観の由来記」に白状してあ

いと思う。

第七問 戦争の発達を東洋、特に日本戦史

によらず、単に西洋戦史によるのは公正でな

史上の最大急湍であることを確認し、今から

その突破にあらゆる準備を急がねばならぬ。

右のような考え方が西洋にあるかないかは

妙法より出たり」と断じている。

てあり、日蓮聖人は「兵法剣形の大事もこの

る者は正に刀剣器仗を執持すべし」と説かれ

を護るをもつて乃ち大乘と名づく。正法を護

となすことを得ず。五戒を受けざれども正法

「五戒を受持せん者あらば名づけて大乘の人

弓箭鉾槩（きゆうせんぼうさく）を持すべし

せん者は五戒を受けず威儀を修せずして刀剣

も、涅槃（ねはん）経に「善男子正法を護持

最も平和的であると信ぜられる仏教に於て

ある。

く）し奉るための武力の発動が皇国の戦争で

遊ばされる。国体を擁護し皇運を扶翼（ふよ

三種の神器の剣は皇国武力の意義をお示し

有する。

的な戦争観は西洋に存せずして、われらが所

ではなく、その手段にすぎない。正しい根本

ある。しかし戦争は断じて人生や国家の目的

の最大原因は白人の獲得した優れた戦争力で

軍事的に支那を征服しても、漢民族の文化を
 したことは西洋の如くではない。殊に蕃族は
 族に征服されたものの、強国が真剣に相對峙
 を持続し、数次にわたり、いわゆる北方の蕃
 東亞大陸に於ては漢民族が永く中核的存在
 ことなどにも日本武力の特質が現われている

いである。武器がすばらしい芸術品となつた
 と戦やらスポーツやら見境いがかないくら
 いは那須の与一の扇の的となつた。こうなる
 更に戦の間に和歌のやりとりをしたり、ある

難に同情して塩を贈つた武将の心事となり、
 和的な民族性が大きな作用をして、敵の食糧
 民族戦争の如き深刻さを欠いていた。殊に平

西洋が本場となつたのは当然である。
 日本の戦争は主として国内の戦争であり、
 民族戦争の如き深刻さを欠いていた。殊に平
 和的な民族性が大きな作用をして、敵の食糧
 難に同情して塩を贈つた武将の心事となり、
 更に戦の間に和歌のやりとりをしたり、ある
 いは那須の与一の扇の的となつた。こうなる
 と戦やらスポーツやら見境いがかないくら
 いである。武器がすばらしい芸術品となつた
 ことなどにも日本武力の特質が現われている
 東亞大陸に於ては漢民族が永く中核的存在
 を持続し、数次にわたり、いわゆる北方の蕃
 族に征服されたものの、強国が真剣に相對峙
 したことは西洋の如くではない。殊に蕃族は
 軍事的に支那を征服しても、漢民族の文化を

無学の私は知らないが、よしあつたにせよ、
 今日のかれらに対しては恐らく無力であろう。
 戦争の本義は、どこまでも王道文明の指南に
 まつべきである。しかし戦争の実行方法は主
 として力の問題であり、霸道文明の発達した
 西洋が本場となつたのは当然である。

私の戦争史が西洋を正統的に取扱ったから

だしい不合理とは言えないと信ずる。

したのであるが、戦争の形態に関する限り甚

識の不十分から、研究は自然に西洋戦史に偏

り系統的に現われたのは当然である。私の知

である関係上、戦争の発達は西洋に於て、よ

選手が常時相対しており、戦場も手頃の広さ

道文明のため戦争の本場となり、且つ優れた

この自然的環境の結果と見るべきである。覇

が霸道文明の支配下に入った有力な原因は、

洋が王道文明の伝統を保ったのに対し、西洋

の発達はその諸民族闘争の所産と言える。東

して多くの国家を営んでいる。西洋科学文明

い。あの狭い土地に多数の強力な民族が密集

ヨロツパは元来アジアの一半島に過ぎな

は土地広大で戦争の深刻さを緩和する。

歴史上に存在するのである。しかも東亜大陸

いかなる民種に属するかさえ不明な民族が、

如く民族意識が強烈でなく、今日の研究でも

尊重したのである。また東亜に於ては西洋の

右の如く同一時代に於て、ある時には決戦

至難である。

ツトラーも英国に決戦戦争を強制することは

年にわたる持久戦争を余儀なくされたが、ヒ

にある。またナポレオンも英国に対しては十

功を収めながら、そう簡単には行かない状況

にある。またナポレオンも英国に対しては十

開戦当初の大奇襲によって肝心の緒戦に大成

強力に決戦戦争を強制した。ソ連に対しては

ド、オランダ、ユーゴー、ギリシャ等の弱小

国家のみならず、フランスに対しても極めて

強力に決戦戦争を強制した。ソ連に対しては

開戦当初の大奇襲によって肝心の緒戦に大成

強力に決戦戦争を強制した。ソ連に対しては

ド、オランダ、ユーゴー、ギリシャ等の弱小

国家のみならず、フランスに対しても極めて

強力に決戦戦争を強制した。ソ連に対しては

開戦当初の大奇襲によって肝心の緒戦に大成

強力に決戦戦争を強制した。ソ連に対しては

ド、オランダ、ユーゴー、ギリシャ等の弱小

国家のみならず、フランスに対しても極めて

とて、一般文明が西洋中心であると言うのでは
ないことを特に強調する。

第八問 決戦・持久両戦争が時代的に交互

するとの見解は果して正しいか。

答 ナポレオンはオーストリア、プロイセ

ン等の国々に対しては見事な決戦戦争を強行

したのであるが、スペインに対しては実行至

難となり、またロシアに対しては彼の全力を

以てしても、ほとんど不可能であった。第二

次欧州大戦で新興ナチス・ドイツはポーラン

戦争に於ける強者は常に敵を攻撃して行き

2 防禦威力の強大

の太平の結果である。

り廻しても余り成功しないのは、徳川三百年

かけても相当のものである。今日、謀略を振

を避けるものがあつた。日本民族はどの途に

の日本武将の謀略は、中国人も西洋人も三舎

利益のために犠牲としたのである。戦国時代

なり、必要の前には父母、兄弟、妻子までも

行なわれ当時の戦争は、いわゆる謀略中心と

なり、必要の前には父母、兄弟、妻子までも

揮したのであるが、それでもなお且つ買収が

性に基づく武士道によつて強烈な戦闘力を発

揮したのであるが、それでもなお且つ買収が

にくい状態にある。

日本に於ける武士は、日本国民

思想を清算し得ないで、武力の真価を發揮し

端に武を卑しき、今日なお「好人不当兵」の

皆兵の制度が破れて以来、その民族性は、極

支那に於ては、唐朝の全盛時代に於て国民

を犠牲に供し得るのである。

人はその愛国の赤誠によつてのみ、真に生命

久戦を余儀なくされ、遂に敗れた。イギリスはその貧弱な陸上兵力にかかわらず、ドーバー海峡という恐るべき大水濠の掩護によつ

な手段となつたのは、それがためである。ナポレオンは十年にわたるイギリスとの持久戦争を余儀なくされた。イギリスはその貧弱な陸上兵力にかかわらず、ドーバー海峡という恐るべき大水濠の掩護によつ

可能性を増加し、第一次欧州大戦当時と比し決戦戦争の方向に傾きつつある。

の大発達が攻撃威力を増加して、敵線突破の

敵に決戦戦争を強制しようとするのである。ところが、そのときの戦争手段が甚だしく防禦に有利な場合には、敵の防禦陣地を突破することができないうで、攻者の武力が敵の中枢部に達し得ず、やむなく持久戦争となる。

フランス革命以来、決戦戦争が主として行

なわれたのであるが、第一次欧州大戦に於て

は防禦威力の強大が戦争を持久せしめるに至

つた。第二次欧州大戦では戦車の進歩と空軍

その広大な国土であった。を護った第一の力は、ロシアの武力ではなく、オン覇業の没落を来たしたのである。ロシア遂にモスコ―退却の惨劇を演じて、大ナポレオンに従ってナポレオン軍の後方が危険となりえた作戦であったために、そこに無理があった。これはナポレオン軍隊の堅実な行動半径を越えて、長駆モスコ―まで侵入したのであるが、となる。

攻者の威力が敵の防禦線を突破し得るほど十分であつても、攻者国軍の行動半径が敵国の心臓部に及ばないときは、自然に持久戦争となつて、ナポレオンの決戦戦争を阻止したのである。今日のナチス・ドイツに対する頑強な抵抗も、ドーバー海峡に依存している。イギリスのナポレオン及びヒットラーに対する持久戦争は、ドーバー海峡による防禦威力の強大な結果と見るべきである。

3 国土の広大

攻者の威力が敵の防禦線を突破し得るほど十分であつても、攻者国軍の行動半径が敵国の心臓部に及ばないときは、自然に持久戦争となつて、ナポレオンの決戦戦争を阻止したのである。今日のナチス・ドイツに対する頑強な抵抗も、ドーバー海峡に依存している。イギリスのナポレオン及びヒットラーに対する持久戦争は、ドーバー海峡による防禦威力の強大な結果と見るべきである。

それに応じて防禦兵器もまた進歩するから、

第九問 攻撃兵器が飛躍的に進歩しても、

代の影響下に入ったものと言うべきである。

の性質は緊密に兵器の威力に関係し、全く時

加は敵正面の迂回を不可能にするため、戦争

の性質は緊密に兵器の威力に関係し、全く時

代の影響下に入ったものと言うべきである。

の性質は緊密に兵器の威力に関係し、全く時

代の影響下に入ったものと言うべきである。

の性質は緊密に兵器の威力に関係し、全く時

代の影響下に入ったものと言うべきである。

1項は一般文化と不可分であり、2項は主

として武器や築城に制約される問題であつて

時代性と密接な関係がある。ただし海軍によ

り海を以て完全な障害となし得る敵に対して

は、今日までは決戦戦争が不可能であつた。

空軍が真の決戦軍隊となるとき、初めてその

障害が全く力を失うのである。

即ち土地の広漠な東洋に於ては、両戦争の

時代性が明確であると言ひ難いが、強国が相

隣接し国土も余り広くなく、しかも霸道文明

のために戦争の本場である欧州に於ては、両

戦争が時代性と密に関連し、従つて両戦争が

交互に現われる傾向が顯著であつた。特に現

代の西欧では、軍隊の行動半径に対し土地の

広さはますます小さくなり、しかも兵力の増

加は敵正面の迂回を不可能にするため、戦争

戦車は攻撃的兵器である。第一次欧州大戦
 敵線の突破は再び至難となった。
 が巧みに分散するに従って、火砲の支援によ
 る敵線の突破は再び至難となった。
 敵線の突破を可能ならしめた。しかるに陣地
 速に高めたが、大口徑火砲の大量使用は一時
 機関銃の出現と築城の進歩とは防禦威力を急

より撃肘（せいちゆう）される。即ち近時の
 機関銃の出現と築城の進歩とは防禦威力を急
 速に高めたが、大口徑火砲の大量使用は一時
 敵線の突破を可能ならしめた。しかるに陣地
 が巧みに分散するに従って、火砲の支援によ
 る敵線の突破は再び至難となった。

小銃は攻撃よりも防禦に適する点が多い。
 殊に機関銃の防禦威力は、すこぶる大きい。
 これに対し、火砲は小銃に比し攻撃を有利に
 するが、その威力も築城と防禦方法の進歩に
 より撃肘（せいちゆう）される。即ち近時の
 機関銃の出現と築城の進歩とは防禦威力を急

徹底した決戦戦争の出現は望み難いのではな
 いか。
 答 武器が攻防いずれに有利であるかが、
 戦争の性質が持久・決戦いずれになるかを決
 定する有力な原因である。
 刀槍は裸体の個人間の闘争には決戦的武器
 であるが、鎧の進歩によってその威力は制限
 され、殊に築城に拠る敵を攻撃することは甚
 だしく困難となる。

は攻めることである。更に空中戦に於ては、
 く、防禦戦闘は至難であり、防ぐ唯一の手段
 な力となる。水上では土地の如き利用物がな
 てはそのまま強い障害ともなり、防禦に偉大
 戦闘では土地が築城に利用され、場所によつ
 全く比較を絶する決戦的兵器である。地上の
 としては極めて決戦的であるのに対しても、
 しかるに飛行機となると、戦車が地上兵器
 敵に対しては今日といえども必ずしも容易と
 は言えない。

戦車による敵陣地の突破は、十分に準備した
 に対し対戦車砲の整備は却って容易であり、
 しかし真剣な努力を以てすれば、戦車の整備
 敢な決戦戦争を強制し得た原因の一つである
 俟つて、ドイツ軍が弱小国及びフランスに果
 る戦車の数と質の大進歩は、空軍の威力と相
 った。爾来二十数年、第二次欧州大戦に於け
 戦戦争への変化を起させるまでには至らなか
 えたが、その質と量とは未だ持久戦争から決
 に於ける戦車の出現は、戦術界に大衝動を与

驚異的航空機、それに搭載して敵国の中枢部

となるであろう。成層圏を自由自在に駆ける

空軍に対する国土の防衛は、ますます困難

く低下させることは、まぬかれ難い。

り、仮に可能としても、各種の能力を甚だし

を地下に埋没しようとしても実行は至難であ

近い。空軍のこの威力に対し、あらゆるもの

戦闘は、制空権を失えば、ほとんど不可能に

の如き大目標防衛のための地上よりする防衛

に對しては、小さな目標はとにかく、大都市

圏にも行動し速度のますます大となる飛行機

その他の防空戦闘の方法は進歩しても、成層

きいのに対し、防空は至難である。対空射撃

の陸上や海上に對する攻撃の威力は極めて大

し得る範囲は極めて狭い。しかるに空中から

った歴史が多い。しかも海上から陸上を攻撃

遅れの海岸要塞を攻略することの不可能であ

的容易である。大艦隊をもつてしても、時代

海上よりの攻撃に對する陸上の防衛は比較

防禦は全く成立しない。

空機が兵器としての絶対性を失い、空軍建設威をほしいままにし得るに至ったならば、航

新兵器が数千、数万キロメートルの距離に猛

もし殺人光線、殺人電波その他の恐るべき

しての価値である。

に爆弾等を送り得ることが、飛行機の兵器と

て敵をいためるのではない。迅速に、遠距離

飛行機も軍艦と同様である。飛行機によつ

これに搭載される火砲や発射管から撃ち出さ

れる弾丸や魚雷によつて敵艦を打ち沈める。

艦体即ち「ふね」は敵を撃破する能力はない。

殺傷破壊の威力を発揮するのである。軍艦の

は、小銃や大砲は直接敵を殺傷する兵器で

うか。

機でなく、殺人光線や殺人電波等ではなかる

第十問 最終戦争に於ける決戦兵器は航空

を破壊する革命的兵器は、あらゆる防禦手段

を無効にして、決戦戦争の徹底を来たし、最

終戦争を可能ならしめる。

ようであるが、次に来たるべき戦闘方法に對なるだろうというので、考えには無理がないと分解して来た過程から推察して次は個人と日までの大勢、即ち大隊→中隊→小隊→分隊と分解して来た過程から推察して次は個人と

いのではないか。

答 指揮単位が個人になるとの判断は、今日までの大勢、即ち大隊→中隊→小隊→分隊と分解して来た過程から推察して次は個人と

を潰滅するために航空機が依然として必要である。

の必要がなくなるわけである。しかし最終戦争に用いられる直接敵を撃滅する兵器が、みずからかくの如き遠距離に威力を発揮し得ない限り、将来ますます行動力の飛躍的發展を見るべき航空機によることが必要であり、空軍が決戦軍隊として最終戦争に活用されなければならぬ。即ち破壊兵器として今日の爆弾に代る恐るべき大威力のものが発明されることと信ずるが、これを遠距離に運んで、敵を潰滅するために航空機が依然として必要である。

第十一問 最終戦争に於ける戦闘指揮単位は個人だと言うが、将来の飛行機はますます大型となり指揮単位が個人と言うのは当らないのではないか。

発達をなす兵数（全男子より全国民）、戦闘
 と異なり、想像に絶するものがある。数学的
 に超常識の大飛躍である。地上に於ける発達
 最終戦争への変転は再三強調したように、真

答 現時の持久戦争から次の決戦戦争即ち
 最終戦争への変転は再三強調したように、真
 はどうなると思うか。

第十二問 最終戦争に於ける戦闘指導精神
 正しいこととなる。

空中戦の勝負は主として小型戦闘機で決せら
 れるものとせば、指揮単位が個人と言うのが
 正しいこととなる。

大であるが、将来とも空中戦の主体は依然と
 して戦闘機であるとも考えられる。動力の大
 革命が行なわれ小型戦闘機の行動半径が大い
 に飛躍すれば、戦闘機は空中戦の花形として
 ますます重要な位置を占める可能性がある。
 大型機は編隊行動と火力のみでなく、装甲等
 による防禦をも企図するであろうが、空中で
 は水上のような重量の大きな防禦設備は望み
 難く、小型機はその攻撃威力を十分に発揮で
 きる。空中戦の優者が戦争の運命を左右し、

したところである。文化のある時期には封建あり、封建はすべての優秀民族が一度は経験

神でなければならぬ。専制を巧みに総合、発展させた高次の指導精神

必要の強制即ち専制的威力を用いると同時に各兵、各部隊の自主的独断的活動は更に多くを要求されるのである。専制的強制は自由活動を助長するためである（二八頁）。即ち統

統制には、混雑と力の重複を避けるために

隊形の幾何学的解釈（面より体）、戦闘指揮単位（分隊より個人）は別として、運用に関する戦闘隊形が戦闘群の次にどんなものになるかは、戦闘方法が全く想像もつかないのであるから判断ができない。同じく運用に関する戦闘指導精神が統制の次に、いかなるものであるかも、全く判断に苦しむ。それでこの二つは正直に白欄にしてあるのであるが、敢えて大胆に意見を述べることにする。

ようになることが望ましい。即ち統制訓練の
 官憲統制よりも自治統制の範囲を拡大し得る
 し、法律的制限は最小限に止めるべきである
 ない。元来、理想的統制は心の統一を第一と
 に於て、ますます自由を尊重しなければなら
 ない。益の摩擦、不経済な重複を回避し得る範囲内
 の熱情が依然として最も重要であるから、無
 憾なく發揮するためにも、個人の創意、個人
 の熱情が依然として最も重要であるから、無
 生じたのは、自然の勢いと言わねばならぬ。
 しかし統制によつて社会、国家の全能力を遺

自由から統制への後退であるが如き場面をも
 ややもすれば統制が自由からの進歩ではなく
 に社会的訓練の経験に乏しいわが国に於て、
 ならないのは、やむを得ないことである。殊
 動的に専制即ち強制を相当強く用いなければ
 き過ぎた私益中心を抑えるために、最初は反
 新しく統制に入るには、自由主義時代に行
 に進んだと同一理由である（二八頁）。
 ために自然に発生して来た新時代の指導精神
 に外ならない。戦闘指導精神が自由から統制

が、攻勢的軍隊は少数の精鋭を極めたものと
 けて堪え忍ぶ消極的戦争参加は全国民となる
 を必要とする。最終戦争では、敵の攻撃を受
 戦線に動員される。かくの如き大動員は義務
 時代である今日の持久戦には、全健康男子が
 フランス革命後、兵力が激増し殊に準決勝

で一身を捧げる真の義勇兵である。
 フランス革命以後、兵力が激増し殊に準決勝
 時代である今日の持久戦には、全健康男子が
 戦線に動員される。かくの如き大動員は義務
 を必要とする。最終戦争では、敵の攻撃を受
 けて堪え忍ぶ消極的戦争参加は全国民となる
 が、攻勢的軍隊は少数の精鋭を極めたものと

戦争時代は更に「義務」から「義勇」に進む
 フランス革命以後「義務」となったが、最終
 の傭兵時代に於ては「職業」であつたのに、

進むに従つて、専制的部面は逐次縮小される
 べきである。
 準決勝戦時代の統制訓練により、最終戦争
 時代の社会指導精神は、今日の統制より遙か
 に自由を尊重して、更に積極的に国家の全能
 力を発揮し得るものに進歩するであろう。「
 戦争史大観」では、兵役がフランス革命まで

あろう。の全能力を発揮するような社会状態となるで
 れた自由の精神を以て、自主的に良心的にそ
 れ、全人類一致精進の中にも、各人は精錬さ
 期に入れば、人々の自由は更に高度に尊重さ
 更に最終戦争終了後、即ち八紘一宇の建設

はなかるうか。の統制よりも更に多くの自由を許すことによ
 り、戦闘能力の積極的發揮に努めることとな
 るであろう。即ち自由と統制との総合発展で
 はなかるうか。

最終戦争時代の社会指導精神と同じく、今日

か。戦闘指導精神も兵役と同一の方向をとり、

この傾向に示唆を与えているのではなかるう
 チスの突撃隊、ファツシヨの黒シャツ隊等は
 の義勇的参加であることが最も望ましい。ナ
 まぬがれない。人も我も許す真に優れた人々
 では適当と言えぬ。義務はまだ消極的たるを
 かくの如き軍隊には公平に徴募する義務兵
 なるであろう（三六一―三七頁）。

ドイツを尊敬する人は、まずこの点を学ぶべ
 が科学、技術の進歩をもたらしたのである。
 今日、資源貧弱の苦境を克服するための努力
 ら、資源獲得にのみ熱狂している。ドイツの
 この頃の日本人は口に精神第一を唱えなが

てもこれを実現せねばならぬ。
 しかし天皇の御為め全人類のために、何とし
 て楽観してはいない。難事中の至難事である
 空想と笑われても無理はない。われらも決し
 るのである。たしかに驚くべき計画であり、

力をして米州の生産力を追い越させようとす
 もものとして、二十年を目標に東亜連盟の生産
 答 われらは三十年内外に最終戦争が来る

統制主義の今日は、人類歴史中最も緊張し
 た時代であり、少々の無理があっても最短期
 間に最大効果を挙げようとする合宿時代であ
 る。
 第十三問 日本が最終戦争に於て必勝を期
 し得るといふ客観的条件が十分に説明されて
 いない。単なる信仰では安心できないと思う。

しく、蘭印の石油はその末端と言われる。現
 マに至るアジアの大油脈があることは確実ら
 熱河から陝西、甘肅、四川、雲南を経てビル
 がある。石油は日本国内にも、まだまだある
 て来る。更に山西に行けば世界衆知の大資源
 の東半分は、どこを掘っても豊富な石炭が出
 い。石炭は日本内にも相当にあるが、満州国
 の東半分は、どこを掘っても豊富な石炭が出
 卓抜な方法が成功しつつある。檜崎式の如き
 それである。満州国の鉄の埋蔵量もすばらし
 い。石炭は日本内にも相当にあるが、満州国
 の東半分は、どこを掘っても豊富な石炭が出
 て来る。更に山西に行けば世界衆知の大資源
 がある。石油は日本国内にも、まだまだある
 熱河から陝西、甘肅、四川、雲南を経てビル
 マに至るアジアの大油脈があることは確実ら
 しく、蘭印の石油はその末端と言われる。現

法を模倣して来た日本は、まだ砂鉄精錬に完
 いると言える。ただ砂鉄の少ない西洋の製鉄
 でも鉄について日本は世界一の資源を持って
 あるいは百億トンと言われている。これだけ
 世界無比の日本刀を鍛えた砂鉄は八十億トン
 満支だけでも実に莫大な資源を蔵している。
 資源もある程度は必要である。しかるに日
 今日、この点が最も肝要である。
 る、いわゆる第二産業革命に直面しつつある
 きである。特に最終戦争と不可分の関係にあ

ただ問題となるのは、この人的物的資源を
 に高い能力を発揮し得ることを疑わない。
 美術工芸品を造ったあの力を活用し、速やか
 は驚くべき文化人である。世界の驚異である
 振を心配するが、大したことはない。支那人
 に世界最大の宝である。世人は支那の教育不
 に密集生活している五億の優秀な人口は、真
 る。日本海、支那海を湖水として日満支三国
 最大重要要素は今日以後は特に人的資源であ
 東亜の最大強味は人的資源である。生産の

方で、いかなる大資源が出るかも計り難い。
 陝西、四川以西の地は、ほとんど未踏査の地
 他の資源も決して恐れるに足りない。山西、
 功は、われらの確信するところである。その
 い方式が成功しつつある。前記の檜崎式の成
 る純日本式の簡単に優秀な世界無比の能率よ
 も今日まで困難な路を歩んで来たが、そろそ
 大規模な試掘を強行せねばならぬ。石炭液化
 川に油の出ることは世人の知るところである
 に熱河には石油が発見され、陝西、甘肅、四

僅々二十年内に大動員し得るかである。固より困難な大作業である。しかし革命によって根底的に破壊したソ連が、資源は豊富であるにせよ、広大な地域に資源も人も分散している不利を克服し、あの蒙昧な人民を使用して五年、十年の間に成功した生産力の大拡張を思うとき、われらは断じて成功を疑うことができない。ただし偉大な達見と強力な政治力が必要だ。一億一心も滅私奉公も、明確なこの大目標に力強く集中されて初めて真の意義を發揮する。

特に私の強調したいのは、西洋人が物質文明に耽溺しているのに、われらは数千年来の父祖の伝統によって、心から簡素な生活に安んじ得る点である。日本の一万トン巡洋艦が同じアメリカの甲級巡洋艦に比べて、その戦闘力に大きな差異があるのは、主として日本の海軍軍人の剛健な生活のためである。先日私は秋田県の石川理紀之助翁の遺跡を訪ねて無限の感にうたれた。翁は十年の長い年月、

決戦戦争時代には主として質が問題となるこ
 敗を決するものは主として量の問題であるが
 ここで注意すべきことは、持久戦争時代の勝
 に米州を凌駕する戦争力を養い得るだろう。
 困難ではあるが、われらは必ず二十年以内

えるものと信ずる。
 しつつある困難な防空にも、大きな光明を与
 ならぬ。この簡素生活は目下国民の頭を悩ま
 は空論するよりも率先してこれを実行せねば
 及ばぬ力を発揮し得るのである。日本主義者

準備に捧げることにより、西洋人の全く思い
 活を最大級に簡素化し、すべてを最終戦争の
 である。この東洋的・日本の精神を生かし、生
 べく進歩した科学的研究、改善を行なったの

の歌を詠み、香を薰じ、茶をたてつつ、誠に
 高い精神生活を営み、且つ農事その他に驚く
 送った。この簡素極まる生活の中に数十万首
 く家に帰った後も、極めて狭い庵室で一生を
 身起居し、その後、後嗣の死に会い、やむな
 草木谷という山中の四畳半ぐらいの草屋に単

ば全国民が胸の中に發明神社を建てて頂きたるが、残念ながら創立できなかつた。願わく動していた。私は極めて有意義な計画と信ずるが、残念ながら創立できなかつた。願わくば全国民が胸の中に發明神社を建てて頂きたるが、残念ながら創立できなかつた。願わく動していた。私は極めて有意義な計画と信ずるが、残念ながら創立できなかつた。願わくば全国民が胸の中に發明神社を建てて頂きたるが、残念ながら創立できなかつた。願わく

發明奨励のために国民が第一に心掛けねばならぬ。日本に於ける天才の一人である大橋為次郎翁は、皇紀二千六百年記念として、明治神宮の

ばならぬ。大の関心を払い、卓抜果敢な方策を強行せねばならぬ。

とである。しかし、われらが断然新しい決戦兵器を先んじて創作し得たならば、今日までの立遅れを一挙に回復することも敢えて難事ではない。時局が大急転するときには、後進国が先進者を追い越す機会を捉えることが比較的容易である。科学教育の徹底、技術水準の向上、生産力の大拡充が、われらの奮闘の目標であるが、特に發明の奨励には国家が最大の関心を払い、卓抜果敢な方策を強行せねばならぬ。

明奨励に出すことになるだろう。自分の力に
 講じたならば、成金は自分の儲けた全部を發
 しては極めて高い相続税を課する等の方法を
 べきである。更に一代の内に儲けた財産に対
 価値によつては、その保護者に授爵も奏請す
 正に恩賞を賜わることが肝要である。發明の
 績のあつたものに、職域等にこだわらず、公
 うが、統制時代には、真に国家に積極的な功
 る官吏が特別の恩賞に浴するのは当然である
 る。自由主義時代ならば、国家の統制下にあ

勲章は主として官吏に年功によつて授けられ
 ては勲章を賜わるようお願いする。現在では
 るとともに、その發明を保護したものに対し
 度まで成功すれば、その發明家に重賞を与え
 れば、發明の奨励はできない。發明がある程
 で思い切つた大金を投げ出し得るものでなけ
 い。よろしく成金を動員すべきである。独断
 發明奨励の方法は官僚的では絶対にいけな
 社会的重圧の下に葬られつつある。
 い。この重大時期に於て天才はややもすれば

域を作戦上絶対的に必要とはしないのである。徹底する最終戦争に於ては、必ずしも広い地域についても持久戦争時代と異なり、決戦戦争に
 ついては、慎重に考えねばならぬ。このことに
 れる。徒らに範囲拡大のために力を消耗する
 ことは、慎重に考えねばならぬ。このことに
 大建設のためにはなるべく長い平和が希望さ
 れる。徒らに範囲拡大のために力を消耗する
 同時に戦争と建設とはなかなか両立し難く、
 なるべく広い範囲が希望されるのであるが、
 題である。作戦上及び資源関係よりすれば、
 が協同範囲としなければならぬかは大問題
 である。作戦上及び資源関係よりすれば、
 なるべく広い範囲が希望されるのであるが、
 同時に戦争と建設とはなかなか両立し難く、
 大建設のためにはなるべく長い平和が希望さ
 れる。徒らに範囲拡大のために力を消耗する
 ことは、慎重に考えねばならぬ。このことに
 ついては、慎重に考えねばならぬ。このことに
 徹底的に最終戦争に於ては、必ずしも広い地

最終戦争のためには、どれだけの地域をわ
 積極的に発揮させるべきである。
 的でなく有機的に統一し、その全能力を自主
 り必要であるが、全日本の研究機関を、形式
 やかに工業化する。大研究機関の新設は固よ
 国家の研究機関で総合的學術の力によって速
 成功の確実な見込がついた発明は、これを
 誇りでなければならぬ。
 捧げることは、昭和時代の成金の名誉であり
 よって儲けた富を最終戦争準備の発明奨励に

のであり、この信仰を全国民に伝えたい熱望
 聖人の信者として、聖人の予言を確信するも
 実は甚だ意外とするところである。私は日蓮

現代人には了解できない。

答 この種の質問を度々受けるのは、私の

明されているが、科学的に説明されない限り
 第十四問 最終戦争の必然性を宗教的に説
 明されるからである。日本国体の靈力が、あらゆる
 不足を補って、最終戦争に必勝せしめる。

この信仰により常に光明と安心とを与えられ
 ちこんでも泰然、敢然と邁進する原動力は、

理想達成に対する国民不動の信仰が、いかな
 る困難をも必ず克服する。苦境のどん底に落
 るものは、国民の信仰である。八紘一宇の大
 能である。そしてこの超人的事業を可能にす
 われらの全能力を総合運用すれば、断じて可
 の客観的条件は固より樂觀すべきではないが

ある。以上
 以上の如く、われらが最終戦争に勝つため
 優秀な武力が一挙に決戦を行ない得るからで

の研究を等閑にし、殊に自由主義時代には、
 かろうか。日本の知識人は今日まで軍事科学
 断も相当に科学的であるとも言い得るではな
 地に立てば、不完全な私の最終戦争必至の推
 て科学的に正確なものとは言えない。この見
 との判断は結局、一つの推断であって、決し
 資本主義時代の後に無産者独裁の時代が来る
 学的とみずから誇るマルクス主義に於てすら
 って証明することは不可能のことである。科
 かくの如き総合的社会現象を完全に科学をも
 学的とみずから誇るマルクス主義に於てすら
 って証明することは不可能のことである。科

とは、固より自認するところである。しかし
 私の軍事科学の説明が甚だ不十分であるこ
 い。
 事研究を傍証するために挙げた一例に過ぎな
 の大勢、科学・産業の進歩とともに、私の軍
 考察を基礎とするもので、仏の予言は政治史
 れることと信ずる。この論は私の軍事科学的
 少しく丁寧に読まれた人々には直ちに理解さ
 て宗教的説明を主とするものでないことは、
 をもっている。しかし「最終戦争論」が決し

特権である。人もし宇宙の靈妙な力を否定すに突入し得るのは、天から人類に与えられたを正しく働かして、科学的考察の及ばぬ秘密に過ぎない。宇宙間には靈妙な力があり、人間もその一部分をうけている。この靈妙な力を正しく働かして、科学的考察の及ばぬ秘密に突入し得るのは、天から人類に与えられた特権である。人もし宇宙の靈妙な力を否定す

る」と批難する人が多い由を耳にする。人智がいかに進んでも、脳細胞の数と質に制約されて一定の限度があり、科学的検討にも、おのずから限度がある。そしてそれは宇宙の森羅万象に比べては、ほんの局限された一部分に過ぎない。宇宙間には靈妙な力があり、人間もその一部分をうけている。この靈妙な力を正しく働かして、科学的考察の及ばぬ秘密に突入し得るのは、天から人類に与えられた

を欠く。『最終戦争論』に予言を述べているのは穩当を欠く。予言の如きは世界を迷わすものであ近時、宗教否定の風潮が強いのに乗じ、「はなかるうか。また戦争は多くの社

『最終戦争論』に予言を述べているのは穩当を欠く。予言の如きは世界を迷わすものであ近時、宗教否定の風潮が強いのに乗じ、「はなかるうか。また戦争は多くの社

論に達するだろうとの信念の下に、若干の思
 則に基づき、各方面から観察しても同一の結
 は一般文明の発展と歩調を同じくするとの原
 敢えて世に発表したのである。その際、軍事
 より、やや具体的に解釈し得たとの考えから
 とする軍事科学の貧弱ながら良心的な研究に
 によって直感している最終戦争を、私の専門
 以外は皆無に近い。「最終戦争論」は、信仰
 答 全くその通りである。私の知識は軍事
 説明が不十分であると思う。

第十五問 産業大革命の必然性についての
 底である。
 祖皇宗のこの大予言は実にわれらが安心の根
 宇」の大予言を、いかに拝しているのか。皇
 科学万能の現代人は、「天壤無窮」「八紘一
 を有したのである。予言を批難しようとする
 者は、よく数千年の後を予言し得る強い靈力
 となる。天照大神、神武天皇、釈尊の如き聖
 日本国体の神聖は、その重大意義を失う結果
 るならば、それは天御中主神の否定であり、

昨年の末感ずるところあり、京都で御世話

序文

「#ここから野囲み」

「#改ページ」

戦争史大観

「#ページの左右中央」

「#改丁」

いつきを述べたに過ぎない。
 この質疑回答の中にも、私の分を越えた僭
 越な独断が甚だ多いのは十分承知しており、
 誠にお恥ずかしい極みである。志ある方々が
 思想・社会・経済等あらゆる方面から御検討
 の上、御教示を賜わらんことを切にお願い申
 上げる次第である。「東亜連盟」誌上の橘樸
 氏の発表に対しては、私は心から感激してい
 る。

になつた方々及び部下の希望者に「戦争史大
 観」を説明したい気持になり、年末年始の休
 みに要旨を書くつもりであったが果さなかつ
 た。正月に入つて主として出張先の宿屋で書
 きつづけ二月十二日辛うじて脱稿した。
 二月末高木清寿氏来訪、原稿をお貸しした
 ところ、執拗に出版を強要せられ遂に屈伏し
 てしまった。そこで読み直して見ると前後重
 複するところもあり、補修すべき点も少なく
 ないが、現役最後の思い出として取敢えずこ
 のまま世に出すこととした。

昭和十六年四月八日

於東京 石原莞爾

「#ここで罫囲み終わり」

「#改丁」

第三部 戦争史大観

第一篇 戦争史大観

昭和四年七月長春に於ける講話要領

昭和十三年五月新京に於て訂正

昭和十五年一月京都に於て修正

第一 緒論

一 戦争の進化は人類一般文化の発達と歩調を一にす。即ち、一般文化の進歩を研究して

戦争発達の状態を推断し得べきとともに、戦争進化の大勢を知るときは、人類文化発達の方向を判定するため有力なる根拠を得べし。二 戦争の絶滅は人類共通の理想なり。しかれども道義的立場のみよりこれを実現するの至難たることは、数千年の歴史の証明するところなり。

戦争術の徹底せる進歩は、絶対平和を余儀なからしむるに最も有力なる原因となるべく、その時期は既に切迫しつつあるを思わし

も、持久戦争に於ては武力の絶対的位置を低
 交・財政は第二義的価値を有するに過ぎざる
 二 決戦戦争に在りては武力第一にして、外
 戦争と称すべし。
 こと多し。前老を決戦戦争とせば後者は持久
 より武力は、みずからすべてを解決し得ざる
 を圧倒するにあり。しかれども種々の事情に
 一 戦争本来の目的は武力を以て徹底的に敵
 第二 戦争指導要領の変化
 の第一歩たるべし。
 を發揮するときにして、やがてこれ絶対平和
 傾向に徹底するときは、人類争闘力の最大限
 争指導等が戦争本来の目的に最もよく合する
 即ち、戦闘法等が最後の発達を遂げ、戦
 戦闘法及び軍の編成等は整然たる進歩をなす。
 る二傾向の間を交互に動きつつあるに対し、
 三 戦争の指導、会戦の指揮等は、その有す
 む。

と。
 欧州大戦等。

攻撃威力が当時の防禦線を突破し得ざるこ

変等。
 ナポレオンの露国役、日露戦争、支那事

争等。
 軍隊の運動力に比し戦場の広きこと。

久戦争となる主なる原因次の如し。
 軍隊の価値低きこと。

十七、八世紀の傭兵、近時支那の軍閥戦

主とするか等各種の場合を生ず。しかして持

と生ず。即ち、武力行使に於ても、会戦を主

とするか小戦を主とするか、あるいは機動を

力価値の如何により戦争の状態に種々の変化

三 持久戦争は長期にわたるを通常とし、武

するに至ることあり。

遂に将帥は政治の方針によりその作戦を指導

するも後者に在りては逐次政略の地位を高め

む。即ち、前者に在りては戦略は政略を超越

下するに従い、財政・外交等はその地位を高

に信ぜられあるも、歴史は再び決戦戦争の時に
 五 長期戦争は現今、戦争の常態なりと一般
 せるも、目的を達せずして戦争を終れり。
 各交戦国は極力この苦境より脱出せんと努力

戦争に陥り、タンク、毒ガス等の使用により
 運用の困難なるを示し、欧州大戦は遂に持久
 は、南阿戦争、日露戦争に於て既に殲滅戦略
 すますその発展を見たるも、防禦威力の増加

略の運用開始せられ、決戦戦争の時代となれ
 り。モルトケ、シュリーフェン等により、ま
 大王歿後三年にして起れるフランス革命

は、傭兵より国民皆兵に変化せしめて戦術上
 に大変化を来たし、ナポレオンにより殲滅戦
 兵術発展の頂点をなす。

は傭兵を生み、その結果、持久戦争の時代と
 なれり。フリードリヒ大王は、この時代の用
 四 両戦争の消長を觀察するに、古代は国民
 皆兵にして決戦戦争行なわれたり。用兵術も
 また暗黒時代となれる中世を経て、ルネッサ
 ンスとともに新用兵術生まれしが、重金思想

代を招来すべきを暗示しつつあり。しかして
 将来戦争は恐らくその作戦目標を敵国民とな
 すべく、敵国の中心に一挙致命的打撃を加う
 ることにより、真に決戦戦争の徹底を来たす
 べし。

第三 会戦指揮方針の変化

一 会戦指揮の要領は、最初より会戦指導の
 方針を確立し、その方針の下に一挙に迅速に

決戦を行なうと、最初はずななるべく敵に損
 害を与えつつ、わが兵力を愛惜し、機を見て
 決戦を行なうとの二種に分かつを得べし。
 二 しかして両者いずれによるべきやは、将
 帥及び軍隊の特性と当時の武力の強靱性いか
 んによる。

ギリシャのファランクスは前者に便にし
 て、ローマのレギオンは後者に便なり。これ
 主として両国国民性の然らしむるところ。ギ
 リシャ民族に近きドイツと、ローマ民族に近

ない、会戦指揮は、またもや第二線決戦を主なる正面突破のため深き縦長を以て攻撃を行州大戦に於て敵翼包囲不可能となるや、強固イテン会戦指導原理と相通ずるものあり。欧に於けるドイツ軍のフランス侵入方法は、口横隊戦術に近似するに至れり。欧州大戦初期増すに従い、戦闘正面の拡大を来たし逐次、爾後、火器の発達により正面堅固の度を側面の強度を増せるため自然、後者を有利とする事多し。

的配置により戦闘力の韌強性を増加し、且つ三横隊戦術に於ては前者を有利とするに對し、ナポレオン時代の縦隊戦術は兵力の梯次的配置により戦闘力の韌強性を増加し、且つ偶然とのみ称し難きか。

定すべからず。
 一 ならざりしも、この大勢に従いしことは否
 二 實際に於ける戦闘法の進歩は右の如く単
 分隊とす。その戦闘指導精神は統制なり。

戦闘群戦術は「面」の戦法にして単位は
 と言わざるべからず。
 その民族は既にこの戦法時代に於ける落伍者
 もし散兵戦闘を小隊長に委すべからずとせば
 は苦労性なる日本人の特性を表わす一例なり。

日露戦後、射撃指揮を中隊長に回収せる
 戦術にありては「自由」なり。
 神は横隊戦術に於ては「専制」にして、散兵
 にして単位は小隊を自然とす。戦闘の指導精
 神は横隊戦術に於ては「専制」にして、散兵
 して単位は中隊、散兵戦術は「点線」の戦法
 位は大隊なり。横隊戦術は「実線」の戦法に
 一 古代の密集戦術は「点」の戦法にして単

第四 戦闘方法の進歩

とするに至れり。

しありしも遂に、ここに着意する能わずしてのドイツ軍は既に思想的には方面軍を必要とする不便を嘗（な）めたりしが、欧州大戦前がら、依然一軍としての指揮法をとり、非常なる不便を嘗（な）めたりしが、欧州大戦前のドイツ軍は既に思想的には方面軍を必要としありしも遂に、ここに着意する能わずして

三 国軍の編制は兵力の増加に従い逐次拡大せり。特に注目に値するは、ナポレオンの一八一二年役に於て、実質に於て三軍を有しながら、依然一軍としての指揮法をとり、非常なる不便を嘗（な）めたりしが、欧州大戦前のドイツ軍は既に思想的には方面軍を必要としありしも遂に、ここに着意する能わずして

二 将来、戦闘員の採用は恐らく義務より義勇に進むべく、戦争に当りては全国民が殺戮の渦中に投入せらるべし。

一 職業者よりなる傭兵時代は兵力大なる能わず。国民皆兵の徹底により逐次兵力を増加し、欧州大戦には全健康男子これに加わるに至れり。

の編成
第五 戦争参加兵力の増加と国軍
三 将来の戦術は「体」の戦法にして、単位は個人なるべし。

せられ、絶対平和の第一歩に入るべし。

用うるものにして、人類の最後の大戦争なるべし。即ち、この大戦争によりて世界は統一

二 前述せる戦争の発達により見るときは、この大戦争は空軍を以てする決戦戦争にして次に示す諸項より見て人類争闘力の最大限を用うるものにして、人類の最後の大戦争なるべし。

一 欧州戦争は欧州諸民族の決勝戦なり。「

世界大戦」と称するは当らず。

第一・第二・第三軍を第二軍司令官に指揮せしめ、国境会戦にてフランス第五軍を逸する一大原因をなせり。

然り。人智の幼稚なるを痛感せずんばあらず。戦史の研究に熱心なりしドイツ軍にして

第六 将来戦争の予想

真に徹底せる決戦戦争なり。

吾人は体以上のものを理解する能わず。

全国民は直接戦争に参加し、且つ戦闘員は個人を単位とす。即ち各人の能力を最大限に

発揚し、しかも全国民の全力を用う。

三 しからばこの戦争の起る時機いかん。

東亞諸民族の団結、即ち東亞連盟の結成。

米国が完全に西洋の中心たる位置を占むること。

決戦用兵器が飛躍的に発達し、特に飛行機

は無着陸にて容易に世界を一周し得ること。

右三条件はほとんど同速度を以て進みあるが如く、決して遠き将来にあらざること
を思わしむ。

第七 現在に於ける我が国防

一 天皇を中心と仰ぐ東亞連盟の基礎として
まず日滿支協同の完成を現時の国策とす。

二 国防とは国策の防衛なり。即ち、わが現

在の国防は持久戦争を予期して次の力を要求す。

ソ国の陸上武力と米国の海上武力に対し東亜を守り得る武力。

目下の協同体たる日満両国を範囲とし自給自足をなし得る経済力。

三 満州国の東亜連盟防衛上に於ける責務真に重大なり。特にソ国の侵攻に対しては、在大陸の日本軍とともに断固これを撃破し得る自信なかるべからず。

「#底本121頁に「付表第二 近世戦争進
化景況一覧表」入る」

「#改ページ」

第二篇 戦争史大観の序説（別名・戦
争史大観の由来記）

昭和十五年十二月三十一日於京都脱稿

昭和十六年六月号「東亜連盟」に掲載

私が、やや軍事学の理解がつき始めてから

対服従の規律の前に屈伏させる一手段である
 かこれらの度胆を抜き、不慣れの集団生活と絶
 んでいる。兵の生活様式を急変することは、
 ない腰掛を強制し、また窮屈な寝台に押し込
 める日本式であるが、田舎出身の兵隊に、慣れ
 ているのは果して適当であろうか。脱靴だけ
 は日本式であるが、田舎出身の兵隊に、慣れ
 ているのは果して適当であろうか。脱靴だけ
 は、よいとしても、兵營がなお純洋式となっ
 た。脱靴だけ
 は、よいとしても、兵營がなお純洋式となっ
 た。脱靴だけ
 は、よいとしても、兵營がなお純洋式となっ
 た。脱靴だけ

陸軍の師表として仰がれるに至った。日本陸
 軍は未だにドイツ流の直訳を脱し切っていな
 い。例えば兵營生活の一面に於ても、それが
 顕著に現われている。服装が洋式になったの
 は、よいとしても、兵營がなお純洋式となっ
 た。脱靴だけ
 は、よいとしても、兵營がなお純洋式となっ
 た。脱靴だけ
 は、よいとしても、兵營がなお純洋式となっ
 た。脱靴だけ

殊に陸大入校後、最も頭を悩ました一問題は
 日露戦争に対する疑惑であった。日露戦争は
 たしかに日本の大勝利であった。しかし、い
 かに考究しても、その勝利が僥倖の上に立っ
 ていたように感ぜられる。もしロシヤが、も
 う少し頑張つて抗戦を持続したなら、日本の
 勝利は危なかつたのではなからうか。

た。当時、漢口には一個大隊の日本軍が駐屯した。その後、漢口の中支那派遣隊司令部付となつた。

陸大卒業後、半年ばかり教育総監部に勤務した。その後、漢口の中支那派遣隊司令部付となつた。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

画の下に国防の大方針を確立せねばならぬ。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

陸大卒業後、半年ばかり教育総監部に勤務した。その後、漢口の中支那派遣隊司令部付となつた。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

画の下に国防の大方針を確立せねばならぬ。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

陸大卒業後、半年ばかり教育総監部に勤務した。その後、漢口の中支那派遣隊司令部付となつた。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

画の下に国防の大方針を確立せねばならぬ。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

陸大卒業後、半年ばかり教育総監部に勤務した。その後、漢口の中支那派遣隊司令部付となつた。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

画の下に国防の大方針を確立せねばならぬ。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

陸大卒業後、半年ばかり教育総監部に勤務した。その後、漢口の中支那派遣隊司令部付となつた。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

今日、世界列強が日本を嫉視している時代となつては、正しくその真相を捉え根底ある計画の下に国防の大方針を確立せねばならぬ。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

陸大卒業後、半年ばかり教育総監部に勤務した。その後、漢口の中支那派遣隊司令部付となつた。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

画の下に国防の大方針を確立せねばならぬ。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

陸大卒業後、半年ばかり教育総監部に勤務した。その後、漢口の中支那派遣隊司令部付となつた。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

画の下に国防の大方針を確立せねばならぬ。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

陸大卒業後、半年ばかり教育総監部に勤務した。その後、漢口の中支那派遣隊司令部付となつた。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

画の下に国防の大方針を確立せねばならぬ。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

陸大卒業後、半年ばかり教育総監部に勤務した。その後、漢口の中支那派遣隊司令部付となつた。

これは私の絶えざる苦悩であつた。

深刻にその本質を突き止めていたなら、ある

日露戦争時代に日本が対露戦争につき真に

それが私の青年時代からの大きな疑問であつた。

を立って置かねばならないのではないか。こ

のみでなく、戦争の全般につき明確な見通し

っている。日本の対露戦争には単に作戦計画

ドイツのフランスに対するそれとは全く異なる

しかしながら日本のロシアに対する立場は

計画は第一会戦までしか立たないものである。

計画を立てて置けば充分である。元来、作戦

計画を立てて置けば充分である。元来、作戦

していたのである。漢口の勤務二個年間、心
 ひそかに研究したことは右の疑問に対してで
 あった。しかし読書力に乏しい私は、殊に適
 当と思われる軍事学の書籍が無いため、東亞
 の現状に即するわが国防を空想し、戦争を決
 戦的と持続的との二つに分け、日本は当然、
 後者に遭遇するものとして考察を進めて見た。
 ロシヤ帝国の崩壊は日本の在来の対露中心
 の研究に大変化をもたらした。それは実に日
 本陸軍に至大の影響を及ぼし、様々に形を変
 えて今日まで、すこぶる大きな作用を為して
 いる。ロシヤは崩壊したが同時に米国の東亞
 に対する関心は増大した。日米抗争の重苦し
 い空気は日に月に甚だしくなり、結局は東亞
 の問題を解決するためには対米戦争の準備が
 根底を為すべきなりとの判断の下に、この持
 続的戦争に対する思索に漢口時代の大部分を
 費やしたのであった。当時、日本の国防論と
 して最高権威と目された佐藤鉄太郎中将の『
 帝国国防史論』も一読した。この史論は、明

一党とベルリン大学のデルブリュック教授との論争に関する説明をきき、年来の研究に対し光明を与えられしことの大なるを感知してこの方面の図書を少々読んだのであるが、語学力が不充分で、読書力に乏しい私は、あるいは半解に終わったかとも思われるが、ともかくデルブリュック教授の殲滅戦略、消耗戦略の大体を会得し得て盛んにこの言葉を使用し陸軍大学に於ける私の欧州古戦史の講義には戦争の二大性質としてこの名称を用いたのであつた。

あつた。

ドイツに赴く途中、シンガポールに上陸の

際、国柱会（こくちゅうかい）の人々から歓迎された席上に於て、私はシンガポールの戦略的重要性を強調し、英国はインドの不安を抑え、豪州防衛のために戦略的側面陣地価値ある同地を、近く要塞化すべきを断じたのであつたが、この後、間もなく実現したので、当時列席した人から感慨深い挨拶状を受けたことがあつた。

明治四十二年末、少尉任官とともに山形の歩
 団結して訓練第一主義に徹底したのである。
 集めて新設されたのであったが、それが一致
 この連隊は幹部を東北の各連隊の嫌われ者を
 も最も緊張した活気に満ちた連隊であった。
 松歩兵第六十五連隊は、日本の軍隊中に於て

明治の末から大正の初めにかけての会津若
 要する若干の図書を買い集めたのであった。
 味深い研究なるべしと信じ、兩名将の研究に

王の消耗戦略からナポレオンの殲滅戦略への
 ねての宿望であったナポレオンを研究し、大

フリードリヒ大王の研究を必要とし、且つか
 ツクとドイツ参謀本部最初の論争戦であった
 につき少しく研究するとともに、デルブリュ
 ず、誠にお恥ずかしい次第である。欧州大戦
 不充分と怠慢性のため充分に勉強したと言え
 興味を持って研究したのであるが、語学力の
 が殲滅戦略から消耗戦略に変転するところに
 ドイツ留学の二年間は、主として欧州大戦

大人気ないので私は、それに対し何も言ったでも勉強したものだと思っただけだ。余り思議だ」として、多分、他人の寝静まった後に驚いて「石原は、いつ勉強したか、どうも不は入学試験に合格した。これには友人たちもを馬革に包み得ていたであろう。しかるに私の武人たる私の天職に従い、恐らく今日は屍を馬革に包み得ていたであろう。しかるに私は自信ある部隊長として、真に一介ある。私の希望通り陸大に入校しなかつたならば、私は自信ある部隊長として、真に一介の武人たる私の天職に従い、恐らく今日は屍を馬革に包み得ていたであろう。しかるに私は入学試験に合格した。これには友人たちも驚いて「石原は、いつ勉強したか、どうも不思議だ」として、多分、他人の寝静まった後でも勉強したものだと思っただけだ。余り大人気ないので私は、それに対し何も言った

連隊の名誉のためとして、比較的士官学校卒業成績の良かった私を無理に受験させたのである。私の希望通り陸大に入校しなかつたならば、私は自信ある部隊長として、真に一介の武人たる私の天職に従い、恐らく今日は屍を馬革に包み得ていたであろう。しかるに私は入学試験に合格した。これには友人たちも驚いて「石原は、いつ勉強したか、どうも不思議だ」として、多分、他人の寝静まった後でも勉強したものだと思っただけだ。余り大人気ないので私は、それに対し何も言った

兵第三十二連隊から若松に転任した私は、私の一生中で最も愉快な年月を、大正四年の陸軍大学入校まで、この隊で過ごしたのであるいな、陸軍大学卒業までも、休みの日に第四中隊の下士室を根城として兵とともに過ごした日は、極めて幸福なものであった。

私自身は陸大に受験する希望がなかつたのであるが、余り私を好かぬ上官たちも、連隊

創設以来一名も陸大に入学した者がないので

世人に、更に外国人にまで納得させる自信を
 確信し、みずから安心して持っているもの、兵に
 に対する信念は断じて動揺することはないと
 私どもは幼年学校以来の教育によって、国体
 体に関する信念感激をたたき込むかであった
 に、いかにしてその精神の原動力たるべき国
 この一身を真に君国に捧げている神の如き兵
 対する敬愛の念であり、心を悩ますものは、
 この猛訓練によって養われて来たものは兵に
 訓練、殊に銃剣術は今でも思い出の種である

ていたのであるが、会津の数年間に於ける猛
 山形時代も兵の教育には最大の興味を感じ
 きな不思議であったらしい。

思う。しかしこれは連隊や会津の人々には大
 入学試験の通過はむしろ偶然であったろうと
 あのころは記憶力も多少よかったらしいが、
 軍服のまま寝込む日の方が多かったのである
 場で聞いていた私は、宿に帰れば疲れ切って
 おり、消灯ラッパを通常は将校集会所の入浴
 ことはなかったが、起床時刻には連隊に出て

時わが陸軍では散兵戦術から今日の戦闘群の
 明らかである。教育総監部に勤務した頃、当
 見て至大の興味を感じたことは今日も記憶に
 的先駆思想であると信ずるが、私がこの案を
 られる「兵力節約案」は、面の戦術への世界
 して発表された恐らく曾田中将の執筆と考え
 らしい。大正三年夏の「偕行社記事別冊」と
 想であった。いな恐らくその前からであった
 更に面になったことは陸軍大学在学当時の着
 歩して来たこと、即ち戦闘隊形が点から線に

戦闘法が幾何学的正確さを以て今日まで進
 研究に不動の目標を与えたのである。
 浮提（えんぶだい）に起るべし」は私の軍事
 人の「前代未聞の大闘諍（とうじょう）一閻
 会の信行員となつたのであった。殊に日蓮聖
 心を得、大正九年、漢口に赴任する前、国柱
 あるが、遂に私は日蓮聖人に到達して真の安
 はむずかしい本を熱心に読んだことも記憶に
 （かけい）博士の「古神道大義」という私に
 得るまでは安心できないのである。一時は算

のだから、国家の全力を挙げて最優秀の飛行
 ず戦争は空軍により決せられ世界は統一する
 どをかれこれ見て歩かれるのか。余り遠から
 指名したので私は立って、「何のため大砲な
 当時大尉）が五分間演説を提案し最初に私を
 席に連なったのであるが、補佐官坂西少将（
 大使館武官の招宴があり、私ども駐在員も末
 ため欧州旅行の途中ベルリンに来られたとき
 何年か忘れたが、緒方大将一行が兵器視察の
 留学中には全く確信を得たのであった。大正

の三つが重要な因子となって進み、ベルリン
 次に体となること。
 3 戦闘隊形は点から線に、更に面に進んだ
 2 戦争性質の二傾向が交互作用をなすこと
 1 日蓮聖人によって示された世界統一のた
 めの大戦争。
 私の最終戦争に対する考えはかくて、
 いたのは、この思想の結果であった。
 あるが、私が自信を以て積極的意見を持って
 戦法に進むことに極めて消極的であったので

た問題であったため、遂に勇を鼓してお受け
 励があり、もともと私の最も興味をもってい
 あり、一時は躊躇したが再三の筒井中将の激
 の二年学生に欧州古戦史を受け持てとの話が
 が、大正十五年初夏、故筒井中将から、来年
 ドイツから帰国後、陸軍大学教官となった
 を言っつて、あきれられたことも覚えている。
 の首都を再建すべきだ」といったようなこと
 し戦争終結後、世界の人々の献金により世界
 から、それまでの数十年はバラツクの生活を

ある。世界統一のための最終戦争が近いのだ
 東京に十億の大金をかけることは愚の至りで
 引出された。席上で「大震災により破壊した
 ルビン」で国柱会の同志に無理に公開演説に
 ヤ經由でドイツから帰国の途中、哈爾賓（ハ
 特に御挨拶があった。大正十四年秋、シベリ
 陸軍大臣官邸で同大将にお目にかかったとき
 これは緒方大将を少々驚かしたらしく数年後
 第一」というようなことを述べたのであるが
 機を製作し得るよう今日から準備することが

することになった。

かくて同年夏、会津の川上温泉に立て籠もり、
り日本文の参考資料に熱心に目を通した。もちろ
ちろん泥縄式の甚だしいものであったが、講
義の中心をなす最終戦争を結論とする戦争史
観は脳裡に大体まとまっていたので、とりあ
えず何とか片付け、大正十五年暮から十五回
にわたる講義を試みたのであった。「近世戦
争進化景況一覧表」(一二一頁参照)はその
ときに作られたのである。

169

3370

昭和二年の同二年学生に対する講義は三十
五回であったが、今度は少し余裕があったた
め、ドイツから持ち帰った資料を勉強し、更
にドイツにいた原田軍医少将(当時少佐)、
オーストリア駐在武官の山下中将をもわずら
わして不足の資料を収集した。昭和元年から
二年への冬休みは、安房(あわ)の日蓮聖人
の聖蹟で整頓した頭を以て、とにかく概略の
講義案を作成した。もちろん、根本理論は前
年度のものとは変化はないのである。当時、陸

3380

3375

3365

軍大学幹事坂部少将から熱心な印刷の要望があつたが、充分に検討したものでないの
 これに応ずる勇氣も無く、現在も私の手元に
 保存してある次第である。

昭和三年年度のためには、前年の講義録を再
 修正する前に、私の年来最大の関心事である
 ナポレオンの対英戦争の大陸封鎖の項に当面
 し、全力を挙げて資料を整理し、昭和二年か
 ら三年への年末年始は、これを携えて伊豆の
 日蓮聖人の聖蹟に至り、構想を整頓して正月
 中頃から起草を始めようとしたとき、流感に
 かかり中止。その後、再び着手しようとする
 と今度は猛烈な中耳炎に冒されて約半歳の間
 陸軍軍医学校に入院し、遂に目的を達せずし
 て終わったのであった。その後もこの研究、特
 に執筆を始めると不思議にも必ず病気にかか
 るので「アメリカの神様が必死に邪魔をする
 んだらう」などと冗談を言うような有様であ
 った。

昭和二年の晩秋、伊勢神宮に参拝のとき、

に万難を排しナポレオンの対英戦争を書き上

の研究を必ず続ける意気込みで赴任した。特

に万難を排しナポレオンの対英戦争を書き上

の満鉄の地方課長から散々に油をしぼられた

経験は、今日もなお記憶に残っている。

閑東軍に転任の際も、今後とも欧州古戦史

の満鉄の地方課長から散々に油をしぼられた

経験は、今日もなお記憶に残っている。

閑東軍に転任の際も、今後とも欧州古戦史

の満鉄の地方課長から散々に油をしぼられた

経験は、今日もなお記憶に残っている。

閑東軍に転任の際も、今後とも欧州古戦史

の満鉄の地方課長から散々に油をしぼられた

経験は、今日もなお記憶に残っている。

閑東軍に転任の際も、今後とも欧州古戦史

の満鉄の地方課長から散々に油をしぼられた

経験は、今日もなお記憶に残っている。

閑東軍に転任の際も、今後とも欧州古戦史

の満鉄の地方課長から散々に油をしぼられた

栄に浴し得なかった。満鉄の理事などにも同

席は不可能なことで、奉天の兵営問題で当時

の満鉄の地方課長から散々に油をしぼられた

経験は、今日もなお記憶に残っている。

閑東軍に転任の際も、今後とも欧州古戦史

の満鉄の地方課長から散々に油をしぼられた

経験は、今日もなお記憶に残っている。

閑東軍に転任の際も、今後とも欧州古戦史

の満鉄の地方課長から散々に油をしぼられた

経験は、今日もなお記憶に残っている。

閑東軍に転任の際も、今後とも欧州古戦史

の満鉄の地方課長から散々に油をしぼられた

経験は、今日もなお記憶に残っている。

閑東軍に転任の際も、今後とも欧州古戦史

の満鉄の地方課長から散々に油をしぼられた

ぶ地位ではなかった。旅順で閑東庁と閑東軍

閑東軍参謀は今日考えられるように人々の喜

昭和三年十月、閑東軍参謀に転補。当時の

固（きょうこ）に焼き付いている。

当時の厳粛な気持は今日もなお私の脳裏に鞏

無く、そのままに秘して置いたのであるが、

は他言すべきでない、誰にも語ったことも

余り良い顔をされなかった。こんなこと

私の最も尊敬する佐伯中佐にお話したところ

国威西方に燦然として輝く靈威をうけて帰来

を明らかにすることにした。

ける「殲滅戦略」「消耗戦略」との間の区別

戦争」「消耗戦争」の名を用いて、戦略に於

考えを起し、この頃から戦争の性質を「殲滅

と命名していたのは、どうも適当でないとの

争の性質の両面を「殲滅戦略」「消耗戦略」

の影響強きに失し、戦争指導の両方式即ち戦

の講義は未消化であり、特にデルブリュック

果し得なかったが、しかし陸大教官二個年間

かような関係で族順では遂に予定の計画を

執務した有様であった。

破壊し、殊に満州事変当時は大半、横臥して

でなく、且つ中年の中耳炎は根本的に健康を

ったなどの関係上、爾後の健康は昔日の如く

あり、また漢口から帰国後、マラリヤにかか

見るようになり、一時は相当に激しいことも

木炭中毒にかかり、それ以来、脈搏に結滞を

に初志を貫きかねた。漢口駐屯時代に徐州で

は相当にひどく、何をやっても疲れ勝ちで遂

げる決心であった。しかし中耳炎病後の影響

「殲滅戦争」「消耗戦争」の名称を「決戦戦争」「持久戦争」に改めたのは満州事変以後のことである。

昭和四年五月一日、関東軍司令部で各地の特務機関長らを集め、いわゆる情報会議が行なわれた。当時の軍司令官は村岡中将で、河本大佐はその直前転出し、板垣征四郎大佐が着任したばかりであった。奉天の秦少将、吉林の林大八大佐らがいたように覚えている。

この会議はすこぶる重大意義を持つに至った。それは張作霖（ちようさくりん）爆死以後の状況を見ると、どうも満州問題もこのままでは納まりそうもなく今後、何か一度、事が起ったなら結局、全面的軍事行動となる恐れが充分にあるから、これに対する徹底せる研究が必要だとの結論に達したのであった。その結果、昭和四年七月、板垣大佐を総裁官とし、関東軍独立守備隊、駐劄（ちゆうさつ）師団の参謀らを以て、哈爾賓、齊々哈爾（チチハル）、海拉尔（ハイラル）、満州里（マンチ

断じて恐れる必要がない」旨を強調したので
 信ずる行動を断行するためには世界の圧迫も
 演し、「今日は必要の場合、日本が正しいと
 なり、私も大連で二、三度、私の戦争観を講
 この頃から満蒙問題はますますむずかしく
 この勉強があるのに感激した次第であった。
 兵要地誌班出身のためとのみ思っていた私は
 るのに驚いた。板垣大佐の数字に明るいのは
 は昨日の私の講演の要点の筆記を整理してい
 灯がともっている。入って見ると、板垣大佐
 は昨日の私の講演の要点の筆記を整理してい

ユウリ）方面に参謀演習旅行を行なった。
 演習第一日は車中で研究を行ない長春に着
 いた。車中で研究のため展望車の特別室を借
 用することについて、満鉄囑託将校に少なか
 らぬ御迷惑をかけたことなど思い出される。
 第二日の研究は私の「戦争史大観」であり、
 その説明のための要旨を心覚えに書いてあっ
 たのが「戦争史大観」の第一版である。第三
 日は吟爾賓に移り研究を続け、夜中に便所に
 起きたところ北満ホテルの板垣大佐の室に電

に当然辞職するところであるが軍人にはその
 に転任することとなった。文官ならこのとき
 た私は、到底その重責に堪えず十月、関東軍
 支那事変勃発当時、作戦部長の重職にあつ

第である。有志の御研究を待望する。
 を果しかねると考えられ、誠に申訳のない次
 書力がほとんどゼロとなって、一生私の義務
 既に記憶力が甚だしく衰え且つドイツ語の読
 る。資料もまた未整理のままである。今日は
 務の関係上、遂に無為にして今日に及んでい

決心であつたが、その後の健康の不充分と職
 先輩、友人の御好意に対し必ず研究を続ける

（忠孝）軍医少佐には、資料収集について非
 常にお世話になった。固より大したものにな
 いが、前に述べた人々の並々ならぬ御好意に
 依つて、フランス革命を動機とする持久・決
 戦両戦争の変転を研究するための、即ち稀代
 の名将フリードリヒ大王並びにナポレオンに
 関する軍事研究の資料は、日本では私の手許
 に最も良く集まっている結果となった。私は

自由がない。昭和十三年、大同学院から国防に関する講演を依託されて「戦争史大観」をテキストとすることとなり若干の修正を加えた。

「将来戦争の予想」については、旧稿は日米戦争としてあったのを、「東亜」と西洋文明の代表たる「米国」たるべきことを明らかにしたが、「現在に於ける我が国防」は根本的に書き換えたのである。昭和四年の分は次の如くであった。

1 欧州大戦に於けるドイツの敗戦を極端ならしめたるは、ドイツ参謀本部が戦争の本質を理解せざりしこと、また有力なる一原因なり。学者中には既に大戦前これに関する意見の一端を発表せるものあり、デルブリュック氏の如きこれなり。

2 日露戦争に於ける日本の戦争計画は「モルトケ」戦略の直訳にて勝利は天運によりしもの多し。

目下われらが考えおる日本の消耗戦争は

めた。
 経済力の建設を国防の目標とする如く書き改

を予期できない状態になっていたのである。
 ・ソを中心とする総合的圧力に対する武力と

ており、米国は未だその鋒鏑（ほうぼう）を

画以外の戦争に関する計画としては、いわゆる
 る「総動員計画」なるものが企画せられつつ
 あったが、内容は戦争計画の真の一部分に過
 ぎず、しかもその計画は第一次欧州大戦の経
 験による欧州諸国の方針の鵜呑みの傾向であ
 ったから、多少戦争の全体につき思索を続け
 ていた私には記念すべき思い出の作品である
 昭和十三年には東亜の形勢が全く変化し、
 ソ連は膨大なその東亜兵備を以て北満を圧し

私はこの簡単明瞭な見地から在満兵備の大

置せしめる。

2 ソ連の東亜兵備と同等の兵力を大陸に位

兵備。

1 ソ連の東亜に使用し得る兵力に対応する

も異存のないことである。

日本の対ソ兵備は次の二点については何人

界の常識となりつつあった。

殊に空軍や戦車では比較にならないことが世

日本の在満兵力はソ連の数分の一に過ぎず、

平衡がとれていたのに、昭和十一年には既に

変当初の東亜に於ける日・ソの競争力は大体

多かった。満州事変から僅かに四年、満州事

り、いろいろ予想外の事に驚かされることが

た。三宅坂の勤務は私には初めてのことであ

昭和十年八月、私は参謀本部課長を拝命し

ばならないことは言うまでもない。

考えは、自由主義の清算とともに一掃されね

日本は破産の外なく……」というような古い

「若し百万の軍を動かさざるべからずとせば

と先方から、「現在の日本の財政では無理でしては赤誠を以て説明した積りである。終るり、私の国防上の見地を軍機上許す限り私と違うと思つたが私も耐えて終るまで待つておらず日本財政につき説明された。それは約束と石渡、青木の三氏がおられた。賀屋氏が、まず日本財政につき説明された。それは約束と違うと思つたが私も耐えて終るまで待つており、私の国防上の見地を軍機上許す限り私としては赤誠を以て説明した積りである。終ると先方から、「現在の日本の財政では無理で

い旨を返答したところ、重ねて日本の国防につき、できるだけのことを承りたいとのことであつたので遂に承諾し、山王ホテルの星野氏の室で会見した。先方は星野氏の他に賀屋石渡、青木の三氏がおられた。賀屋氏が、まず日本財政につき説明された。それは約束と違うと思つたが私も耐えて終るまで待つており、私の国防上の見地を軍機上許す限り私としては赤誠を以て説明した積りである。終ると先方から、「現在の日本の財政では無理で

い希望だと伝えられたが、私はその必要はない局長達が日本財政の実情につき私に説明した（私は未だ面識が無かつた）から、大蔵省のとの評判であつたらしい。

その頃ちようど上京中であつた星野直樹氏の現状即ち政治的關係に左右されたわけである。しかし世間では石原はド偉い要求を出すとの評判であつたらしい。

てもらい、まず試みに前に述べた私案に基づき、
 崎正義氏に、「日滿經濟財政研究会」を作つ
 があり事変後は滿鐵經濟調査会を設立した宮
 ら滿鐵調査局勤務のため関東軍と密接な連絡
 と松岡滿鐵總裁の了解を得て、滿州事変前か
 政府に迫るべきだと考え、板垣関東軍参謀長
 何とかして生産力拡充の一案を得て具体的に
 過しても戦備はできない。考え抜いた結果、
 何とかがして生産力拡充の一案を得て具体的に
 てもこれに基づく經濟力の建設は到底、企図
 する見込みがないところから、軍事予算は通
 過しても戦備はできない。考え抜いた結果、

由主義の政府は、われらの軍費を鵜呑みにし
 經濟力を建設すべきである。しかし当時の自
 を明示する。政府はこの兵備に要する国家の
 私の考えでは軍は政府に軍の要求する兵備
 一で、どうやら内輪に計算されているらしい。
 人の私に示した案は私の立案の心理状態と同
 その道に明るい一友人に概算して貰った。友
 私は一試案を作つてそれに要する戦費を、
 後輩の諸君に私のようにせられることを、お
 すすめするものである。

防衛のため米・ソの合力に対抗し得る実力を養成すること、を絶対条件と信じ、国家が真に自覚すればその達成は必ず可能なるを確信するに至ったのである。

経済力が極めて貧弱で、重要産業はほとんど英米依存の現状に在った日本は、至急これを脱却して自給自足経済の基礎を確立するところが第一の急務なるを痛感し、外交・内政の総てをこの目的達成に集中すべく、それが国防の根本であることを堅く信じて来たのである。

るが、満州国は十二年から計画経済の第一歩を踏み出したものの、日本は遂にこれに着手するに至らないで支那事変を迎えたのである。国家は戦争・建設同時強行との、えらい意気込みであったが、日本としてこの二大事業の同時遂行は残念ながら至難なことが、戦争の経験によって明らかとなった。しかし、いかなることが起るとも米・ソ両国の実力に対抗し得る力なき限り、国防の安定せざることを明らかにしたのが昭和十三年の訂正である。

か数十年の短い年月で一天四海皆帰妙法は可勝戦に信仰の統一が行なわれねばならぬ。僅られる。同時に私の信仰から言えば、その決この勢いで見れば、すこぶる短いように考えこの大交換即ち最終戦争までの持久戦争期間はとができると信ずる。第一次欧州大戦から次の区分や、その年数については、簡単に断定することには無理はあるが、大勢は推断することができる。第一次欧州大戦から次の持久戦争時代は大体三、四百年と見ることができ。もちろんこの時代の区分や、その年数については、簡単に断定することには無理はあるが、大勢は推断することができる。第一次欧州大戦から次の持久戦争時代は大体三、四

昭和十四年、留守第十六師団長中岡中将の命により、京都衛戍講話に「戦争史大観」を試みたが、その後、人々の希望により、昭和十五年一月印刷するに当り、既に第二次欧州大戦が勃発したため、若干の小修正を加えたのが現在のものである。

「#底本142頁右上に、持久戦争と決戦戦争の移り変わりを示した図あり」

フランス革命から第一次欧州戦争の間が決戦戦争の時代であり、この期間は百二十五年

うてい私には分かりかねる。しかるに東洋史
 聖人信仰の根底である。難しい法門等は、と
 る。仏の予言の適中の妙不可思議が私の日蓮
 すべき靈格者であることが絶対的に必要であ
 めには日蓮聖人が真に人類の思想信仰を統一
 を心から満足せしめた結果であるが、そのた
 の信者である。それは日蓮聖人の国体観が私
 撃を食らった。私は大正八年以来、日蓮聖人
 書程度のもものを読んでいる中に突如、一大電
 一度復習して見たい気になり、中学校の教科

この静かな時間を利用して東洋史の大筋を
 た。

能であろうか。最終戦争までの年数予想は恐
 ろしくて発表の勇氣なく、ただ案外近しとの
 み称していた。

昭和十三年十二月、舞鶴要塞司令官に転任
 舞鶴の冬は毎日雪か雨で晴天はほとんどない
 しかし旅館清和楼の一室に久し振りに余り来
 訪者もなく、のどかに読書や空想に時間を過

ごし得たのは誠に近頃にならない幸福の日であつ

を読んで知り得たことは、日蓮聖人が末法の
 最初の五百年に生まれられたものとして信じ
 られているのであるが、実は末法以前の像法
 に生まれられたことが今日の歴史ではどうも
 正確らしい。私はこれを知ったとき、真に生
 まれて余り経験のない大衝撃を受けた。この
 年代の疑問に対する他の日蓮聖人の信者の解
 釈を見ても、どうも腑に落ちない。そこで私
 は日蓮聖人を人格者・先哲として尊敬しても
 霊格として信仰することは断然止むべきだと
 考えたのである。

このことに悩んでいる間に私は、本化上行
 （ほんげじょうぎょう）が二度出現せらるべ
 き中の僧としての出現が、教法上のことであ
 り觀念のことであり、賢王としての出現は現
 実の問題であり、仏は末法の五百年を神通力
 を以て二種に使い分けられたとの見解に到達
 した。日蓮教学の先輩の御意見はどうもこれ
 を肯定しないらしいが、私の直感、私の信仰
 からは、これが仏の思召にかなっていると思

ナポレオンだけであり、しかもその期間も大
 研究したのは、主としてフリードリヒ大王と
 が、前に述べた如く真に私が学問的に戦史を
 との結論と言わすべきである。空想は長かつた
 年ばかりの軍人生活の中に考え続けて来たこ
 最終戦論』である。要するにこれは私の三十
 補したの出版されたのが、立命館版『世界
 り同年八月印刷に付する際その部分を少し追
 ける講演筆記（第二次欧州大戦の急進展によ
 昭和十五年五月二十九日の京都義方会に於

れ、誰かが「世界戦争観」と命名している。
 べた。この講演の要領が人々によって印刷さ
 からする最終戦争の年代につき私の見解を述
 々の集まりの席上で戦争論をやり、右の見解
 していた私は、協和会東京事務所で若干の人
 昭和十四年三月十日、病氣治療のため上京
 と甚だ近い結論となるのである。
 との推論に達した。そうすると軍事上の判断
 統一は仏滅後二千五百年までに完成するもの
 ずるに至ったのである。そして同時に世界の

「日本には日本独特の軍事学があるでしょうに、ある日ジュネーブで伊藤述史公使が私に

満州問題で国際連盟の総会に出張したときに、あることを切望して止まないのである。

心を有する一般の人士も、軍事につき研究されることを切望して止まないのである。

友諸君はもちろんのこと、政治・経済等に関することを切望して止まないのである。

は、遺憾ながら認めざるを得ない。私は、戦第である。日本に於ける軍事学の研究がドイツやソ連の軍事研究に比し甚だ振わないことは、遺憾ながら認めざるを得ない。私は、戦友諸君はもちろんのこと、政治・経済等に関することを切望して止まないのである。

のよう真相を白状すれば誠に恥ずかしい次第である。日本に於ける軍事学の研究がドイツやソ連の軍事研究に比し甚だ振わないことは、遺憾ながら認めざるを得ない。私は、戦

正十五年夏から昭和三年二月までの約一年半に過ぎないのである。研究は大急ぎで素材を整理したくらのところ、まだまだ消化したものではなく、殊に私の最も関心事であったナポレオンの対英戦争は、その最重要点の研究がまとまらずにいるのである。最終戦争論に論じてあるフリードリヒ大王以前のこと

は真に常識的なものに過ぎない。

私は常に人様の前で「軍事学については、いささか自信がある」と広言しているが、こ

民は永遠の生命なし」との意見を聞き、伊藤独特の軍事学であった。独特の軍事学なき国元帥から「フランスを救ったものはフランスたのである。第一次欧州大戦後、フォツシュ佐から主としてナポレオン戦争の講義を聞いたのである。第一次欧州大戦後、フォツシュ大学の教官であったフォツシュ少佐で、同少佐から主としてナポレオン戦争の講義を聞いたのである。第一次欧州大戦後、フォツシュ大学の教官であったフォツシュ少佐で、同少事学の先生を探して貰った。それが当時陸軍大学部の教官であったフォツシュ少佐で、同少佐から主としてナポレオン戦争の講義を聞いたのである。第一次欧州大戦後、フォツシュ

罵倒したらしい。それで伊藤氏は大いに憤慨したが、軍人はともかく政治・経済の若干を知っているのに、外交官は軍事学を知っていないことに気がつき、フランスの友人から軍事学の先生を探して貰った。それが当時陸軍大学の教官であったフォツシュ少佐で、同少佐から主としてナポレオン戦争の講義を聞いたのである。第一次欧州大戦後、フォツシュ

か」と質問されたが、私は「いや、伊藤さんどうも遺憾ながら明治以後には、さようなものは未だできていない」と答えると伊藤氏は青くなつて、「それは大変だ。一つ東京に帰つたらお互に軍事研究所を作ろうではないかと提案された。なぜ、さようなことを伊藤氏が言ったか」と聞いて見ると、伊藤氏がフランス大使館の書記生の時代に、田中義一大将がフランスに廻つて来て盛んに外交官の無能を

だから、研究しようとするなら必ずできる。し
 公刊の戦史その他の出版物が相当にあるの
 洋列強諸国に比して余りに貧弱である。しか
 から、日本語の軍事学の図書は残念ながら西
 述の通り軍人間の軍事学の研究も不振である
 それほとんどでもないことである。もちろん前
 ら軍事の研究ができないようなことを言うが
 世人は、軍が軍事上のことを秘密にするか
 も何らの御通知がないから、遂に発見されな
 かったのである。

と御願ひして置いたが、パリを引払われた後
 私はあきらめかねてなおも若し見付かったら
 再三探して下さったが遂に発見できなかつた。
 ときの講義録を私にくれるとてパリの御宅を
 らも充分に玩味すべきである。伊藤氏はその
 たであろうが、この中に含むある真理はわれ
 この言葉は素人には恐らく大きな魅力を失っ
 うに打ちのめされた今日、フォツシュ元帥の
 フランスが第二次欧州大戦によってこんなふ
 公使の脳裡に深い印象を与えているらしい。

第一節 戦争の絶滅

第一章 緒論

第三篇 戦争史大観の説明

「#改ページ」

（昭和十五年十二月三十一日）
 ることは私の実見せるところである。

一家の主婦すら相当に軍事的知識を持ってい

いる。これらの図書は立派な戦史書である。

フの回想録は所有されており、広く読まれて

庭には通常、ヒンデンブルグやルーデンドル

あまりに劣っている。ドイツの中産以上の家

の軍事学の常識に比し、日本知識人のそれは

多くの人はそんな力は持っていない。西洋人

校は軍事学を講義すべきものではなく、また

講座を設くべしと多年唱導して来た。配属将

私は少なくとも政治・経済の大学には軍事学の

東西古今、総ての聖賢の共同理想であり、全人類の憧憬である永久の平和は、現実問題としては夢のように考えられて来たのである。しかし時来たって必ず全人類の希望が達成せられるべきを信ずる。固より人類の闘争本能を無くすることは不可能であるから、この希望は世界の統一に依つてのみ達成せらるるであらう。最近文明の急速な進歩はその可能を信ぜしむるに至った。

世界統一の条件として考えられるものは大體次の三つである。

- 1 思想信仰の統一。
- 2 全世界を支配し得る政治力。
- 3 全人類を生活せしむるに足る物資の充足

心と物は「人」に於て渾然一体である。その正しき調和を無視して一方に偏重し、いわゆる唯心とか唯物とかいう事はむずかしい理屈の分からぬ私どもにも一方的理屈である事が明らかである。しかし心と物は平等の結合ではなく、どこまでも心が主であり物が従で

ある。思想や信仰の観念的力をもつてして人類の戦争を絶滅する事が不可能である事は数千年の歴史の証明するところであるが、戦争の絶滅に思想信仰の統一が絶対に必要でありしかもそれが最も根本的の問題である事は疑うべからざるところである。

ただしこの統一も単なる観念の論議のみでは恐らく至難で、現実の諸問題の進展と理論の進歩の間には微妙なる関連が保たるべきものと信ずる。すなわち思想の統一は自然、人格的中心を要求する。ソ連でさえマルクスだけでなくレーニン、スターリン等を神格化しているではないか。

我らの信仰に依れば、人類の思想信仰の統一は結局人類が日本国体の靈力に目醒めた時初めて達成せられる。更に端的に云えば、現人神（あらひとがみ）たる天皇の御存在が世界統一の靈力である。しかも世界人類をしてこの信仰に達せしむるには日本民族、日本国家の正しき行動なくしては空想に終る。

かつ、人類が正しきこの信仰に達するには
 日本民族、日本国家等の正しき思想、正しき
 行為だけでは不可能であり、正義を守る実力
 が伴わねばならぬ。結局文明の進歩により、
 力の発展により逐次政治的統一の範囲を拡大
 し、今日は四個の集団に凝結せんとする方向
 にある人類はやがて二つ、すなわち天皇を信
 奉するものとしからざるものの二集団に分か
 れ、真剣な戦いに依って統一の中心点が決定
 し、永久平和の第一歩に入り戦争の絶滅を見
 るに至るであろう。

人類歴史は政治的統一範囲を逐次拡大して
 来たのであるが、それは文明の進歩に依り主
 権の所有する武力が完全にその偉力を発揮し
 得る範囲をもって政治的統一の限度とする。

すなわち将来主権者の所有する武力が必要に
 際し全世界到るところにある反抗を迅速に潰
 滅し得るに至った時、世界は初めて政治的に
 統一するものと信ぜられる。

そして世界が統一した後も内乱的戦争は絶

の如き状態は解消せらるべきだと信ずる。こ
 ための争いを無限に放置されていた今日まで
 生産能率を高むる事が必要であって、物欲の
 いちゆうし、かつ科学の進歩が生活物資の
 活が向上して無益なる浪費を自然に掣肘（せ
 要であると考える。すなわち人類の精神的生
 を保証すべき物資が大体充足せらるる事が必
 一般文明の進歩に依り全人類の公正なる生活
 隊が参加しない内乱は既に不可能である。

に多いのであるが、今日の武器に対しては軍
 明国と云われる国でさえ内乱の可能性は相当
 ならば、今日の思想信仰の状態でも世界の文
 認めねばならない。刀や槍が主兵器であつた
 する事が内乱を困難にして来た事も明らかに
 に行なわれたのであるが、武器が高度に進歩
 人も簡単にこれを所有し得た時は内乱は簡単
 が必要であるが、同時に武力が原始的で、何
 は前に述べた信仰の統一が強い力であること
 滅しないだろうと考えらるるだろう。それに

れは信仰の統一、武力の発達の間に自然に行なわるる事であろう。

第二節 戦争史の方向

戦争は人類文明の総合的運用である。戦争の進歩が人類文明の進歩と歩調を一にしているのは余りに自然である。

武力の発達すなわち戦争術の進歩が人類政治の統一を逐次拡大して来た。世界の完全なる統一すなわち戦争の絶滅は戦争術がその窮

極的発達に達した時に実現せらるるものと考えねばならぬ。この見地よりする戦争の発達史および将来への予見が本研究の眼目である

戦闘は軍事技術の進歩を基礎として変化して来た。また国軍が逐次増加し、それに伴ってその編制も大規模化されて来た。こういうものは一定方向に対し不断の進歩をして来ているのである。

しかるにその国軍を戦場で運用する会戦（会戦とは国軍の主力をもつてする戦闘を云う

ポレオンを大観したただけと云うべく、それも
究範囲は極めて狭く、フリードリヒ大王、ナ
第二篇に於て述べたように私の軍事学の研

この研究は主として西洋近世戦史に依る。
第三節 西洋戦史に依る所以

永久平和の第一歩となる事と信ぜられる。
時であつて、これが世界統一の時期となり、
徹底する時、人類争闘力の最大限を發揮する
来の目的に合する武力本来価値の發揮傾向に

的發達を遂げ、会戦指揮や戦争指導が戦争本
うも時代的傾向を帯びている。

以上の見地から戦闘法や軍の編制等が最後
傾向の間を交互し、決戦戦争、持久戦争はど
もまた歴史の進展過程に於て消極、積極の二

動いて来た。また武力の戦争に作用し得る力
自然会戦指揮は或る二つの傾向の間を交互に
達の段階に依つて戦闘に持久性の大小を生じ
て相当の特性を認めらるるけれども、軍隊發

はこれを運用する武将の性格や国民性に依つ

やつと素材の整理をした程度である。東洋の
 戦史については真に一般日本人の常識程度を
 越えていないために、この研究は主として西
 洋の近世史を中心として進められたのである
 誠に不完全な方法であるが、しかし戦争はど
 うも西洋が本場らしく、私が誠に貧弱なる西
 洋戦史を基礎として推論する事にも若干言
 分があると信ずる。

今日文明の王座は西洋人が占めており、世
 界歴史はすなわち西洋史のように信ぜられて
 いる。しかしこれは余りにも一方に偏した観
 察である。西洋文明は物質中心の文明で、こ
 の点に於て最近数世紀の間西洋文明が世界を
 風靡しつつあるは現実であるが、私どもは人
 類の総合的文明はこれから大成せらるべくそ
 の中心は必ずしも西洋文明でないと確信する
 東洋文明は天意を尊重し、これに恭従であ
 る事をもって根本とする。すなわち道が文明
 の中心である。

西洋人も勿論道を尊んでおり、道は全人類

の共通のものであり、古今に通じて謬（あやま）らず、中外に施して悖（もと）らざるものである。しかも西洋文明は自然と戦いこれを克服する事に何時しか重点を置く事となり道より力を重んずる結果となり今日の科学文明発達に大きな成功を来たしたのであって、人類より深く感謝せらるべきである。しかしこの文明の進み方は自然に力を主として道を従とし、道徳は天地の大道に従わん事よりもその社会統制の手段として考えられるようになって来たのでないであろうか。彼らの社会道徳には我らの学ぶべき事が甚だ多い。しかし結局は功利的道徳であり、真に人類文明の中心たらしむるに足るものとは考えられぬ。

東洋が王道文明を理想として来たのに自然の環境は西洋をして霸道文明を進歩せしめたのである。霸道文明すなわち力の文明は今日誠に人目を驚かすものがあるが、次に来たるべき人類文明の総合的大成の時には断じてその中心たらしむべきものではない。

その社会統制の手段として考えられるようになって来たのでないであろうか。彼らの社会道徳には我らの学ぶべき事が甚だ多い。しかし結局は功利的道徳であり、真に人類文明の中心たらしむるに足るものとは考えられぬ。

東洋が王道文明を理想として来たのに自然の環境は西洋をして霸道文明を進歩せしめたのである。霸道文明すなわち力の文明は今日誠に人目を驚かすものがあるが、次に来たるべき人類文明の総合的大成の時には断じてその中心たらしむべきものではない。

戦争についてもその最も重大なる事すなわち「戦」の人生に於ける地位に関して王道文明の示すところは、私の知っている範囲では次のようなものである。

1 三種神器に於ける剣。

国体を擁護し皇運を扶翼（ふよく）し奉る力、日本の武である。

2 「善男子正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を修せずして刀剣弓箭鉾（きゆうせ）んぼうさく）を持すべし。」

「五戒を受持せん者あらば名づけて大乘の人となすことを得ず。五戒を受けざれども正法を護るをもって乃ち大乘と名づく。正法を護る者は正に刀剣器械を執持すべし。」（涅槃経）

3 「兵法剣形（けんぎよう）の大事もこの妙法より出たり。」（日蓮聖人）

このような考え方は西洋にあるか無いかは知らないが、よしんばあっても今日の彼らの文明に対しては恐らく無力であろう。戦争の

本義はどこまでも王道文明の指南に俟（ま）つべきである。しかし戦争の実行は主として力の問題であり、霸道文明の発達せる西洋が本場となったのは当然である。

近時の日本人は全力を傾注して西洋文明を学び取り摂取し、既にその能力を示した。しかし反面西洋霸道文明の影響甚だしく、今日の日本知識人は西洋人以上に功利主義に趨（はし）り、日本固有の道德を放棄し、しかも西洋の社会道德の体得すらも無く道德的に最

も危険なる状態にあるのではないか。世界各国、特に兄弟たるべき東亜の諸民族からも彼らの誤解のためのみでは無い。これは日本民族の大反省を要すべき問題であり、東亜大同を目標とすべき昭和維新のためよろしくこの混乱を整理して新しき道德の確立が最も肝要である。

しかしこれ程に西洋化した日本人も真底の本性を換える事は出来ない。外交について見

の扇の的となったりして、戦やらスポーツや和歌のやりとりとなったり、或いは那須与一かつまた民族性が大きな力をなして戦の内にかに強い事を示している一例とも考えられる

日本の戦争は主として国内の戦争であり、道義を守るべしとの考えが西洋人に比して遙れらも日本人は根本に於ては、外交に於ても

力を思い出させようとしているのに対し、あるドイツ人が「日本は離婚した女に未練を持って

いる最近まで第一次欧州大戦に於ける日本の協国が日英同盟の好誼を忘れた事を批難し、つ

質はお人好しである事を示しているのである。誠に滑稽であるが、しかもこれは日本人の本質はお人好しである事を示しているのである。完全のままソ連と握手しようとする主張している日本が南洋進出のため今日の如き対ソ国防不

は極めて明らかであるのに、日本人の一部は

るソ連の外交は正確なる数学的外交である事

れば最もよく示している。霸道文明に徹底せ

る限り決して不当でないと思ふ。私の戦争史が西洋を正統的に取扱つたからとて、一般文明が西洋中心であると云うのではない。

第二章 戦争指導要領の変化

第一節 戦争の二種類

国家の対立ある間戦争は絶えない。

国家の間は相協力を図るとともに不断に相

争っている。その争いに国家の有するあらゆる力を用うるは当然である。平時の争いに於ても武力は隠然たる最も有力なる力である。外交は武力を背景として行なわれる。

この国家間の争いの徹底が戦争である。戦争の特異さは武力をも直接に使用する事である。すなわち戦争を定義したならば「戦争とは武力をも直接使用する国家間の闘争」といふべきである。

武力が戦争で最も重要な地位を占むる事は

をもつて敵を徹底的に圧倒してその意志を屈

戦争本来の真面目（しんめんぼく）は武力

第二節 両戦争と政戦略の関係

これを持久戦争と命名する。

女性的、陰性となり、通常長期戦争となる。

失い、逐次低下するに従い戦争は活気を失い

武力の価値が他の手段に対し絶対的地位を

争と名づける。

であり、通常短期戦争となる。これを決戦戦

場合は戦争は活発猛烈であり、男性的、陽性

武力の価値が大でありこれが絶対的である

依り戦争の性質が二つの傾向に分かれる。

この戦争の手段としての武力価値の大小に

る。

武力および武力以外のものの二つに大別出来

く使用せられる。故に戦争遂行の手段として

ても両国の闘争には武力以外の手段も遺憾な

戦争の理想的状態である。しかし戦争となつ

自然であり、武力で端的に勝敗を決するのが

絶大なる関係を有する。国家の主権者が将帥

その協調即ち戦争指導の適否が戦争の運命に

政治と統帥は通常利害相反する場合が多い

の性質に依るものである。

達成のため政治、統帥の関係は一にその戦争

政治の継続に外ならぬ、しかし戦争の目的

ツのいわゆる「戦争は他の手段をもってする

るのである。この意味に於てクラウゼウイツ

にも至るのである。

戦争の目的は当然国策に依って決定せらる

るのである。この意味に於てクラウゼウイツ

ツのいわゆる「戦争は他の手段をもってする

るのである。この意味に於てクラウゼウイツ

ツのいわゆる「戦争は他の手段をもってする

るのである。この意味に於てクラウゼウイツ

ツのいわゆる「戦争は他の手段をもってする

るのである。この意味に於てクラウゼウイツ

ツのいわゆる「戦争は他の手段をもってする

るのである。この意味に於てクラウゼウイツ

ツのいわゆる「戦争は他の手段をもってする

伏せしむる決戦戦争にある。決戦戦争にあつ

ては武力第一で外交内政等は第二義的価値を

有するにすぎないけれども、持久戦争に於て

は武力の絶対的位置を低下するに従い外交、

内政はその価値を高める。ナポレオンの「戦

争は一に金、二にも金、三にも金」といった

言葉はますますその意義を深くするのである

即ち決戦戦争では戦略は常に政略を超越する

のであるが、持久戦争にあつては逐次政略の

地位を高め、遂に政略が作戦を指導するまで

にも至るのである。

戦争の目的は当然国策に依って決定せらる

るのである。この意味に於てクラウゼウイツ

ツのいわゆる「戦争は他の手段をもってする

政治の継続に外ならぬ、しかし戦争の目的

ツのいわゆる「戦争は他の手段をもってする

政治の継続に外ならぬ、しかし戦争の目的

達成のため政治、統帥の関係は一にその戦争

の性質に依るものである。

政治と統帥は通常利害相反する場合が多い

その協調即ち戦争指導の適否が戦争の運命に

絶大なる関係を有する。国家の主権者が将帥

この二つの方式は各々利害があるが大体になつていた時が多かつた。

外に統帥府を設け、いわゆる統帥権の独立となつて、ドイツ、ロシア等の君主国に於ては政府の補わんとした事はなかなか興味ある事である。

戦争の場合独裁者を臨時任命してこの不利を補ふないが止むを得ない。ローマ共和国時代は、政治の支配下にある。決して最善の方式ではないが統帥権の問題が起つて来る。

民主主義国家に於てはもちろん統帥は常に政治の支配下にある。決して最善の方式ではないが統帥権の問題が起つて来る。

政戦両略を一人格に於て占めていない場合

が、それは将来戦史的に充分検討を要する。

れであるが如くドイツ側から放送されているが、それは将来戦史的に充分検討を要する。

また第二次欧州大戦に於てはヒットラーがそれであるが如くドイツ側から放送されているが、それは将来戦史的に充分検討を要する。

か蒋介石、フランコ將軍等は大体それでありまた第二次欧州大戦に於てはヒットラーがそれであるが如くドイツ側から放送されているが、それは将来戦史的に充分検討を要する。

来なかつた。最近に於てはケマル・パシャとナポレオン以来はほとんどこれを見る事が出の如き状態が至難となり、フリードリヒ大王理想である。軍事の専門化に伴い近世はかくの如き状態が至難となり、フリードリヒ大王ナポレオン以来はほとんどこれを見る事が出

であり政戦略を完全に一身に抱いているのが理想である。軍事の専門化に伴い近世はかくの如き状態が至難となり、フリードリヒ大王

ドイツの統帥権の独立はこの事情を最もよ

いを得たのである。

ても統帥権の独立を否定する論者が次第に勢

遂に勝を得、かくて大戦後ドイツ軍事界に於

任せしめられた大戦末期の連合国側の方式が

せられその信任の下にフォッシュが統帥を専

クレマンソー、ロイド・ジョージに依り支配

制御する事が出来なかつた。これに反し、

イゼルは政治は支配していたけれども統帥は

た後は統帥と政治の関係常に円満を欠き（カ

式と称せられたであろうが、持久戦争に陥つ

争の決が着いたならば統帥権独立は最上の方

に鮮やかな戦争指導が行なわれ、あのまま戦

帥権の独立していたドイツは連合国に比し誠

決戦戦争的色彩の盛んであった時期には、統

これを第一次欧州大戦に見るに、戦争初期

むる地位の関係より生ずる自然の結果である

れる。これは統帥が戦争の手段の内に於て占

あり、持久戦争に於てはその不利が多く現わ

於て決戦戦争に於ては統帥権の独立が有利で

総長は爾後諸命令を直接軍司令官に与え陸軍
 八六六年普墺戦争勃発するや六月二日「参謀
 高まった。国王の信任はますます加わり、一
 問題を処理して大功を立てたのでその名望は
 参謀長に栄転し、よく錯綜せる軍事、外交の
 が、戦況困難となりモルトケが遂に出征軍の
 ケは数日何らの通報を受けない事すらあった
 は直接大臣より送付せられ、時としてモルト
 なかその意見が行なわれず、軍に対する命令
 も、一八六四年デンマーク戦争には未だなか
 事件に依って信用を高めたのであったけれど
 極めて微々たるものであった。一八五九年の
 年総長）はなお陸軍大臣の隷下に在って勢力
 謀総長就任の時（一八五七年心得、一八五八
 を統一する事となっていた。大モルトケが参
 る弊害を除去するため陸軍大臣が総ての軍事
 ける参謀総長に当る者より直接侍従武官を経
 て上奏していたのであるが、軍務二途に出づ
 フリードリヒ大王以後統帥事項は当時に於
 く示している。

定が常識となっていたことであるのを忘れて
 なわち武力に依り最短期間に於ける戦争の決
 かもその根底をなすものは、当時決戦戦争す
 統帥権の独立は確固不拔のものとなった。し
 本部の能力が国民絶対の信頼を博した結果、
 その後モルトケ元帥の大名望とドイツ参謀
 なかなか容易でなかった事を示している。
 八三年五月二十四日であることはこの問題の
 文化されたのは普仏戦争後十年余を経た一八
 立を完成したのであった。それでもこれが成
 文化されたのは普仏戦争後十年余を経た一八

依る武力価値の絶対性向上は遂に統帥権の独
 立を完成したのであった。それでもこれが成
 文化されたのは普仏戦争後十年余を経た一八
 八三年五月二十四日であることはこの問題の
 なかなか容易でなかった事を示している。
 その後モルトケ元帥の大名望とドイツ参謀
 本部の能力が国民絶対の信頼を博した結果、
 統帥権の独立は確固不拔のものとなった。し
 かもその根底をなすものは、当時決戦戦争す
 なわち武力に依り最短期間に於ける戦争の決
 定が常識となっていたことであるのを忘れて

大臣には唯これを通報すべき」旨が国王より
 命令せられ、ここに参謀総長は軍令につき初
 めて陸軍大臣の束縛を離れたのである。しか
 も陸軍大臣ローン及びビスマークはこれに心
 よからず、普墺戦争中はもちろん一八七〇―
 七一年の普仏戦争中もビスマーク、モルトケ
 間は不和を生じ、ウイルヘルム一世の力に依
 り辛うじて協調を保っていたのである。

り政治については臣民に翼賛の道を広め給う遊ばされておるのである。もとより憲法によは穏当を欠く。「天子は文武の大権を掌握」

我が国に於ては「統帥権の独立」なる文字は穩当を欠く。「天子は文武の大権を掌握」る事が出来なかつた。権益の獲得を主張し、ついに両者の協調を見る事が出来なかつた。賠償の平和を欲したのであるが統帥部は領土遂に政戦略の協調を破り徹底的潰滅に導いたのである。すなわち政治関係者は無併合、無

作戦を有利にした点は充分認めねばならぬが

持久戦争となつても統帥権独立はドイツの

行出来なかつたのである。

のである。東方に攻勢を希望したが遂に遂から単一化せられ西方攻勢のみが計画されたのである。東方に攻勢を希望したが遂に遂の両場合を策定してあつたのであるがその年ではドイツの作戦計画は東方攻勢と西方攻勢カイズェルは作戦計画を無視し（一九一三年ま通報せらるるに止まる有様であり、また当時外務省は参謀本部よりベルギーの中立侵犯を

はならぬ。第一次欧州大戦勃発当時の如きは

り聖断に一如し奉るようになるのが我が国体
 緯や凡俗の判断等は超越し、真に心の奥底よ
 仰がねばならぬ。聖断一度び下らば過去の経
 の意見一致し難き時は一刻の躊躇なく聖断を
 の天職を妨げ奉るものである。政府、統帥府
 するが如き事があったならば、これこそ天皇
 もかかわらず総て臣民の間に於て解決せんと
 逢着（ほうちやく）するものである。それに
 が協調に努力するも必ず妥協の困難な場面に
 すべき事もちろんである。しかし如何に臣民

戦争の性質に適應する政戦両略の調和に努力
 治の活動に多くの期待をかくる如くし、その
 戦争に於ては武力の価値低下の状況に応じ政
 に最も大なる活動をなさしむる如くし、持久
 の本質を体得し、決戦戦争に於ては特に統帥
 絡協調に努力すべきであり、両者はよく戦争
 政府および統帥府は政戦両略につき充分連
 が国体の本義である。
 が完全に綜合掌握遊ばさるのである。これ
 ておるのであるけれども、統帥、政治は天皇

靈妙の力である。

他の国にてフリードリヒ大王、ナポレオン乃至ヒットラー無くば政戦略の統一に困難を来たすのであるが、我が大日本に於ては国体の靈力に依り何時でもその完全統一を見るところに最もよく我が国体の力を知り得るのである。戦争指導のためにも我が国体は真に万邦無比の存在である。

第三節 持久戦争となる原因

持久戦争は両交戦国の戦争力ほとんど相平均しているところから生ずるものであり、その戦力甚だしく懸隔ある両国の間には勿論容易に決戦戦争となるのは当然である。今ほとんど相平均している国家間に持久戦争の行なわれる場合を考えれば次のようなものである。

- 1、軍隊の価値低きこと

後に詳述する事とするがルネッサンスに依り招来せられた傭兵は全く職業軍人である。生命を的とする職業は少々無理あるがために

ケ時代の戦争と性質を異にするに至った事を
 ていた。欧州大戦は既にナポレオン、モルト
 が、戦争の性質に対する徹底せる見解を欠い
 十八世紀前のものと以後のものに区別した
 ている。すなわちドイツ参謀本部は、戦争を
 徹底的に戦わねばならぬ」との意味を強調し
 側の目的はドイツの殲滅にあるからドイツは
 は回想録や「戦争指導と政治」の中に「敵国
 可能である」との信念の下にルーデンドルフ
 った。国民戦争に於ては中途半端の勝負は不

かったが、フランス革命以後は国民戦争とな
 民戦争でなかったから真面目な戦争とならな
 かったが、

如何に精練な軍隊であつても、徹底的にその
 武力の運用が出来かねた事が仏国革命まで、
 持久戦争となっていた根本原因である。フラ
 ンス革命の軍事的意義は職業軍人から国民軍
 隊に帰った事である。実に近代人はその愛国
 の誠意のみが真に生命を犠牲に為し得るので
 ある。

支那は遂に救うべからず」との結論に達した。得ざる処に主権の確立は出来よう筈は無い。闘争の絶えざるを見て「自ら真の軍隊を造りしかるに革命後も真の革新行なわれず、軍閥る熱意を以て民国革命に投じたのであった。望し、多くの日本人志士は支那志士に劣らざしかるに革命後も真の革新行なわれず、軍閥る熱意を以て民国革命に投じたのであった。元来民国革命に依り支那の復興を衷心より待とも見えなかつたのは自然である。私どもはて屈し得る戦に真の決戦戦争はあり得ない。かかるが故に革命後の統一戦争が何時果つべしとも見えなかつたのは自然である。私どもは元来民国革命に依り支那の復興を衷心より待望し、多くの日本人志士は支那志士に劣らざしかるに革命後も真の革新行なわれず、軍閥る熱意を以て民国革命に投じたのであった。

言った。戦によつて屈するよりも金力によつてその戦争に於ては武力よりも金力がものを十八世紀欧州の傭兵に比し遙かに低劣なものでその戦争に於ては武力よりも金力がものを言った。戦によつて屈するよりも金力によつてその戦争に於ては武力よりも金力がものを十八世紀欧州の傭兵に比し遙かに低劣なものでその戦争に於ては武力よりも金力がものを

認識しなかつた事が、第一次欧州大戦に於けるドイツ潰滅の一因と云われねばならない。

支那に於ては唐朝の全盛時代に於て国民皆兵の制度破れ、爾来武を卑しみ漢民族国家衰微の原因となつた。民国革命後も日本の明治維新の如く国民皆兵に復歸する事が出来ず、依然「好人不当兵」の思想に依る傭兵であり

ののである。数百年來武を卑しんだ国民性の悩
 てすらもなお未だ真の国民皆兵にはなり難い
 なり勇敢に戦ったのであるがこの大戦争に於
 振起せしめた点にある。支那事変に於てはか
 の統一はむしろ日本の圧迫がその国民精神を
 傾向を生じつつあったのである。しかも中国
 だのは確かに壯観であり我らの見解に修正の
 神に飛躍的進歩を見、国内統一に力強く進ん
 孫文、蒋介石に依り革命軍の建設は軍隊精
 乱となつたのである。

して間もなく又戦争が開始せられ、慢性的内
 争の絶対性を欠き、その効力は極めて薄弱に
 解決せらるる事もあつたけれども、それは戦
 銭の取引に依り決戦戦争以上の短日月の間に
 い。劣悪極まる軍隊の結果は個々の戦争を金
 あるが、一面の真理はこれを認めねばならな
 り、私どもの判断も余りに性急であつたので
 がしかく短日月に行なわれないのは当然であ
 も歴史は古く、病膏肓に入った漢民族の革命
 のであつた。勿論あの国土彫大な支那、しか

第一次欧州大戦当時は陣地正面の突破がほ

ば決局決戦戦争を不可能とする。

防禦の威力が大きく、これが突破出来なけれ

如何に軍隊が精鋭でも装備その他の関係上

2、攻撃威力が防禦線を突破し難き事

百年太平の結果である。

ても成功せず、むしろ愚直の感あるは徳川三

ても相当のものである。今日謀略を振り廻し

があつたのである。日本民族はどの途にかけ

の謀略は中国人も西洋人も三舎を避くるもの

犠牲としたのであつた。戦国時代の日本武将

り、必要の前には父母兄弟妻子までも利益の

われ、当時の戦争はいわゆる謀略が中心とな

したのであるが、それでもなお且つ買収行な

に基づく武士道に依つて強烈な戦闘力を発揮

日本の戦国時代に於ける武士は日本国民性

のである。

民軍隊を建設せん事を東亜のために念願する

前の古（いにしえ）に復（かえ）り正しき国

みは深刻である。我らは中国がこの際唐朝以

うに決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

とんど不可能となり、しかも兵力の増加が迂

回をも不可能にした結果持久戦争に陥つたの

であつた。戦国時代の築城は当時これを力攻

する事困難でこれが持久戦争の重大原因とな

つた。そこで前に述べた謀略が戦争の極めて

有力な手段となつたのである。

3、軍隊の運動に比し戦場の広き事

決戦戦争の名手ナポレオンもロシアに対し

ては遂に決戦戦争を強いる事が出来なかつた。

露国が偉いのではない。国が広いためである

ナポレオンは決戦戦争の名手で数回の戦争に

赫々たる戦果を挙げ全欧州大陸を風靡したが

海を隔てたしかも僅か三十里のドーバー海峡

のため英国との戦争は十年余の持久戦争とな

つたのである。但しこれはむしろ2項の原因

となるべき点が多いが、その何れにしろ、日

本はソ連に対しては決戦戦争の可能性が甚だ

乏しい。

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

に決戦戦争の可能性の少なかつた事はアジア

も覇道文明のため戦争の本場である欧州に於
 強国相隣接し国土の広さも手頃であり、しか
 に現われて来るものと認むべきである。殊に
 があるが、大観すれば両戦争は時代的に交互
 なわれある地方には持久戦争が行なわれた事
 同一時代に於てもある地方には決戦戦争が行
 争必ずしも時代性があると云えない点があり
 以上総合的に考える時は決戦戦争、持久戦
 題であって、歴史的時代性とやはり密な関係
 がある。

主として武器、築城に依って制約せらるる問
 1項は一般文化と密に関係があり、2項は
 統一の可能性が生ずる時である。
 得るまでに文明の進歩せる時、すなわち世界
 前述の如く一根本拠地の武力が全世界を制圧し
 能の範囲が逐次拡大せらるる事は当然であり
 ない。ただし時代の進歩とともに決戦戦争可
 以上の原因の中3項は時代性と見るべきで
 は信ずるものである。

あり」

機動を主とする誠に変化多きものとなる。

「#底本167頁左上に戦争指導に関する表

争は統帥、政治の協調に微妙な関係がある如

く、戦略に於ても特に会戦に重きを置き時に

機動を主とする誠に変化多きものとなる。

「#底本167頁左上に戦争指導に関する表

あり」

は機動ないし小戦に依って敵の後方を攪乱し

敵を後退せしめて土地を占領する方法を用い

るのである。すなわち会戦を主とするか、機

動を主とするかの大略二つの方向を取るの

あるが、それは一に持久戦争に於ける武力の

価値に依って左右せられる。すなわち持久戦

争は統帥、政治の協調に微妙な関係がある如

く、戦略に於ても特に会戦に重きを置き時に

機動を主とする誠に変化多きものとなる。

「#底本167頁左上に戦争指導に関する表

あり」

てはこの関係が最も良く現われている。決戦

戦争では戦争目的達成まで殲滅戦略を徹底す

るのであるが、各種の事情で殲滅戦略の徹底

をなし難く、攻勢の終末点に達する時戦争は

持久戦争となる。持久戦争でも為し得る限り

殲滅戦略で敵に大衝撃を与えて戦争の決を求

めんと努力すべきであるが、かならずしも常

に左様にばかりあり得ないで、消耗戦略に依

り会戦によつて敵を打撃する方法の外、或い

は機動ないし小戦に依って敵の後方を攪乱し

敵を後退せしめて土地を占領する方法を用い

るのである。すなわち会戦を主とするか、機

動を主とするかの大略二つの方向を取るの

あるが、それは一に持久戦争に於ける武力の

価値に依って左右せられる。すなわち持久戦

争は統帥、政治の協調に微妙な関係がある如

く、戦略に於ても特に会戦に重きを置き時に

機動を主とする誠に変化多きものとなる。

「#底本167頁左上に戦争指導に関する表

あり」

は正しく持久戦争の名手であった。三十年戦争（一六一八―四八年）には会戦を見る事が多かったが、ルイ十四世初期のオランダ戦争（一六七二―七八年）及びフアルツ戦争（一六八九―九七年）に於てはその数甚だ少なかつた。スペイン王位継承戦争（一七〇一―一四年）には三回だけ大会戦があったけれども戦争の運命に作用する事軽微であった。またこの頃殲滅戦略を愛用したカール十二世は作戦的には偉功を奏しつつも、遂にピーター大帝の消耗戦略に敗れたのである。かくてポーランド王位継承戦争（一七三三―三八年）には全く会戦を見ず、しかもその戦争の結果政治的形勢の変化は頗る大なるものがあつた。すなわちフリードリヒ大王即位（一七四〇年）当時の用兵は持久戦争中の消耗戦略中、甚だしく機動主義に傾いていたのである。

当時かくの如く持久戦争をなすの止むなき状況にあり、しかも消耗戦略の機動主義すな

大なる密集隊形の行動に適する戦場は必ずし
 事は既に容易の業でなく、またかくの如き長
 かくの如き隊形に開進し、会戦準備を整うる
 式的決定を必要としたのであるが、行軍より
 く、しかも指揮機関の不充分はかくの如き形
 式に於ては、行軍より必要とする備兵には横隊を捨て難
 くに、しかも指揮機関の不充分はかくの如き形

は現に三列に並列した歩兵大隊を通常二戦
 列と、両翼に騎兵を配置し、当時効力未だ充
 分でなかつた砲兵はこれを歩兵に分属して後
 方に控置したのである。

横広（大王時代通常四列、プロイセンに於て
 のである。会戦のためには、その序列に従い
 は行軍、陣営、会戦等の行動一般を律するも
 じた時、「会戦序列」を決定する。この序列

主将は戦役（戦役とは戦争中の一時期で通
 常一力年を指す）開始前又は特別な事情の生
 じた時、
 来たなかつた。
 の横隊戦術から蟬脱（せんだつ）する事が出
 る備兵であつたため、十八世紀中には遂にこ
 った。しかしながら、専制的支配を必要とす

3、倉庫給養

戦捷の効果は求め難かった。危険甚大で、追撃は通常行なわれず、徹底的な所有する集結せる兵力のため反撃せらるる危険甚大で、追撃は通常行なわれず、徹底的な

撃して隊伍を紊（みだ）る時は、敗者のなお
 以上は攻撃の強行は至難であつた。

以上は攻撃の強行は至難であつた。

以上は攻撃の強行は至難であつた。

も多くなか、かつ開進後の整いたる運動は平
 時の演習に於てすら非常な技術を要する。敵
 火の下ではたちまち混乱に陥ることは明らか
 であり、また地形の影響を受くる事は極めて
 大きい。

速に行なわれたもので、ナポレオンは相当の

庫の掩護（えんご）は容易ならぬ大問題であった。

4、道路及び要塞

欧州道路の改善は十八世紀の後半期以後急

兵が増加したため、到底貧困な地方の物資のみでは給養が出来なくなった。

そこで作戦を行なう前に適当の位置に倉庫を準備し、軍隊がその倉庫を距たること三、

四日行程に至る時は更に新倉庫を設備してそ

の充実を待たねばならぬ。敵の奇襲に対し倉

庫の掩護（えんご）は容易ならぬ大問題であ

った。

4、道路及び要塞

欧州道路の改善は十八世紀の後半期以後急

速に行なわれたもので、ナポレオンは相当の

三十年戦争には徴発に依る事が多かったがそのため土地を荒し、人民は逃亡したり抵抗したりするに至って作戦に甚だしい妨害をしたのである。それ以来反動として極端に住民を愛護し、馬糧以外は概して倉庫より給養する事となった。

傭兵の逃亡を防ぐためにも給養は良くしな

ければならないし、徴発のため兵を分散する

事は危険でもあり、殊に三十年戦争頃に比し

兵が増加したため、到底貧困な地方の物資の

みでは給養が出来なくなった。

そこで作戦を行なう前に適当の位置に倉庫

を準備し、軍隊がその倉庫を距たること三、

四日行程に至る時は更に新倉庫を設備してそ

の充実を待たねばならぬ。敵の奇襲に対し倉

庫の掩護（えんご）は容易ならぬ大問題であ

った。

4、道路及び要塞

欧州道路の改善は十八世紀の後半期以後急

速に行なわれたもので、ナポレオンは相当の

置き、戦役計画の立案も政治上の顧慮を重視

よう。一国の戦争計画は先ず第一に外交に重きを

置き、戦役計画の立案も政治上の顧慮を重視

よう。一国の戦争計画は先ず第一に外交に重きを

置き、戦役計画の立案も政治上の顧慮を重視

よう。一国の戦争計画は先ず第一に外交に重きを

置き、戦役計画の立案も政治上の顧慮を重視

よう。一国の戦争計画は先ず第一に外交に重きを

置き、戦役計画の立案も政治上の顧慮を重視

よう。一国の戦争計画は先ず第一に外交に重きを

置き、戦役計画の立案も政治上の顧慮を重視

以上、各国が国境附近に設けた要塞は運動性

に乏しかった軍の行動を掣肘する事極めて大

きかった。以上、各国が国境附近に設けた要塞は運動性

に乏しかった軍の行動を掣肘する事極めて大

きかった。以上、各国が国境附近に設けた要塞は運動性

に乏しかった軍の行動を掣肘する事極めて大

きかった。以上、各国が国境附近に設けた要塞は運動性

に乏しかった軍の行動を掣肘する事極めて大

河は大王の作戦に重大関係がある。

十七世紀ポーバン等の大家が出て築城が発

達し、各国が国境附近に設けた要塞は運動性

に乏しかった軍の行動を掣肘する事極めて大

きかった。以上、各国が国境附近に設けた要塞は運動性

水路はこれがため極めて大なる価値があり

要塞攻撃材料の輸送等は川に依らねばほとん

ど不可能に近い有様で、エルベ、オーデル両

して作戦目標および作戦路を決定し、その作戦実施を将軍に命令する。
 攻勢作戦を行なわんとせば先ず巧みに倉庫を設備する。倉庫は作戦を迅速にするためなるべく敵地に近く設くるを有利とするも、我が企図を暴露せざるためには適当に撤退せしめねばならない。

ば、特に有利な場合でなければ決戦を行なう事なく、機動に依り敵を圧迫する事に勉める。準備成り敵地に侵入した軍は敵軍と遭遇せば、特に有利な場合でなければ決戦を行なう事なく、機動に依り敵を圧迫する事に勉める。例とする。

両軍相對峙するに至れば互に小部隊を支分して小戦に依り敵の背後連絡線を遮断し、また倉庫を奪い、戦わずして敵を退却せしむる事に努力する。敵の要塞に対してはその守備兵を他に牽制し、要すれば正攻法に依りこれを攻略する。作戦路上にある要塞を放置して遠く作戦を為す事はほとんど不可能とせられた。

「#底本173頁に君主の戦争の表あり」
 かくして逐次その占領地を拡大して敵の中
 心に迫り、この間外交その他あらゆる手段に
 依り敵を屈伏して有利な講和をすることに勉
 める。

両軍、要地に兵力を分散しているのである
 から一点に兵力を集中してそこを突破すれば
 良いように考えられるが、突破しても爾後の
 突進力を欠き、却（かえ）って背後を敵に脅
 かされて後退の余儀なきに至り、ややもすれ

ばその後退の際大なる危険に陥るのである。
 一七四四年第二シユレージエン戦争に於てベ
 ーメンに突進したフリードリヒ大王が、敵の
 巧妙な機動戦略のため一回の会戦をも交える
 事なく甚大の損害を蒙って本国に退却した如
 きはその最も良き一例である。（一八〇頁参
 照）

一八一二年ナポレオンのロシヤ遠征はこれ
 と同一原理に基づく失敗であり、この種の戦
 争では遊撃戦（すなわち小戦）の価値が極め

て大きい。

作戦は通常冬期に至れば休止し、軍隊を広地域に宿営せしめて哨兵線をもって警戒し、この期間を利用して補充、教育その他次回戦役の準備をする。時に冬期作戦を行なう事あるもそれは特殊の事情からするもので、冬期作戦に依る損害は通常甚だ大きい。故に一度敵地を占領して要塞、河川、山地等のよき掩护を欠く時は冬期その地方を撤退、安全地帯に冬営するのが通常である。

ナポレオン以後の戦争のみを研究した人にはなかなか想像もつかない点が多いのである。しかしこの事情をよく頭に入れて置かねばフランス革命の軍事的意義、ナポレオンの偉大さが判らないのである。

「#底本175頁左上に図あり」

第五節 フリードリヒ大王の戦争

フリードリヒ大王が一七四〇年五月三十一日、父王の死に依り王位に就いた時は年二十

の方針、あらゆる困難を排除して目的を確保
 ったと見るも過言ではない。終始一貫せる彼
 終世の事業はシュレージエン問題の解決に在
 くその領有を確実ならしめたのである。大王
 執拗を極め、大王は前後三回の戦争に依り漸
 に対する奥国女王マリア・テレジヤの反抗は
 シュレージエンに侵入した。弱国プロイセン
 に対しては些細の口実を以て防備薄弱なりし
 十日ドイツ皇帝カール六世が死去したので、
 如きものであった。あたかも良し同年十月二

はあたかも満州事変前の日本に対する満蒙の
 の領有を企図したのである。シュレージエン
 利なるシュレージエン（当時人口百三十万）
 熱烈なる念願のため、軍事的政治的に最も有
 大王は祖国を欧州強国の列に入れんとする
 していたのである。

九で、その領土は東プロイセンからライン河
 の間に散在し、人口二百五十万に過ぎなかつ
 た。当時奥（オーストリア）は千三百万、フ
 ランス二千万、英国は九百五十万の人口を有
 していたのである。

した不撓不屈の精神、これが今日のドイツの勃興に与えた力は極めて偉大である。ほとんど全欧州を向うに廻して行なった長年月にわたる持久戦争は戦争研究者のため絶好の手本である。仕事の外見は大きくないが、大王こそ持久戦争指導の最大名手であり、七年戦争は正しく軍神の神技と云うべきである。

1、第一シュレージエン戦争（一七四〇—四二年）

大王は十二月十六日国境を越えてシュレージエンに侵入し、二、三要塞を除きたちまち全シュレージエンを占領し、一月末国境に監視兵を配置して冬営に入った。

バイエルン侯がフランスの援助に依りドイツ皇帝の帝位を争い、奥国と交戦状態に在ったため、大王は奥国は自分に対して充分なる兵力を使用することが出来ないだろうと考えていたのに、一七四一年四月初め突如奥軍が国境を越えて攻撃し来たり、大王の軍は冬営中を急襲せらるるに至った。普（プロイセン

軍は狼狽して集結を図り、四月十日モルウィツツ附近に於て会戦を交え普軍は辛うじて勝利を得た。墺軍はナイセ要塞に後退し、爾後両軍相對峙する事となった。

「#底本177頁に地図あり」

大王と墺軍の間には複雑怪奇の外交的軀引が行なわれ、墺軍は大王と妥協して十月シユレージエンを捨て巴（バイエルン）・仏軍に向つたが大王は墺軍の誠意なきを見て一部の兵を率いてメーレンに侵入し、ベーメンに進出して来た巴・仏軍と策応したのである。かかるに墺軍は逆にドナウ河に沿うてバイエルンに侵入し、ために連合軍の形勢不利となり墺軍は大王に対して有力なる部隊を差向ける事となったのである。そこで大王は一七四二年四月ベーメンに退却し、後図を策する考えであつた。墺軍はこれを圧して迫り来たり、大王の戦勢頗る危険であつたが、大王は五月十七日コツウジツツに於てこれを迎え撃ち、勝利を得たのである。

来たり、ザクセン軍を合して大王に迫って来た。カールの謀将トラウンの用兵術巧妙を極め、巧みに大王の軍を抑留し、その間奇兵を以て大王の背後を脅威する。大王が会戦を求めんとせば適切なる陣地を占めてこれを回避する。大王は食糧欠乏、患者続出、寒気加わり、遂に大なる危険を冒しつつ、シュレージエンに退却の余儀なきに至った。トラウンは巧妙なる機動に依り一戦をも交えないで大王に甚大なる損害を与え、その全占領地を回復したのである。

外交状態も大王に利なく一七四四年遂に大王は戦略的守勢に立つの他なきに至った。そこで大王は兵力をシュワイドニッツ南方地区に集結、敵の山地進出に乗ずる決心をとった。敵が慎重な行動に出たならば大王の計画は容易でなかったと思われるが、大王は巧妙なる反面の策に依り敵を誘致し得て、六月四日ホーヘンフリードベルクの会戦となり大王の大勝となった。この会戦は第一、第二シュレー

に迫ったのでカールはベーメンに後退した。で大王はシュレージエンの軍を進めてカール力にはラウジッツに進入これに策応した。そこ向よりベルリン方向に迫り、カール親王の主

却冬営に就いた。しかるに奥軍は一部をもってライプチヒ方る事が出来ず、十月中旬シュレージエンに退却冬営に就いた。

奥軍はこれに追尾し来たり、九月三十日ゾー
 ル附近に於て大王の退路近くに現出した。大王はこれを見て果敢に攻撃を行ない敵に一大
 打撃を与えたけれども、永くベーメンに留ま
 る事が出来ず、十月中旬シュレージエンに退
 却冬営に就いた。

ジエン戦争中王自ら進んで企て自ら指揮した
 ほとんど唯一の会戦であり（大王が最も困難
 な時會戦を求めたのである）、大王が名将た
 る事を証した重要なものであるが、全戦争
 に対する作用はそう大した事は無く、敵はケ
 ーニヒグレッツ附近に止まり、王は徐々に追
 撃してその前面に進出、数カ月の対峙となつ

た。けれども大王は兵力を分散しかつ糧秣欠
 乏し、遂に北方に退却の止むなきに至った。

大王は外交の力に依ってザクセンを屈せんとしたが目的を達し難いので、ザクセン方向に作戦していたアンハルト公を督励して、十二月十五日ザクセン軍をケッセルスドルフに攻撃せしめ遂にこれを破った。大王はこの日ドレスデン西北方二十キロのマイセンに止まりカールはドレスデンに位置して両軍の主力は会戦に参加しなかつたのである。

カールは再戦を辞せぬ決心であつたが、ザクセン軍は志気阻喪して十二月二十五日遂にドレスデンの講和成立し、ブレスラウ条約を確認せしめた。

3、七年戦争（一七五六一六二年）
第二シユレージエン戦争後七年戦争までの十年間大王は国力の増進と特に前二戦争の体験に基づき軍隊の強化訓練に全力を尽し、自ら数個の戦術書を起案した。かくて大王はその軍隊を世界最精鋭のものとして確信するに至つたのである。この十力年間の大王の努力は戦争研究者の特に注目すべきところである。

イ、一七五六年
 奥国の外交は着々成功し露、スウェーデン
 索（ザクセン）、巴等の諸邦をその傘下に糾
 合し得たるに對し、大王は英国と近接した。
 また大王は奥国のシュレージエン回復計画
 の進みつつあるを知り、一七五六年開戦に決
 して八月下旬ザクセンに進入、十月中旬頃ザ
 クセン軍主力を降服せしめ、同国の領有を確
 実にした。
 口、一七五七年
 敵国側の團結は予想以上に鞏固（きょうこ
 で一七五七年のため約四十万の兵力を使用し
 得るに對し、大王はその半数をもつてこれに
 対応することとなった。大王は熟慮の後ベ
 メン侵入に決し、冬營地より諸軍をプラーグ
 附近に向い集中前進せしめた。この前進は当
 時の用兵上より云えば余りに大胆なものであ
 り種々論評せらるるところであるが、大王十
 年間の研究、訓練に基づく自信力の結果でよ
 く敵の不意に乘じ得たのである。

レージエンの占領を企図したので、大王も弱
 て奔命に疲れしむるとともに、塙軍主力はシュ
 えんとした。敵は巧みにこれを避け、大王をし
 乗じ、大王は西方より迫り来たる敵に一撃を与
 々急である。幸い、塙軍の行動活発ならざるに
 方および西南方より迫り来たったので、形勢愈
 うべき結果であったのに、更に仏・巴軍が西
 大王のコリンの失敗はほとんど致命的と云
 力はザクセンに退却した。

五月六日、プラーク東方地区で塙軍を破り、
 これをプラーク城内に圧迫した。プラークは
 当時既に相当の要塞になっていた。簡単
 攻略する事が出来ず、五月二十九日より始め
 た砲撃も弾薬不十分で目的を達しかねた。と
 ころが、塙将ダウンが近接し来たり、巧みに大
 王の攻囲を妨げるので、大王は止むなく手兵を
 率いてこれに迫り、六月十八日コリン附近で
 ダウンの陣地を攻撃した。しかしながら、大王
 軍は遂に大敗し、止むなくプラークの攻囲を
 解き、一部をもってシュレージエン方向に主

り抜いて十月下旬遂にシュレージエンに転進するに決した。その時西方の敵再び前進し来たるの報告に接しただちにこれに向い、十一月五日二万二千の兵力をもって六万の敵を口スバハに迎撃、これに甚大の損害を与えた。この一戦はほとんど絶望の涯てに在った普国を再生の思いあらしめた。しかしシュレージエン方面の状況が甚だ切迫して来たのでただちにこれに転進、途中ブレスラウの陥落を耳にしつつ前進、十二月五日有名なロイテンの会戦となった。

この会戦は三万五千をもって奥軍の六万五千に徹底的打撃を与えた、大王の会戦中の最高作品であり、大王のほとんど全会戦を批難したナポレオンさえ百世の模範なりとして極力賞讃したのである。奥軍はシュレージエンに進入した九万中僅かにその四分の一を掌握し得、大王は約四万の捕虜を得てシュワイドニッツ要塞以外の全シュレージエンを回復、平和への希望を得て冬営についた。

ハ、一七五八年

マリア・テレジアの戦意旺盛にして平和の望みは絶え、露軍は昨年東普に侵入退却したが、この年一月二十二日遂にケーニヒグレッツを占領し、夏にはオーデル河畔に進出を予期せねばならぬ。幸いロスバハ、ロイテンの戦果に依り英の態度積極的となり、仏に対する顧慮は甚だしく減少した。

しかし大王の戦力も大いに消耗、もはや大規模な攻勢作戦を許さない。またいたずらに守勢に立つは大王の性格これを許さぬ。ここに於て大王はなるべく遠く奥軍を支え、為し得ればこれに一撃を与え、露軍の近迫に際し動作の余地を有するを目的とし、四月中旬シユワイドニッツ攻略後主力をもってメーレンに侵入、オルミュッツ要塞を攻略するに決心した。あたかも一九一六年ファルケンハインのいわゆる「制限目的をもってする攻勢」であるベルダン攻撃に似ている。

五月二十二日から攻囲を開始したが、敵将

ダウンの消耗戦略巧妙を極めて大王を苦しめ
 六月三十日四千輛よりなる大王の大縦列を襲
 撃潰滅せしめた。大王は躊躇する事なく攻城
 を解き、八月初め主力をもってランデスフー
 トに退却した。

露軍は八月中旬オーデル河畔に現われスウ
 エーデン軍また南下し来たったので、大王は
 主力をもって塙軍に対せしめ、自ら一部をも
 って露軍に向い、八月二十五日ズオルンドル
 フ附近に於て露軍と変化多き激戦を交え、辛
 うじてこれを撃退した。大王の損害も大きか
 ったが露軍は塙軍の無為を怒り、遠く退却し
 て大王の負担を減じた。

塙軍主力はラウジッツ方面よりザクセンに
 作戦し、西南方より前進して来た帝国軍（神
 聖ローマ帝国に属する南ドイツ諸小邦の軍隊
 と協力してザクセンを狙い、虚に乗じて一部
 はシュレージエンを攪乱した。大王は寡兵を
 もって常に積極的にこれに当たったが、ダウン
 の作戦また頗る巧妙で虚々実々いわゆる機動

フの堅固なる陣地を攻撃、一角を奪取したけ
 して露軍に向い、八月十二日クーネルスドル
 機会を与えない。大王は止むなく奥軍を放置
 来たが、行動例に依って巧妙で大王に攻撃の
 ウンは初めて行動を起し、ラウジッツに出て
 六月末露軍がオーデル河畔に出て来るとダ
 ージエンに集結、敵の進出を待つ事となった。
 攻勢作戦の力無く、止むなく兵力を下シユレ
 述べている。大王の戦力は更に低下して最早
 に有利なる場合のほか攻撃至難となった旨を

昨年暮以来奥軍の防禦法は大いに進歩し、特
 辛うじてその占領地を保持し得た大王も、

二、一七五九年
 もって大勢を制し得たのである。
 が、結局会戦に自信のある大王がよく寡兵を
 が出来た。この戦は両将の作戦巧妙を極めた
 敵を我が占領地区より駆逐して冬営に移る事
 て能（よ）く敵を押し、遂にほとんど完全に
 キルヒで敵に撃破せられたけれども大体に於
 作戦の妙を發揮した。十月十四日大王はホホ

れども遂に大敗し、さすがの大王もこの夜は万事終れりとし自殺を決心したが、露軍の損害また大きく、殊に墺軍との感情不良で共同動作適切を欠き、大王に英気を回復せしめた。九月四日ドレスデンは陥落した。露軍はシユレージエンに冬営せんとしたが大王の巧妙なる作戦に依り遂に十月下旬遠く東方に退却した。大王はこの頃激烈なるリウマチスに冒されブレスラウに病臥中、カール十二世伝を書いて彼の軽挙暴進の作戦を戒め、会戦は敵の不意に乘じ得るかまたは決戦に依り、敵に平和を強制し得る時に限らざるべからずと述べている。

病氣回復後、大王はザクセンを回復せんと努力したが、十一月二十一日その部将フンクがマキセン附近でダウンに包囲せられて降伏し、墺軍はドレスデンを固守し兩軍近く相対して冬営する事となった。

ホ、一七六〇年

大王の形勢ますます不良、クラウゼウイツ

を監視、主力をもつてダウンをベーメンに圧

った大王を救った。大王は一部をもつて露軍

リーグニッツの不期戦は風前の灯火の感あ

突、適切機敏なる指揮に依りこれを撃破した。

動を試みたが、十四日払暁突如ラウドンと衝

大王は苦境を脱するため種々苦心し色々の機

更に露軍をオーダー左岸に誘致するに勉めた。

となり、三万の大王を攻撃する決心を取って

大王と前後して東進、ラウドンを合して十万

ニッツ西南方地区に陣地を占めた。ダウンは

で大王は八月初め断固東進、八月十日リーグ

しシュレージエンの形勢ますます悪化するの

動を妨げてこれをザクセンに抑留した。しか

わんとしたが、ダウンは毎度巧みに大王の行

めた。大王は再三シュレージエンの危急を救

将ラウドンをしてシュレージエンに作戦せし

ダウンは自ら大王をザクセンに抑留し、驍

た。

る以外また策の施すべき術もない有様となつ

ツの言う如く敵の過失を発見してこれに乗ず

迫せんとしたが、露軍と墺軍の一部は十月四日ベルリンを占領したので急遽これが救出に赴いた。

露軍の危険は去ったので是非ザクセンを回復せんとして南下したが、ダウンはトルゴウに陣地を占めたので大王は遂に決心してこれを力攻した。大損害を受け辛うじて敵を撃退し得たがダウンは依然ドレスデンを固守して冬営に移った。

トルゴウの会戦は一九一八年のドイツ軍攻勢にも比すべきものである。ともに困難の極に達したドイツ軍が運命打開のため試みた最後の努力である。ただし大王は一九一八年と異なりなお存在を持続し得たのである。

へ、一七六一年
同盟軍はダウンをして大王の軍をザクセンに抑留し、ラウドンおよび露軍をもつてシュレージエンおよびポンメルンに侵入せんと企てた。

大王は一部をザクセンに止めて自らシュレ

ージエンに赴き、ラウドンと露軍の合一を妨げ、機会あらば一撃を加えんとしたが敵の行動また巧妙で、遂に八月中旬五万五千の兵をもつて十五万の敵に対し、シュワイドニッツ附近のブントツエルウツツに陣地を占め、全く戦術的守勢となった。

露軍はその後退却したがラウドンは大王の隙に乗じてシュワイドニッツを奪取、奥軍は初めてシュレージエンに冬営する事となり、北方の露軍また遂にコールベルクを陥してポ
ンメルンに冬営するに至った。

ト、一七六二年
ナポレオン曰く「大王の形勢今や極度に不利なり」と。

しかし天はこの稀代の英傑を棄てなかった。一七六二年一月十九日すなわち大王悲境のド
ン底に於て露女王の死を報じて来た。後嗣ペ
ーテル三世は大の大王崇拜者で五月五日平和
は成り、二万の援兵まで約束したのである。
スウェーデンとの平和も次いで成立した。

大王はこの有利なる形勢の急転後、熟慮を重ねてその作戦目標をシュレージエンおよびザクセンに限定した。しかも極力会戦を避け必要以上にマリア女王の敵愾心の刺戟を避けその屈服を企図したのである。

露援軍の来着を待って七月行動を起し、シユワイドニッツ南方にあつた奥軍陣地に迫りこれを力攻する事なく、一部をもつて敵の側背を攻撃せしめて山中に圧迫、更に十月九日シユワイドニッツを攻略、ザクセンに向い、ドレスデンは依然敵手にあつたが他の全ザクセンを回復し、一部の兵を進めて南ドイツの諸小邦を屈服せしめた。

英仏間には十一月三日仮平和条約なり、さすがのマリア・テレジアも遂に屈服、一七六三年二月十五日フーベルスブルグの講和成立大王は初めてシュレージエンの領有を確実にしたのである。

クラウゼウィッツは大王の戦争を、一七五七年を会戦の戦役、

なって、戦争目的が論じられている有様であ
 入ったため無理からぬ点が多い）、戦争後に
 定まった戦争目的なく（決戦戦争より戦争に
 ばならぬ。第一次欧州大戦ではドイツは遂に
 目的即ち講和条件を変更する事は厳に慎まね
 に目前の戦況に眩惑し、縁日商人の如く戦争
 る事を忘れてはならぬ。持久戦争に於ては特
 場合も毫も動揺しなかつた事が一大原因であ
 良く戦争目的を確保し、有利の場合も悲境の
 力が最も大なる作用を為しているが、しかし

達成した。それには大王の優れたる軍事的能
 て良く七年の持久戦争に堪えその戦争目的を
 も毅然として天才を發揮し、全欧州を敵とし
 応ずる如くその戦略を運用し、最悪の場合に
 なく逐次戦略を交換して来た。そして状況に
 と称しているが、戦争力の低下に従って止む
 一七六二年を威嚇の戦役、
 一七六一年を構築陣地の戦役、
 一七五九―一七六〇年を行軍および機動の戦役、
 一七五八年を攻囲の戦役、

った。そしてこれが政戦略の常に不一致であった根本原因をなしている。

第六節 ナポレオンの戦争

フリードリヒ大王の時代よりナポレオンの時代へ

1、持久戦争より決戦戦争へ
十八世紀末軍事界の趨勢。

七年戦争後のフリードリヒ大王の軍事思想はますます機動主義に傾いて来た。一般軍事

界はもちろんである。

一七七一年出版せられたフェツシュの『用兵術の原則および原理』には「将官たる者は

決して強制せられて会戦を行なうようなことがあってはならぬ。自ら会戦を行なう決心を

した場合はなるべく人命を損せざる事に注意すべし」とあり、一七七六年のチールケ大尉

の著書には「学問に依りて道徳が向上せらるる如くまた学問に依り戦術は発達を遂げ、将

軍はその識見と確信を増大して会戦はますます

らるるに至った。
 学の書籍がある叢書の中の数学の部門に収め
 作戦線等はこの頃に生れた名称であり、軍事
 理学研究盛んとなり鎖鑰（さやく）、基線、

機動主義の法則を発見するを目的として地
 戦争を実行し得るのである」と論じている。
 し、かつ敵を撃破する必要に迫らるる事無く
 軍事上の企図を幾何学的の厳密をもって着手
 の処置の基礎とする。この理を解するものは
 陣営および行軍に関する軍事学をもって自己

確實なる会戦を試みる前に常に地形、陣地、
 英人口イドは一七八〇年「賢明なる將軍は不

すその数を減じ、結局戦争が稀となるであ
 う」と論じている。

仏国の有名な軍事著述家でフリードリヒ大
 王の殊遇を受け、一七七三年には機動演習の
 陪観をも許されたGuibertは一七八九
 年の著述に「大戦争は今後起らぬであろう。

もはや会戦を見ることはないであろう」と記
 している。七年戦争につき有名な著述をした

ハイソリヒ・フォン・ビューローは「作戦の目的は敵軍に在らずしてその倉庫である。何となれば倉庫は心臓で、これを破れば多数人の集合体である軍隊の破滅を来たすからである」と断定し、戦闘についても歩兵は唯射撃するのみ、射撃が万事を決する、精神上の事は最早大問題でないと称し、「現に子供がよく巨人を射殺することが出来る」と述べている。

かくて軍事界は全く形式化し、ある軍事学者は歩兵の歩度を一分間に七十五歩とすべきや七十六歩とすべきやを一大事として研究し「高地が大隊を防御するや。大隊が高地を防御するや」は当時重大なる戦術問題として議論せられたのである。

2、フランス革命に依る軍事上の変化

「最も暗き時は最も暁（あかつき）に近き時なり」と言ったフリードリヒ大王は一七八六年この世を去り、後三年一七八九年フランス革命が勃発したのである。

革命は先ず軍隊の性質を変ぜしめ、これに依つて戦術の大変化を来たし遂に戦略の革命となつて新しき戦争の時代となつた。

3、新軍の建設

革命後間もなく徴兵の意見が出たが専制的であるとして排斥せられた。しかし列強の攻撃を受け戦況不利になつたフランスは一七九三年徴兵制度を採用する事となつた。しかもこれがためには一度は八十三州中六十余州の反抗を受けたのであつた。

徴兵制度に依つて多数の兵員を得たのみでなく、自由平等の理想と愛国の血に燃えた青年に依つて質に於ても全く旧国家の思い及ばざる軍隊を編制する事が出来た。

新戦術

革命軍隊も最初はもちろん従来の隊形を以て行動しようとしたのであるが、横隊の運動や一斉射撃のため調練不充分で自然に止むなく縦隊となり、これに射撃力を与えるため選抜兵の一部を散兵として前および側方を前進

る事となった。

横隊戦術の精神が在ったが、縦隊も認めらるる事となった。

一八三一年まで改正せられなかつたは依然

説が優勢であつた。一七九一年仏国の操典（

して盛んに論争せられたが、大体に於て横隊

まで横隊、縦隊の利害は戦術上の重大問題と

戦争でも使用せられた事があり、その後革命

めこれを利用しようとの考えあり、現に七年

縦隊は運動性に富みかつ衝突力が大きい

ばぬものとしていた。

たひ）が大きいため単独射撃は一斉射撃に及

た。

しかし軍事界は戦闘に於ける精神的躲避（

の精神で奮起した米人が巧みにこれを利用し

た。

散兵や縦隊は決して新しいものではない。

奥国の軽歩兵（忠誠の念篤いウンガルン兵等

である）はフリードリヒ大王を非常に苦しめ

たのであり、また米国独立戦争には独立自由

の精神で奮起した米人が巧みにこれを利用し

た。

せしむる事とした。即ち散兵と縦隊の併用で

ある。

たず、その時代の人、なかんずく仏人は自己
 的差異は人の想像するようには甚だしく目立
 或いは交互に使用した。故に新旧戦術の根本
 隊、縦隊の三者を必要に応じて或いは同時に
 るに従い散兵を制限する事を試み、散兵、横
 が無くなる危険があったから、秩序が回復す
 衝突を行なう際に指揮官の手許に充分の兵力
 急策に過ぎなかった。余りに広く散開しかつ
 こに至らしめたのである。「散兵は単なる応
 の要求が不知不識（しらずしらず）の間にこ

て仏国が好んで採用したものでもない。自然
 はウエリントンの横隊戦術に敗れた）、決し
 たし（一八一五年ワ―テルローでナポレオン
 に於て必ずしも徹底的に優越なものでなかつ
 人が往々誤解するように横隊戦術に比し戦場
 ため重要な要素をなしたのである。しかし世
 点に集結使用するに便利で、殲滅戦略に入る
 み地形の交感を受くる事少なくなかつ兵力を要
 る革命軍隊に適するのみならず、運動性に富
 要するに散兵戦術は当時の仏国民を代表す

が親しく目撃する変化をほとんど意識せず、また諸種の例証に徴して新形式を組織的に完成する事にあまり意を用いざりし事実を窺い得る」とデルブリュック教授は論じている。革命、革新の实体は多くかくの如きものであろう。具体案の持ち合わせもないくせに「革新」「革新」と観念的論議のみを事とする日本の革新論者は冷静にかかる事を考うべきであろう。

4、給養法の変化

国民軍隊となったことは、地方物資利用に依り給養を簡単ならしむる事になり、軍の行動に非常な自由を得たのである。殊に将校の平民化が将校行李の数を減じ、兵のためにも天幕の携行を廃したので一八〇六年戦争に於て仏・普両軍歩兵行李の比は一对八乃至一对十であった。

5、戦略の大変化

仏国革命に依って生まれた国民的軍隊、縦隊戦術、徴発給養の三素材より、新しき戦略

前述したフリードリヒ大王の戦争の見地から、

開された。

この殲滅戦略は今日の人々には全く当然の

事であらうとするに足らないのであるが、
 上の一要素を総合してこれを戦略に活用した
 兵力を迅速に決勝点に集結して敵の主力に対
 し一挙に決戦を強い、のち猛烈果敢にその勝
 利を追求してたちまち敵を屈服せしむる殲滅

物の真相を洞見し、革命に依って生じた軍事

域に分散して土地の領有を争うたのであった。
 ナポレオンはその天才的直観力に依って事

で相対峙し、僅か二三十万の軍がアルサス、
 #「アルサス」はママ「から北海に至る全地

略の旧態は改める事がなかった。一七九四年
 仏軍は敵をライン河に圧して両軍ライン河畔

を創造するためには大天才の頭脳が必要であ
 った。これに選ばれたのがナポレオンである

国民軍隊となった一七九四年以後も消耗戦

すれば、真に驚嘆すべき革新である事が明らかとなるであろう。ナポレオン当時の人々は中々この真相を衝き難く、ナポレオンを軍神視する事となり、彼が白馬に乗って戦場に現われると敵味方不思議の力に打たれたのである。

ナポレオンの神秘を最初に発見したのは科学的な普国であった。一八〇六年の惨敗によりフリードリヒ大王の直伝たる夢より醒めた普国は、シャルンホルスト、グナイゼナウの力に依り新軍を送り、新戦略を体得し、ナポレオンのロシヤ遠征失敗後はしかるべき強敵となつて遂にナポレオンを倒したのである。

フリードリヒ大王時代の軍事的教育を受けナポレオン戦争に参加したクラウゼウッツはナポレオンの用兵術を組織化し、一八三一年彼の名著『戦争論』が出版せられた。

6、一七九六―一七九七年のイタリア作戦一八〇五年をもつて近世用兵術の発起点とする人が多い。二十万の大軍が広大なる正面

歳にしてイタリア軍司令官に任ぜられ、同二
 ナポレオンは一七九六年三月二日弱冠二十六
 称して実行不可能のものと思われたのである
 即ち旧式用兵術の人々からは狂気者の計画と
 ナポレオンの立案せる計画は、当事者から

る作戦計画を立案した事がある。
 ナポレオンの立案せる計画は、当事者から
 即ち旧式用兵術の人々からは狂気者の計画と
 称して実行不可能のものと思われたのである
 ナポレオンは一七九六年三月二日弱冠二十六
 歳にしてイタリア軍司令官に任ぜられ、同二

エンの地理はあたかも自分の衣囊のように熟
 クラウゼウィッツが「ボナパルトはアペニ
 の初期作戦は最も興味深いものである。

の意味で一七九六年のイタリア作戦、特にそ
 レオン初期の戦争に明瞭に現われている。そ
 これは外形上の問題で、新用兵術は既にナポ
 滅戦略の特徴を発揮したものである。しかし
 観は、十八世紀の用兵術に対し最も明瞭に殲
 一挙に敵主力を捕捉殲滅したウルム作戦の壮
 をもって千キロ近き長距離を迅速に前進し、

ころがナポレオン着任当時のイタリア軍の状
 し修理すれば車を通し得る状態であった。と
 路（峠の標高約五百メートル）が最良で、少
 にはサボナから西北方アルタールを越える道
 あった。海岸からサルジニアに進入するため
 岸線は車も通れず、騎兵は下馬を要する処も
 攻撃、これを撃破する決心であった。当時海
 らケバ方向に前進し、サルジニア軍の左側を
 の分離に乘じ速やかに主力をもってサボナか
 ナポレオンはかねての計画に基づき、両軍

あった。
 置し塙軍の主力はなおポー河左岸に冬営中で
 万をもってケバ要塞からモントヴィイの間に位
 軍前面の敵はサルジニアのコツリーが約一
 山地内に在った。縦深約八十キロである。
 ボナからアルベンガ附近、その一師団は西方
 四師団、騎兵二師団で兵力約四万、主力はサ
 イタリア軍の野戦に使用し得る兵力は歩兵
 依る作戦を実行することとなった。
 十六日二―スに着任、いよいよ多年の考案に

命令した。蓋（けだ）しナポレオンは奥軍の
 事無く、かえって兵力増加を粧うべき事を
 ツセナに命令するにボルトリを軽々に撤退す
 月二日ニースを発してアルベンガに達し、マ
 にしたナポレオンの決心は変化を来たし、四
 た。しかるに四月に入って奥軍前進の報を耳
 増加し、表面には調子の良い報告を出してい
 命令を実行せず、かえってボルトリの兵力を
 の経験すら無いナポレオンの来任心よからず
 いたマツセナは後輩の黄口児、しかも師団長

したが、前任司令官の後任をもって自任して
 戦する事を避くるため同地の兵力撤退を命令
 出していたのである。ナポレオンは奥軍を刺
 た）外交を後援するため、一部をボルトリに
 め同地は仏軍の補給に重要な位置を占めてい
 於ける（ゼノバは当時中立で海岸道不良のた
 ナポレオン着任当時、マツセナはゼノバに
 った。

行動開始前の四月九日に於けるポ―川以南

「#底本198頁右上に地図あり」

の占領を确实ならしむる事とした。

を占領せしめ、サルジニア軍と連絡して要線

部隊をもつてサボナ北方のモンテノット附近

粉所を奪取する事に決心した。同時に右翼の

ノバの連絡を絶ち、かつポルトリにあった製

更に四月八日にはポルトリを占領して敵とゼ

が、その後仏軍の行動の活発でないのに乗じ

占領して仏国の突進を防止する決心をとった

月三十日にはゼノバ北方の要点ボヘツタ峠を

仏軍活動開始せらるるを知り南進を起し、三

司令官老将ポ―リユ―はゼノバ方面に対する

主力をポ―川左岸に冬営していた奥軍の新

「#底本197頁上に地図あり」

のまま止まるは危険な旨を具申している。

（しるし）に不安を抱き、同日は狼狽してこ

決心したのである。マツセナは敵兵増加の徴

サルジニア軍との中央に突進し、各個撃破を

前進を知り、なるべくこれを東方に牽制して

を受けて占領せられたが、ランポン大佐はモ
 ない。然るにこの日モンテノットも敵の攻撃
 領した敵は相当の兵力であるが追撃の様が
 に前進して状況を視察したが、ボルトリを占
 ボナに退却す。ナポレオンは十一日更に東方
 ルトリは奥軍の攻撃を受け同地の守兵は夜サ
 ナポレオンは十日サボナに到着、この日ボ

兵術である。
 ウは後方に主力を止め、攻撃に使用した兵力
 は五大隊半に過ぎなかった。これが当時の用
 兵術である。

はアルゲソトウ部隊に命令した。アルゲント
 リュー自らこれに臨み、モンテノットの攻撃

即ち約三万の兵力が攻撃前進を前にして縦
 深六十キロ、正面約八十キロに分散しており
 しかも東西の交通は極めて不便でボルトリか
 ら右翼の方面に兵力を転用するためにはアッ
 クイを迂回するを要する。

ボルトリの攻撃にはビットニー、フカツソ

ウィヒ兩部隊のうち、九大隊を使用してボー

衛たる部隊は十三日コッセリア古城を守備し
 に向い前進するに決し、その部署をした。前
 え、予定に基づき主力をもつてサルジニア軍
 果を過信して奥軍の主力を撃破したものと考
 的打撃を与えた。ナポレオンはこの戦闘の成
 場に集め得て、三、四千の敵を急襲して徹底
 的打撃を与えた。ナポレオンはこの戦闘の成
 果を過信して奥軍の主力を撃破したものと考
 え、予定に基づき主力をもつてサルジニア軍
 に向い前進するに決し、その部署をした。前
 衛たる部隊は十三日コッセリア古城を守備し

ンテノット南方の高地を守備してよく敵を支
 えている事を知った。
 ナポレオンはこの形勢に於て先ずモンテノ
 ット方面の敵を撃滅するに決心し、僅少なる
 部隊をサボナに止めてポルトリの敵に対せし
 め、主力は夜間ただちに行動を起して敵の側
 背に迫る如き部署をした。この決心処置は迅
 速果敢しかも適切敏捷に行なわれナポレオン
 を嫉視ないし軽視していた諸将を心より敬服
 せしめるに至った。ある人は「ナポレオンは
 この命令で単に奥軍に対してのみでなく、部
 下諸將軍連に対しても勝利を得た」と言つて
 いる。

気付き、心を奪われてアレツサンドリア方面
 いたが、十六日に至って初めて事の重大さに
 しむる当時の戦術を振りまわして泰然として
 側方より敵の後方に兵を進めてこれを退却せ
 報を得るも一拠点を失ったに過ぎないとし、
 は戦場の一波瀾ぐらいに考え、その後逐次敗
 ポーリューは十二日の敗報を受けてもこれ
 その禍を蒙る有様であった。
 かも軍隊は再び掠奪を始め、デゴの寺院すら
 力を該方面に転進し遂にこれを撃破した。し
 かも軍隊は再び掠奪を始め、デゴの寺院すら

受ける危険に陥ったが、ナポレオンは迅速に兵
 ボルトリ方面より転進して来た奥軍の急襲を
 を始め、全く警戒を怠っていた所を、十五日
 日の間甚だ不充分なる給養であったため掠奪
 に向う前進を部署した。
 しかるにデゴ戦闘後に狂喜した仏兵は、数
 十四日敵を攻撃してこれを撃破し、再び西方
 北方デゴ附近に在るを知って該方面に前進、
 十四日敵を攻撃してこれを撃破し、再び西方
 に向う前進を部署した。
 しかるにデゴ戦闘後に狂喜した仏兵は、数

ナポレオンの殲滅戦略を戦争目的達成に向つめてその大変化を発見し得るのである。このフリードリヒ大王以来の戦争に対比すれば始オンの偉大を発見するに苦しむであろうが、眼で見れば余りに当然であると考え、ナポレジニア国を全く屈伏した作戦は今日の軍人のこの二週間の間に塙軍に一打撃を与えサル二時休戦条約が成立した。

闘となり遂にコツリー軍を撃破した。

サルジニアは震駭して屈伏し二十八日午前

いたが、これを追撃してモントヴィ附近の戦

に兵力を集中せんと決心したが、諸隊の混乱甚だしく、精神的打撃甚大で全く積極的行動に出づる気力を失った。

ナポレオンは十七日主力をもつて西進を開始したが、コツリーは退却してタナ口川左岸に陣地を占めた。仏軍はケバ要塞を単にこれを監視するに止めて前進、十九日敵陣地を攻

撃したが増水のため成功せず、二十一日攻撃を敢行した時はサルジニア軍は既に退却して

を採用しカイゼルに上奏せる際「若し仏軍に制限目的を有する攻撃としてベルダン攻撃案を採

用し、一九一六年ファンケルハインが、いわゆる七年二月二日までにマントアを降伏せしめた。困

しつ、つ四回も敵の解困企図を粉碎、一七九要

塞は頗る堅固でナポレオンはこの要塞を攻ここに攻勢

の終末点に達した。殊にマントアは新しき殲滅戦

略により敵を圧倒したが結局作戦はその一支作

戦に過ぎない。ナポレオンは新しき殲滅戦略により敵

を圧倒したが結局作戦はその一支作戦に過ぎない。ナ

ポレオンは新しき殲滅戦略により敵を圧倒したが結局

作戦はその一支作戦に過ぎない。ナポレオンは新しき殲

滅戦略により敵を圧倒したが結局作戦はその一支作戦に

過ぎない。ナポレオンは新しき殲滅戦略により敵を圧倒

したが結局作戦はその一支作戦に過ぎない。ナポレオン

は新しき殲滅戦略により敵を圧倒したが結局作戦はその

一支作戦に過ぎない。ナポレオンは新しき殲滅戦略によ

り敵を圧倒したが結局作戦はその一支作戦に過ぎない。

て続行し得るところに即ち決戦戦争が行わるる事となるのである。サルジニアを屈したナ

ポレオンは再び奥国に向い前進、ポール川左岸に退却

せる敵に対しポール川南岸を東進して五月八日ピアツ

ェンツァ附近に於てポール川を渡り、敵をしてロン

バルデーを放棄の止むなきに至らしめ、敵を追撃

して十日有名なるロジの敵前渡河を強行、十五日ミ

ラノに入城した。五月末ミラノを発しガルダ湖畔に

進出、ポール川を遠くチロール山中に撃退した。

当時の仏奥戦争は持久戦争でありイタリア作戦はその

一支作戦に過ぎない。ナポレオンは新しき殲滅戦略によ

り敵を圧倒したが結局作戦はその一支作戦に過ぎない。

七年三月前進を起し、四月十八日レオベンの

この衛戍兵までも駆り集めたのである。このため主戦場から兵を転用し、最後にはウイン

ポレオンのために十二万を失ったのである。これは当時の奥国としては大問題で、これが

たのである。奥軍は四回の解囲とマントアの降伏で少なくとも十万の兵力を失った（仏軍の損失は二万五千）。マントア攻囲前の奥軍の損失は二万に達するから、一年足らずの間に奥軍はナポレオンのために十二万を失ったのである。

奥国の国力は消耗し、ナポレオンは一七九〇の衛戍兵までも駆り集めたのである。このため主戦場から兵を転用し、最後にはウインの衛戍兵までも駆り集めたのである。これは当時の奥国としては大問題で、これが

休戦条約が成立した。

その後の大観

ナポレオンの天才的頭脳が新戦略を生み出し、その新戦略に依ってナポレオンはたちまち軍神として全欧州を震駭した。かくしてフランスはナポレオンに依って救われた。

ナポレオンは対英戦争の第一手段として一七九八年エジプト遠征を行なったが、留守の間仏国は再びイタリアを失い苦境に立ったのに乗じ、帰来第一統領となつて一八〇〇年有

名なアルプス越えに依って再び名望を高めた。一度英国と和したが一八〇三年再び開戦、遂に十年にわたる持久戦争となつた。一八〇四年皇帝の位に即き、英国侵入計画は着々として進捗、その総合的大計画は真に天下の偉観であつた。これは今日ヒットラーの試みと対比して無限の興味を覚える。

海軍の無能によつてナポレオンの計画は実行一步手前に於て頓挫し、英国は奥、露を誘引して背後を覘（ねら）わしめた。ナポレオ

有の大追撃を強行、プロイセンのほとんど全
ステートに撃破し、逃ぐるを追って古今未曾
ゲンを通過して北進、敵をイエナ、アウエル
結、十六万の大軍三縦隊となりてチュウリン
オンは南ドイツにあったその軍隊を巧みに集
一八〇六年普国と戦端が開かれるとナポレ

的を達成した。
形勢楽観を許さぬ状況となったが、ナポレオ
ンは巧みに喫、露の連合軍を誘致して十二月
二日アウステルリッツの会戦となり戦争の目
的を達成した。

勢の終末点に達ししかも普国の態度疑わしく
逃ぐる敵を追ってメーレンに侵入したが、攻
ポレオンはドノー川に沿うてウインに迫り、
とんど全軍をウルムに包囲降伏せしめた。ナ
喫、露両軍の間に突進して九月十七日喫のほ
る）は堂々東進を開始して南ドイツに侵入、
の精鋭（真に世界歴史に見なかつた精鋭であ
ドーバー海峡に集結訓練を重ねた約二十万
て喫国征伐に決心した。
ンは一八〇五年八月遂に英国侵入の兵を転じ

軍を潰滅した。しかもポーランドに進出すると冬が来る。物資が少ない。非常に苦しい立場に陥った一八〇七年六月二十五日漸（よう）やく露国との平和となった。

対英戦争の第三法である大陸封鎖強行のため一八〇八年スペインに侵入したところ、作戦思うように行かず、ナポレオン失敗の第一歩をなした。英国の煽動により一八〇九年奥国が再び開戦し、ナポレオンの巧妙なる作戦は良くこれを撃破したが一方スペインを未解決のまま放任せざるを得ない事となり、またアスペルンの渡河攻撃に於ては遂に失敗、名将ナポレオンが初めて黒星をとった。

この大陸封鎖の関係から遂に一八一二年露国との戦争となり、モスコーの大失敗となった。

一八一三年新兵を駆り集め、エルベ河畔での作戦はナポレオンの天才振りを発揮した面白いものであったが、遂にライプチヒの大敗に終り、一八一四年は寡兵をもってパリ東方

て立っている。

海と英国国民性の強靱さは天才ナポレオンを
遂に倒したのである。

最後の努力であった。

る）。

一八一五年のワートルローは大体見込なき
『名将ナポレオンの戦略』によく記されてい
得していたので思うに任せず、連合軍に降伏
の止むなきに至った（この作戦は伊奈中佐の
しく、殊に普軍がナポレオンの新用兵術を体
あり、彼の部将としての最高の能率を發揮し
たと見るべきである。しかも兵力の差が甚だ
地区に於て大軍に対する内線作戦となった。
一七九六年の作戦に比べて面白い研究問題で

ヒットラーは今日ナポレオンの後継者とし

対墺、対普の個々の戦争は巧みに決戦戦争
を行なったが、スペインに対して地形その他
の関係で思うに任せず、対露侵入作戦は大失
敗をした。しかも、全体から見てナポレオン
はその全力を対英持久戦争に捧げたのである

最大目標である。

会戦成果を大ならしむるためには敵を包囲殲滅する事が理想であり、それがためモルトケ時代からは特に分進合撃が唱導せられた。会戦場に兵力を集結するのである。即ち分進して軍隊の行動を容易にし、会戦場にて兵力を集結し特に敵の包囲に便ならしめる。

しかるにナポレオンは通常会戦前に兵力を集結するに勉めた。もちろん常にそうではなかつたので、例えば一八〇六年の晩秋戦、一

八〇七年アルレンスタインに向う前進、およびフロイシュ、アイロウ附近の会戦、一八〇九年レーゲンスブルグ附近に於けるマッセナの使用、一八一三年バウツェン会戦に於けるネーの使用等は一部または有力なる部隊を会戦場に於て主力に合する事を計つたのである。しかしその場合もフロイシュ、アイロウでは各個戦闘を惹起して形勢不利となり、またバウツェンでも統一的效果を挙げる事は出来なかつた。それはナポレオン当時の軍隊は通信

可能と一般に信ぜられ、また軍事の進歩も甚し商工業の急激なる進歩は長期戦争は到底不可能と一般に信ぜられ、また軍事の進歩も甚

行し得なかつた事が多い。モルトケ元帥は一八九〇年議会に於ける演説に於て「将来戦は七年戦争または三十年戦争たる事無きにあらず」と述べている。しかし商工業の急激なる進歩は長期戦争は到底不可能と一般に信ぜられ、また軍事の進歩も甚

モルトケ参謀総長自身の高級将校、幕僚教育に依り戦略戦術の思想が自然に統一せらるるに至つた結果、分進合撃すなわち会戦地集結が作戦の要領として賞用せらるるに至つた。しかしモルトケも必ずしも勇敢にこれを実行し得なかつた事が多い。モルトケ元帥は一八九〇年議会に於ける演説に於て「将来戦は七年戦争または三十年戦争たる事無きにあらず」と述べている。しかし

不完全で一々伝騎に依らなければならぬし兵団の独立性も充分でなかつた結果、自然会戦前兵力集結主義としなければならなかつたのである。モルトケ時代は既に電信採用せられ、鉄道は作戦上最も有利な材料となり、かつまた兵力増加、各兵団の独立作戦能力が大となつたのみならず、プロイセンの将校教育の成果挙げ、特に一八一〇年創立した陸軍大学の力と

離する事があつてもこれを中央に近接せしめる。若し何らかの事情に依り翼が中央から分離するに、先遣せる騎兵は敵の背後に迫る。若し何らかの事情に依り翼が中央から分離する事があつてもこれを中央に近接せしめる。若し何らかの事情に依り翼が中央から分離する事があつてもこれを中央に近接せしめる。

「カンネの根本形式に依れば横広なる戦線が正面狭小で通常縦深に配備せられた敵に向い前進するのである。張出せる両翼は敵の両側に向い旋回し、先遣せる騎兵は敵の背後に迫る。若し何らかの事情に依り翼が中央から分離する事があつてもこれを中央に近接せしめる。

「カンネの根本形式に依れば横広なる戦線が正面狭小で通常縦深に配備せられた敵に向い前進するのである。張出せる両翼は敵の両側に向い旋回し、先遣せる騎兵は敵の背後に迫る。若し何らかの事情に依り翼が中央から分離する事があつてもこれを中央に近接せしめる。

「カンネの根本形式に依れば横広なる戦線が正面狭小で通常縦深に配備せられた敵に向い前進するのである。張出せる両翼は敵の両側に向い旋回し、先遣せる騎兵は敵の背後に迫る。若し何らかの事情に依り翼が中央から分離する事があつてもこれを中央に近接せしめる。

「カンネの根本形式に依れば横広なる戦線が正面狭小で通常縦深に配備せられた敵に向い前進するのである。張出せる両翼は敵の両側に向い旋回し、先遣せる騎兵は敵の背後に迫る。若し何らかの事情に依り翼が中央から分離する事があつてもこれを中央に近接せしめる。

ルーデンドルフにより最もよく実行せられた
 する。タンネンベルグ会戦は彼の理想が高弟
 た。外国人の私も涙なくして読まれぬ心地が
 は「吾人の右翼を強大ならしめよ！」であつ
 ばならぬ。彼が臨終に於ける囁語（うわごと
 ため止むに止まれぬ彼の意気は真に壮とせね
 ならぬが、速戦即決の徹底を要したドイツの
 おる有様である。危険を伴うものと言わねば
 てを自己の理想の表現のために枉（ま）げて
 く主観的で歴史的事実に拘泥する事なく、総

とは言われぬ。彼の著述した戦史研究等も全
 熱狂的努力を払った。彼の思想は決して堅実

た後、同時に包囲攻撃のため前進せしむる如
 き事なく、翼に近接最捷路を経て敵の側背に
 迫らねばならぬ」
 要するに平凡な捷利に満足することなく、
 重大な危険を顧みず敵の両側を包囲し絶大な
 兵力を敵の背後に進めて完全に敵全軍を捕捉
 殲滅せんとする「殲滅戦」への徹底である。

彼はこの思想を全ドイツ軍に徹底するため

のである。

彼が参謀総長として最後の計画であつた一九〇五年の対仏作戦計画は彼の理想を最もよく現わしている。ベルダン以東には真に僅少の兵力で満足して主力をオアーズ河以西に進め、ラフェール、パリ間には十個軍団を向けパリは補充六個軍団で攻囲し、更にその西南方地区より敵主力の背後に七個軍団を迂回して全仏軍を捕捉殲滅せんとするのである。殲滅戦の徹底と見るべきである。

第八節 第一次欧州大戦

ドイツで殲滅戦が盛んに唱道せられ、決戦戦争への徹底を来たしている時、日露戦争、南阿戦争は持久戦争の傾向を示したものであるが、それらは皆殖民地戦争のためと簡単に片づけられた。もちろん土地の兵力に対する廣大と交通の不便が両戦争を持久戦争たらしめるを得ざらしむる原因となつたのであるが、両戦争を詳細に観察すれば正面突破の至難が

観破せられる。これは欧州大戦の持久戦争となる予報であったのだ。ドイツはこの戦争の教訓に依り重砲の増加に努力した。着眼は良かつたが、まだまだ時勢の真相を把握するの明がなかった。

第一次欧州大戦開始せられると、殖民地戦争の経験に富むキチナー元帥は、戦争は三年以上もかかるように言うたのであるが、一般の人々は誰もが戦争は最短期間に終るものと考え、殊にドイツではクリスマスはベルリンでと信じ、軍隊輸送列車には「パリ行」と兵士どもが落書したのである。

しかるに破竹の勢いでパリの前面まで侵入したドイツ軍はマルヌ会戦に破れて後退、戦線はスイスから北海に及んで交綏状態となり東方戦場また決戦に至らないで、遂に万人の予想に反し四年半の持久戦争となった。

一九一四年のモルトケ大将の作戦は一九〇五年のシュリーフェン案に比べて余りに消極的のものであった。即ちシュリーフェンが一

たように思っていた人が多いうようであるが、同盟側の軍備は連合側より遙かに優越しているに迷わされていた。日本知識階級は開戦頃のだしく兵備を掣肘する。英国側の宣伝に完全更に陸軍省と大蔵省、政府と議会の関係は甚だしく兵備を掣肘する。英国側の宣伝に完全に迷わされていた。日本知識階級は開戦頃同様に思っていた人が多いうようであるが、

前ドイツの政情は満州事変前の日本のそれに非常に似ていたのである。世は自由主義政党的勢力強く、参謀本部の要求はなかなか陸軍省の賛成が得られず（しかも参謀本部の要求も世間の風潮に押されて誠に控え目であった、更に陸軍省と大蔵省、政府と議会の関係は甚だしく兵備を掣肘する。英国側の宣伝に完全

か思うように行かなかった。第一次欧州大戦どしどし増加するに反してドイツ側はなかなか思うように行かなかった。第一次欧州大戦ある。シユリーフェン引退後、連合側軍備はの右翼がパリにすら達しなかったのは当然である。ドイツ軍力は合計約二十一軍団に過ぎない。ドイツ軍に用いた攻勢翼である第一ないし第四軍の兵力は合計約二十一軍団に過ぎない。ドイツ軍の右翼がパリにすら達しなかったのは当然である。

軍団半、後備四旅団半、騎兵六師団しか用いなかったメッツ以東の地区に八軍団、後備五旅団半、騎兵六師団を使用し、ベルダン以西に用いた攻勢翼である第一ないし第四軍の兵力は合計約二十一軍団に過ぎない。ドイツ軍の右翼がパリにすら達しなかったのは当然である。

実際は同盟側の百六十七師団に対し連合側は二百三十四師団の優勢を占めていたのである。同盟側の軍備拡張は露、仏のそれに遥かに及ばなかった。

シュリーフェンの一九一二年私案は仏国側の兵力増加とその攻勢作戦（一九〇五年頃は仏国が守備に立つものとの判断である）を予想して故に先んじてアントワープ、ナムールの隘路通過は期待し難く、従って最初から敵翼の包囲は困難で一度敵線を突破するを必要

と考え、全正面に対し攻撃を加えるを必要（一九〇五年案ロートリンゲン以東は守勢）とした。これがため兵力の大増加を必要とし、全既教育兵を動員し、かつ師団の兵力を減ずるも兵団数を大増加すべしと主張した。もちろん主力は徹底的に右翼に使用する。

シュリーフェンは退職後も毎年作戦計画の私案を作り、クリスマスには必ず参謀本部のクール将軍に送り届けたのである。日本軍人もって如何となす。

案を歪曲したものと
して甚だしく攻撃せられ

であつたと信ずる。

既教育兵の完全動員に先ず重点を置かるべき

に大切なのはシュリーフェンの主張の通り全

団の増加は固よりよろしいが、応急のため更

企図した形跡を見遁す事が出来ない。平時兵

詰まりの人事行政打開に重点を置いて軍拡を

対する熱情が充分でなく、ややもすれば行き

しかしドイツ軍部もこの頃は国防の根本に

がるところである。

たろうとドイツ参謀本部の人々が常に口惜し

れたならばマルヌ会戦はドイツの勝利であつ

らの軍拡が政治の掣肘を受けず果敢に行なわ

て十一万七千の増加が議会を通過した。これ

は参謀本部が平時兵力三十万の増加を提案し

若干の軍備拡張を行ない、殊に一九一三年に

露の軍備充実に刺戟せられて一九一一年以来

陸軍もモロッコ事件やバルカン戦争並びに仏

自由主義政治の大勢に押されていたドイツ

財政的準備以外は何ら見るべきものが無かつ
 しかしそれも固より大勢を動かすに至らず、
 至ったのは遅れて一九一二年頃からである。
 於て経済的動員準備の必要が唱道せらるるに
 を感知した事である。言論界、殊に軍事界に
 要するは、作戦計画の当事者が最も早くこれ
 常な示唆を与えるものと信ずる。特に注意を
 る。この事は人間社会の事象を考察するに非
 持久戦争への予感が兆し始めておったのであ
 謀本部の設立を提議している。無意識の中に

たとも見るべき年にドイツ参謀本部は経済参
 年、換言すれば決戦戦争へ徹底の頂点に在っ
 一九〇六年すなわちシュリーフェン引退の
 用していた事を見逃してはならない。
 撃破後英国を屈し得たか否かは別問題である。
 しかしモルトケ案の後退には時代の勢いが作
 ドイツは第一次欧州大戦も決戦戦争を遂行し
 て仏国を属し戦勝を得たかも知れない（仏国
 ーフェンが当時まで参謀総長であつたならば
 る。これはたしかに一理がある。若しシュリ

モルトケ大將はモルトケ元帥の甥で永くそ

家は封鎖を破る『三四―五頁〕

死亡した！』（アントン・チシュカ著『發明

く済み、七十五万人のドイツ人は飢餓のため

結局資金は支出されず、予算編成は滞りな

と。

算編成を更に一層困難ならしむるであろう』

ある。これは既に困難なる一九一五年度の予

物を国庫の損失補償の下に売却すると同じで

に五百万マルクの支出を承諾するならば、穀

戦争に至らしめないであろう。若し余が貴下

を申し送った。曰（いわ）く『吾人は決して

大臣はデルブリュックに書簡をもってこの由

支出する事を肯（がえ）んじなかつた。大蔵

五百万マルクを必要とし、大蔵大臣はこれを

庫を創設せんとした。しかしながらこれには

物が在ったため、急遽ドイツ帝国穀物貯蓄倉

ルブリュックは当時ロツテルダムに多量の穀

一九一四年七月初旬、内務次官フォン・デ

た。

の隘路を頻りに苦慮するが、それより前にリ
 にシュリーフェンがアントワープ、ナムール
 べ、特に戦史課長フェルスター中佐の著書等
 うたところ、何故かと謂うから色々理由を述
 オランダの中立を犯す決心であつたらうと問
 に苦しめてやった。ある日シュリーフェンは
 らないのでこちらから研究問題を出して相当
 講義する要領で問題等を出して来たが、つま
 ことにした。同中佐は最初陸大で学生にでも
 共同して戦史課のオットー中佐の講義を聴く

戦史の研究を志し、北野中将（当時大尉）と
 るものであつた。私がドイツ留学中少し欧州
 くオランダの中立をも躊躇する事なく蹂躪す
 シュリーフェンの計画はベルギーだけでな
 よりも敏感に感受せしめたらしい。
 してモルトケをして時代性を参謀本部の人々
 シュリーフェンの弟子ではない。これがかえ
 の勤務も甚だ短かつた。参謀総長になつたの
 はカイゼルとの個人関係が主であつたらしい。
 の副官を勤め、陸軍大学出身でなく参謀本部

「#底本214頁上に地図あり」

エージユ、ナムールの大隘路があるではないか、それを問題にしないのはオランダの中立侵犯の証拠であると詰（なじ）り、フェルスタ―課長に聞いて来るように要求した。ところで次回にオット―中佐は契約書にサインを求めから読んで見ると「貴官と戦史を研究するがドイツの秘密をあばく事等をしてしない」と云うような事が書いてあった。オット―中佐はその知人に「日本人は手強い」とこぼしていたそうである。フェルスタ―中佐の名著

『シュリーフェンと世界戦争』の第二版にマ―ス川渡河強行のことを挿入した（四一頁）のはこの結果らしい。今でも愉快な思い出である。フェルスタ―氏は更にその後アルゲマイン・ツァイツングに「シュリーフェン伯はオランダも暴力により圧伏せんと欲したりや」という論文を出した。結局オランダを蹂躪するのではなく、オランダと諒解の上と釈明せんとするのである。

ところが一九二二年モルトケ大将の細君が
 モルトケ大将の『思い出、書簡、公文書』を
 出版しているのを発見した。それを読んで見
 ると一九一四年十一月の「観察および思い出
 に」：：シュリーフェン伯は独軍の右翼をも
 って南オランダを通過せんとした。私はオラ
 ンダを敵側に立たしむる事を好まず、むしろ
 我が軍の右翼をアーヘンとリンブルグ州の南
 端の間の狭小なる地区を強行通過する技術上
 の大困難を甘受する事とした。この行動を可
 能ならしむるためにはリュッチヒ（リエージ
 ュ）をなるべく速やかに領有せねばならない。
 そこでこの要塞を奇襲により攻略する計画が
 成立した」と記している。
 オランダの中立を侵犯しないとせば独軍の
 主力軍がマース左岸に進出するのにオランダ
 国境からナムール要塞の約七十キロを通過せ
 ねばならず、この間にファイの止阻堡とベルギ
 ーの難攻不落と称するリエージュの要塞があ
 る。リエージュは欧州大戦で比較的簡単に（

望したものでらしい。ある年の参謀旅行で、敵
 マース右翼の敵の背後に迫るような作戦を希
 わな）に敵を誘致して一撃を与え、主力は
 ツツ要塞を利用し、いわゆるニードの「袋（

そこでもルトケ大将は、敵の攻撃に対しメ
 これも忍びない。敵の攻撃に対しメ
 持久戦争への予感のあったモルトケとしては
 ばならないとの断定をなし得るのであるが、

は非常に高まっている。もちろん決戦戦争に
 徹し得れば、一時これを犠牲とするも忍ばね
 ザール鉱工業地帯のドイツ産業に対する価値
 攻撃を企図している事は大体諜報で正確だと
 信ぜられて来た。ところがロートリンゲンの

敵は既にアルザス・ロートリンゲンに対し
 大煩悶をしたのを充分察してやらねばならぬ
 ース左岸への進出に、今日我らの考え及ばぬ
 えているが、モルトケとしては国軍主力のマ
 な原因である）陥落したため、世人は軽く考
 ンドルフが偶然この攻撃に参加した事が有力
 それもこの計画の責任者とも云うべきルーデ

がロートリンゲンに突進して来るのに、作戦計画の如く主力をマース左岸に進めんとする専習員の案に対し、モルトケは「その必要はない。マース右岸の地区を敵の側背に迫るべきだ」と講評したとの事である。

「#底本216頁右上に地図あり」

しかし無力なモルトケが、断然シュリーフエン伝統の大迂回作戦を断念する勇氣はあり得ない。参謀本部の空気がそれを許すべくもない。また実際モルトケもそこまで徹底した

識見は無かつたであろう。永年の伝統に捉われない自由さから、他の人々より持久戦争に對する予感強かつたのだが、さりとして次の時代を明確に把握する事も出来なかつたろう。モルトケを特に凡庸の人というのではない。ナポレオンの如く、ヒットラーの如く特に幾億人の一人と云われる優れた人でなければ無理な事である。

一九一四年八月十八日頃のモルトケの煩悶はこの辺の事情を見透せば自ら解るではない

特に一九一五年ルーデンドルフ等の東方に於
 た。ルーデンドルフ一党からは一九一四年、
 て頽勢の挽回に努力したが遂に成功しなかつ
 大抜擢である。ファルケンハインは西方に於
 なった。彼は軍団長の経験すらなき新参者で
 相ファルケンハインが参謀総長を兼ねる事に
 モルトケ大将はマルヌに敗れて失脚し、陸
 ねばならぬ。
 理である事が判ったであろう。時の勢いと見
 ったのは一人のモルトケを責める事は少々無

ル又会戦の結果となった。しかし事ここに至
 ったろう。
 不徹底なる計画、不徹底なる指揮は遂にマ
 の空気が許さないと云うような彼の心境であ
 集中は終る。大迂回作戦を躊躇する事は全体
 り出来る。敵の攻勢を待とうか、待ちたいが
 エージユはその間に陥落する。集中は予定通
 ードの「袋（わな）」にかかるかどうか。リ
 して来た。しかしその態度が慎重でどうも二
 か。敵は予期した通りロートリンゲンに侵入

ツク教授と頻りに論争したのであるが、特に
 いる。殲滅戦略、消耗戦略問題でデルブリュ
 計画は皆殲滅戦略に基づくものだと言主張して

ものである。
 ルーデンドルフは潜水艇戦術その他彼の諸
 ものである。
 る。天意はなかなか人智をもっては測り難い
 に徹底した事が正しかったとも云えるのであ
 可の平和より彼らのいわゆる「英雄的闘争」
 ツの生まれる原動力をなした事を思えば生半
 ベルサイユ条約の強制が、今日ナチス・ドイ

「#底本218頁右上に地図あり」
 しかしあのドイツの惨敗、あの惨忍極まる

ある。
 争を行ないつつある事を悟り得なかったので
 のものであると断定して、彼らが既に持久戦
 即ちナポレオン以後は決戦戦争が戦争の唯一
 に対する明確な見解を持たなかったのである
 一党はデルブリュックの言う如く戦争の本質
 対する明確な見解を持たなかったのである
 ああ惨敗となったのである。ルーデンドルフ
 こうなった以上は最後まで」と頑張って遂に

ランデルン攻勢とサンカンタン攻勢を比較す
 攻勢方面につき、クール大将の提案であるフ
 ルーデンドルフが一九一八年の三月攻勢の
 トルゴウ会戦と類を同じゅうする。

戦争の末期に困難を打開せんとして断行した
 なったに過ぎない。フリードリヒ大王が持久
 戦争の末期に困難を打開せんとして断行した
 即ち、持久戦争中の一節として殲滅戦略を行
 を強制せんとする決意ではなかったのである

はあの戦略を最後まで徹底して実行し、大陸
 の敵主力を攻撃し、少なくとも仏国に決戦戦争
 減戦略と云い得るにせよ、ルーデンドルフに
 の断行と疾呼する。その軍事行為の一節を殲
 勢を試みたルーデンドルフはこれを殲滅戦略

「#底本219頁左上に地図あり」
 露国の崩壊によつて一九一八年西方に大攻
 て殲滅戦略とは言い難い。
 我らの考えならば潜水艦戦は厳格な意味に於
 を強行したから殲滅戦略だと言うらしいが、
 ある。政治の干渉を排して無制限の潜水艇戦
 ルーデンドルフは両戦略の定義につき曖昧で

なったその第一原因は兵器の進歩である。機
 万人の予期に反して四力年半の持久戦争と
 イユの屈辱となったのである。
 ったに拘らず、遂に行く所まで行ってベルサ
 も実は自信を失い政治はもちろん信念はなか
 は徹底的に」と云う主張に引きずられ、軍部
 かくてドイツは統帥部の「こうなった以上
 にまで重大な影響を与えたのである。
 悟り得なかつた事が、一九一八年攻勢の指導
 く異なつた戦争状態になつてもなおそれらを
 関する見解の固定が、開戦前に予期したと全
 再度言うが、ドイツ軍事界の戦争の性質に
 来たしたのである。
 かえつて新しき占領地区の左翼方面に不安を
 にも達し得ず、大規模の運動戦にも転じ得ず
 なかつた」と云うておる。結局彼は英仏海峡
 勢頓挫につき「運動戦に到達することが出来
 攻勢は遂に頓挫してしまつた。彼は後に、攻
 転じようとしたのである。しかしながらこの
 ソンム南岸に兵を進め、更に大規模な作戦に

の弱小国に対して迅速に決戦戦争を強行し得る。第二、第二次欧州大戦でドイツのい

第九節 第二次欧州大戦

持久戦争は勢力ほぼ相伯仲する時に行なわれるのである。第二次欧州大戦でドイツのい

フリードリヒ大王の使った兵器も、ナポレオンの使用したものもほとんど同一であったのであるが、社会革命が軍隊の本質を変化し、

これはフランス革命で持久戦争から決戦戦争になったのとは状態を異にしている。即ち

関銃の威力は甚だ大きく、特に防禦に有利である。堅固に陣地を占め、決意して防禦する

敵を突破する事は至難である。これに加うる

に兵力の増大が遂に戦線は海から海におよび

迂回を不可能にした。突破も出来なければ迂

回も不可能で、遂に持久戦争になったのである。

。

。

た事はもちろん驚くに足りない。英仏軍と独軍はマジノ、ジークフリートの陣地線の突破はお互にほとんど不可能で、結局持久戦争になるものと常識的に信ぜられていた。

しかるに一九四〇年五月十日、独軍が西方に攻勢を開始すると疾風迅雷、僅かに七週間で強敵を屈伏せしめて、世界戦史上未曾有の大戦果を挙げ、仏国に対しても見事な決戦戦争を強行し得たのである。

五月十日攻勢を開始すると、先ず和（オランダ）、白（ベルギー）、仏三国の主要飛行場を空襲して大体一両日の中に制空権を得て主として飛行機と機械化兵団の巧妙な協同作戦に依って神速果敢なる作戦が行なわれた。殊に民族的にも最も近いオランダには内部工作が巧みに行なわれていたらしく、空輸部隊の大胆な使用と相俟って五日間にこれを屈伏せしめる事が出来た。

ベルギー方面に侵入した独軍また破竹の勢いでマース川の大障害を突破して西進、特に

アルデンヌ地方に前進した部隊は仏軍の意表に出でて五月十日既にセダン附近に於てマースを渡河し、マジノの延長線を突破したのである。

「#底本223頁上に地図あり」

シュリーフェン以来独軍の主力は右翼にあるものと定まっていたのに、今日はアルデンヌの錯雑地を経て一挙北部フランスに突入した。

奇襲的効果は甚大であった。セダンの破壊口からドイツ軍は有力な機械化兵団を先頭として突入し、一九一八年三月攻勢にルーデンドルフが考えたようにエーヌ、オアーズ、ソム等の河や運河を利用して左側背の掩護を確実にしながら主力は一路西進、たちまちアブヴィルに達した。同地では仏軍の一部が悠々錬兵場で訓練中であつたとの事である。いかに独軍の進撃が神速であつたかを物語っている。

かくてフランデルとアルトアにあつた英白

は充分慎重な観察が必要である。
 来せるやを信ぜしめる。しかしそれについて
 争の時代は過ぎ去り、再び決戦戦争の時代
 到来せるやを信ぜしめる。しかしそれについて

六月二十五日休戦成立した。
 ドイツの作戦はまるで神業のよう
 争の時代は過ぎ去り、再び決戦戦争の時代
 到来せるやを信ぜしめる。しかしそれについて

有力なる部隊は撃滅せられその一部が辛うじ
 て本国に逃げ帰った。

の方面の作戦を終了した。
 生じ、六月四日にはダンケルク陥落、遂にこ

軍のおよび仏の有力部隊は瞬く間に包囲せられ
 五月二十二日頃にはその運命が決定した。独
 軍の包囲圏は刻々縮小せられ、形勢非なるを
 見てとった英軍は匆匆（そうそう）本国への
 退却を開始した。この状況を見たベルギー皇
 帝は五月二十八日無条件で独軍に降伏した。

殊に自由主義国フランスの怠慢はマジノ線
 方式に出て、フランス軍の意表に出たのであ
 接なる協力に依って築城の中間地を突破する
 ドイツ軍は空軍と戦車、それに歩工兵の密

はドイツの真剣なる準備に對抗する迫力を欠
 いていたのである。
 を主として専ら火砲の効力に對抗する事だけ
 を考えて、攻者の新兵器に対する考慮が充分
 払われていなかった。即ち自由主義フランス

マジノ線の築城編成は第一次欧州大戦の経験
 ていた。しかるに独軍占領後の研究に依れば
 マジノ線を仏国人は難攻不落のものと思

備は戦車の準備に比して容易な事である。
 戦車が敵陣地を突破し得てもその突破口が
 敵に塞がれ、続行して来る歩兵との連絡を絶
 たれる時は、戦車は間もなく燃料つきで立往
 生する。であるから真に近代的に装備せられ
 決心して守備する敵陣地の突破はなかなか容
 易の事ではない。
 マジノ線を仏国人は難攻不落のものと思

歩、戦車の発達も充分準備し決心して戦う敵
 成功しなかったらしいのである。空軍の大進
 面に衝突した独軍の攻撃はなかなか簡単には
 今度の作戦でもフランデル方面に於て敵の正
 もいかに防禦力の大であるかを示している。
 く優秀装備のソ軍の猛攻を支えた事は今日で
 あの極めて劣勢なフィンランドが長時日良

運動戦となるや独軍の極めて優れた空軍と機
 械化兵団が連合軍の心胆を奪って大胆無比の
 作戦をなし遂げ得た。

ドイツ軍は実にこの虚をついたわけである

の北端をベルギー国境に託して自ら安心し、
 迂回し得る陣地であった事である。いわゆる
 マジノ延長線は紙上計画に止まり大体有事の
 日、工事に取りかかる考えであったが、開戦
 後は労働力の不足等の関係で大して工事を施
 されていなかった。またマジノ線に接続して
 ベルギーがリエージュを主体としてマジノ線
 に準じた築城を完成する約束であったが、事
 実は大して工事が行なわれていなかった。

線の突破は至難である事を示している。

第一次欧州大戦では仏、白の戦闘意志は英国のそれに劣らぬものであったが、今回は余程事情を異にしていたらしい。フランスの頽廢的気分、支配階級の「滅公奉私」の卑しむべき行為はアンドレ・モローアの『フランス敗れたり』を一読する者のただちに痛感するところである。

英国の利己的行為は仏、白との精神的結合を破壊していた。数年前ドイツがライン進駐

を決行した時、仏国が断然ベルサイユ条約に基づいてドイツに一撃を加うべく主張したのに対し英国は反対し、その後も作戦計画につき事毎に意見の一致を見なかつたと伝えられる。真に二国が衷心一致してドイツの進攻に抗する熱意があつたならば独、自国境の築城は必ず完成されているべきであつたし、今後の作戦についても更に緊密な協同行なわれただであらう。

戦略的に見れば戦力の著しく劣つた仏国は

特にこの際我が国民に深き反省を要求する
 のである。
 史上無比の輝かしき決戦戦争を遂行せしめた
 したのでなく、両方の力の著しき差があつた
 力の争いではない。即ち時代が決戦戦争とな
 国との対立であつて、断じて相匹敵する戦争
 総力を極度に合理的に集中運用せる全体主義
 り完全にしかも深き感激の下に統一せられ、
 感激なき自由主義国家と、鉄の如き意志に依
 かく考えて来る時は無準備でしかも統一と
 フランスの戦意喪失となつたのは当然である
 あつた。英国の態度はベルギーの降伏となり
 る手段を尽してその陸軍を大陸に止むべきで
 戦うならば本国は全く海軍に一任し、あらゆ
 て本国へ退却の色を見せる。若し英国が真に
 や、利己主義の英国はたちまち地金を現わし
 め、ドイツの電撃作戦に依つて包圍せらるる
 ない。止むなく有力な主力軍をベルギーに進
 を欲したのである。しかし政略はこれを許さ
 国境で守勢をとるべきであり、軍当局はこれ

ためには英仏海峡の制海権が絶対に必要であ
 国に対し殲滅戦略、即ち上陸作戦を強行する
 になる公算が依然極めて大きい。ドイツが英
 ては殲滅戦略の続行が出来なくなり持久戦争
 を完遂したドイツも、海を隔てた英国に対し
 今日フランスに対しては輝かしき決戦戦争

めねばならぬ。
 速やかに我らは強力なる統制の下に世界無
 比の急速度をもって我らの競争力を向上せし
 因である。

に隔りを見た事がその後の東亜不安の根本原
 ていたが、僅かに数年のうちに彼我戦力の差
 である。満州事変頃は両国の競争力相伯仲し
 作戦準備につきソ連との間に充分経験した事
 のである。この事は満州事変後我が国が極東
 権確立後僅々数年でかくの如き劣勢に陥った
 切れなかつた貧乏国ドイツに対し、ナチス政
 富裕国英仏が、戦後の疲れなお医（いや）し
 備に対する能力の驚嘆すべき差である。老大
 のは、自由主義国家と全体主義国家の戦争準

器の進歩は攻防両者に対する利益は交互的に
 決戦戦争が行なわる事となった。しかし兵
 略が採用せられ、その威力の及ぶ範囲に於て
 が生まれ、職業軍時代の病根を断つて殲滅戦
 要するにフランス革命に依つて国民的軍隊

決戦戦争は不可能のようである。
 て、今日の発達した空軍でもなお空軍による
 昨年九月以降のロンドン猛爆の結果より見
 能否の第一分岐点である。

下にあるらしい。今後果してドイツがこの海
 状態である。英仏海峡は依然英国海軍の支配
 機による艦船の爆沈は潜水艦の威力に及ばぬ
 状態である。英仏海峡は依然英国海軍の支配
 下にあるらしい。今後果してドイツがこの海

難は極めて大きい。制海権のため海軍力の劣
 勢なドイツは主として空軍に頼らねばならぬ
 我らは常識的に、仏国海岸を占領したなら空
 軍の優勢なドイツは英近海の海運に大打撃を
 与え、英国はそれだけでも屈伏するだろうと
 考えていたが、今日までの結果を見ると飛行

心を攻撃する事に依って敵国を屈伏せんとす
 破せんとする努力と、更に進んで敵政治の中
 方破壊と直接軍隊の攻撃に依って敵陣地を突
 軍の進歩甚だしく、これに依って敵軍隊の後
 争から脱け出そうとあせったが、大戦後は空
 敵正面突破のため相当の威力を示して持久戦

たのである。
 毒ガス、戦車等第一次欧州戦争の末期既に
 を守備するに足る兵員を得るようになり、遂
 に迂回を不可能として持久戦争の時代に入っ

大なる欧州の諸国家では国軍をもつて全国境

る。

国民皆兵の徹底が兵力を増大し、人口密度
 思想を生んだのはこの時代的要求の結果であ
 来たドイツが、シュリーフェンの「カンネ」
 し、しかも決戦戦争の要ますます切となって
 込みがあつたのである。正面突破の困難増大
 でも兵力少ない時代は敵翼を迂回包囲する見
 利となり逐次正面の突破を困難にした。それ
 現わるる傾向があるものの、大勢は防者に有

来の時である。
 決戦戦争を強制し得る時は、世界最終戦争到来の時代である。地球の半周の距離にある敵に対し入れない。地球の半周の距離にある敵に対しでなく敵国中心の空中襲撃に依る事は疑いを入れない。地球の半周の距離にある敵に対し決戦戦争を強制し得る時は、世界最終戦争到来の時である。

決戦戦争は、英、独の間に於ける実験により今日なお殆んど不可能である事を実証した。しかし空軍主力の時代が来れば初めて海も持久戦争の原因とはならない。空軍の徹底的発達がこの決戦戦争を予告し、それも地上作戦でなく敵国中心の空中襲撃に依る事は疑いを入れない。地球の半周の距離にある敵に対し決戦戦争を強制し得る時は、世界最終戦争到来の時である。

第一節 会戦の二種類

戦争の性質に陰、陽の二種あるように、会戦も二つの傾向に分ける事が出来る。

1 最初から方針を確立し一挙に迅速に決戦を求める。(第一線決戦主義)

2 最初は先ず敵を傷める事に努力し機を見て決戦を行なう。(第二線決戦主義)

両者を比較すれば、

「#ここから2段組、上段」

第一線決戦主義

一、将帥は決戦の方針を確立して攻撃を行なう。

二、第一線の兵力強大、予備は少し。

三、最初の衝撃を最も猛烈に行なう。

四、偶然に支配せらるる事多く奇効を奏するに便なり。

「#ここで2段組、上段終わり」

「#ここから2段組、下段」

第二線決戦主義

戦方式に相通ずるものが有るを見るであろう。で、ローマ人は実業に秀でている民族性と会

「#底本 2 3 2 頁右上に図あり」
 蓋（けだ）しギリシヤ人は哲学や芸術に秀
 現実主義的である。
 主義は理想主義的であり、第二線決戦主義は
 二線決戦主義を好んだのである。第一線決戦

損害を与え、敵を攪乱し、適時機を見て決戦
 を行なわんとするのである。すなわちギリシ
 ヤ人は第一線決戦主義に傾き、ローマ人は第
 二線決戦主義を好んだのである。第一線決戦

然である。
 古代、兵器が極めて単純であった時代は、
 国民性の会戦指導要領に及ばず影響は比較的
 大であり得た訳である。ギリシヤ人は強大な
 大集団を作りこれをファランクスと名付けた。
 この大集団に依る偉大な衝力に依り一挙に決
 勝を企図したのである。これに対しローマ人
 はレギオンと称し比較的小さな集団を編制し
 た。これは行動の自由を利用して巧みに敵に

ステルリッツの如く第一線決戦を企図した事
 るものと云うべきである。ナポレオンもアウ
 将帥の性格も同じ意味に於て個性を發揮す
 つある事を見るのである。
 らず軍事の万般にわたり相当の影響を与えつ
 今日でもなお民族性が会戦指揮方針のみな

軍の左側背に殺到せんとしたのである。
 の目的に応じて戦略展開を行ない、一挙に敵
 イツは主決戦場を右翼に決定、強大兵団をこ
 を整えているのに対し、ギリシヤ人に近いド

戦況に応じて主決戦場を決定せんとする態勢
 敵地に侵入せしめ後方に第四軍等を集結し、
 民族に近いフランスは第一第二軍をして先ず

田中寛博士の『日本民族の将来』に依れば
 古代ギリシヤ人は今日のギリシヤ人と異なり
 北方民族であった。
 今日段々高度の武装をなし民族性の影響は
 昔日に比し大となり難いのであるが、第一次
 欧州大戦初期の両軍作戦を見るに、固より他
 にも色々の事情はあったであろうが、ローマ

究が盛んになった。一九〇二年のボンナール
 スに於てもモルトケ、クラウゼウイツツの研
 七一年独仏戦争に於ける大勝の結果、フラン
 の傾向を示すものと云うべきだ。一八七〇―
 ツツと演繹的であるジヨミニ―は独仏両民族
 の影響を受ける。帰納的であるクラウゼウイ
 に（一四五頁）軍事学もまた当然民族の性格
 の影響を受ける。帰納的であるクラウゼウイ
 上にも同じ傾向となって現われる。
 フオツシュ元帥が伊藤述史氏に言うたよう
 に（一四五頁）軍事学もまた当然民族の性格
 の影響を受ける。帰納的であるクラウゼウイ
 ツツと演繹的であるジヨミニ―は独仏両民族
 の傾向を示すものと云うべきだ。一八七〇―
 スに於てもモルトケ、クラウゼウイツツの研
 究が盛んになった。一九〇二年のボンナール

「#底本 2 3 3 頁左上に図あり」
 あったとは言え必ずしも偶然とのみ言えない。
 リードリヒ大王を出したことは時代の勢いで
 また北方民族から第一線決戦の最大名手フ
 か。
 決戦の最大名手を出した事は面白いではない
 とするところである。地中海民族から第二線
 れども、第二線決戦はナポレオンの最も得意
 自然第二線決戦主義を有利とするのであるけ
 はある。また当時の縦隊戦術は後述する如く

するに力を払っている。
 ミニ―の爲した如くナポレオンの方式を発見
 る理解に大なる障害を爲した」と論じ、ジヨ
 普及せられ、ナポレオンの戦闘方式の完全な
 ウゼウイツツの主義は我が陸軍大学で絶えず
 行なつた。：：兎に角一八八三年以来、クラ
 陸軍大学でクラウゼウイツツにつき大講演を
 んだ。一八八三―八四年にはカルドー少佐が
 次いでその源泉であるクラウゼウイツツに及
 ル―メー、シエルフ、メツケル等が研究され

盛んで、先ずホーエンローネー、ゴルツ、ブ
 方式』には「一八七〇年以後は普軍に倣う風
 二三年発行カモン將軍の『ナポレオンの戦争
 イツツの排撃派に勢いを与えたようで、一九
 で、殊に第一次欧州大戦の勝利はクラウゼウ
 ンスでは依然ジヨミニ―流の思想が相当有力
 排斥すべきもの」と言っている。しかしフラ
 えん）せる戦法の系統は謬妄、危険で絶対に
 ミニ―の論述する如き一般原則から敷衍（ふ
 『独仏高等兵学の方式について』には「ジヨ

進歩に依る当時の武力の性格の影響は更に徹
る作用も前述の如く軽視出来ないが、兵器の
民族性、将帥の性格が会戦指揮方針に与え

第三節 歴史的觀察

の識見を持たねばならぬ。
所大所より觀察して公正なる判断を下し独自
てはよく日本民族の総合的特性を活用し、高
配している事言を俟（ま）たない。
我ら日本軍人が西洋の軍事学を学ぶについ

ある。クラウゼウイツツの思想は全独軍を支
フライタハはクラウゼウイツツ研究の大家で
に大なる影響を与えなかつた事を喜んでいる

として『ナポレオン』の著者）の研究が独軍
ジヨミニー流であるワルテンプルグ（『将帥
形式的方法を絶対的に好んでいる』と評し、

象を分析するクラウゼウイツツ觀察法よりも
ジヨミニーの演繹（えんえき）法、厳密なる
リングホーフェンは「仏人の思想は戦争の現
ドイツの有名な軍事学者フライタハ・ロ―

持久戦争の時代に於ては、ナポレオンの平凡
 強、ロスバハは三倍の敵を撃破したのである
 っした事はない。有名なロイテンの如きは二倍
 破り、一回といえども著しい優勢をもって戦
 三回で、十回の勝利のうち六回は優勢の敵を
 ばれたのである。大王は十三回の会戦中敗北
 大王時代は寡兵をもって衆を破る事が特に尊
 線決戦のように決定的でない。フリードリヒ
 第一線決戦の特徴として兵力の多寡は第二
 驚嘆せしむる戦功を立てしめたのである。

底的であり、大体は時代性に左右せられる。
 横隊戦術、殊にその末期軍隊の性質に制せ
 られて兵器の進歩と協調も失うに至った後の
 横隊戦術は技巧の末節に走り、鈍重にして脆
 弱であり、特にその暴露した側面は甚だしい
 弱点を成形していた。横隊戦術は第一線決戦
 主義が最も合理的である。殊に当時猛訓練と
 軍事学の研究に依って軍隊の精鋭に満腔の自
 信を持っていたフリードリヒ大王には世人を

ロイテン、ロスバハには及ばない。然しナポ
 イエナでも技術的に見てフリードリヒ大王の
 表的であるアウステルリッツ（第一線決戦）、
 戦中マレンゴはあやしい勝利であり、特に代
 が比較的困難であり、ナポレオンの有名な会
 決戦式に比し第二線決戦式は奇効を奏する事
 と認むべきはドレスデンのみである。第一線
 は三十回の会戦中二十三回は勝利を占め、う
 ち十三回は著しい優勢をもつて戦い、劣勢を
 もつて勝つたのは僅かに三回でしかかも大会戦
 と認むべきはドレスデンのみである。第一線

原則が最も物をいう事となった。ナポレオン
 に敵に優る強大な兵力を集結する戦術一般の
 自然に第二線決戦式となったのである。戦場
 増し、側面に対する感度を緩和した。会戦は
 せられた横隊戦術の矛盾を一擲して強靱性を
 なる、この隊形は傭兵に馴致（じゅんち）
 フランス革命に依つて散兵——縦隊戦術と
 義の必然がそこに存在したのである。
 与え得なかつたのである。消耗戦略、機動主
 なる勝利の程にも戦争の運命に決定的影響を

はますます大胆となるべく唱導鼓吹せられ、
すます拡大せられ、敵の側背を狙う迂回包囲
シユリーフェン時代となると戦闘正面はま

いたのである。

ポレオン時代の第二線決戦の風も当時残って

いたのである。

増加して逐次戦闘正面を拡大して再び横広い
隊形となった結果、自然会戦指揮は再び第一
線決戦主義に傾いて来たが、シユリーフェン

全盛時代までは「緒戦、戦闘実行、決戦」と
会戦時期を三区別していたように、やはりナ

ポレオン時代の第二線決戦の風も当時残って

いたのである。

シユリーフェン時代となると戦闘正面はま
すます拡大せられ、敵の側背を狙う迂回包囲
はますます大胆となるべく唱導鼓吹せられ、

すます拡大せられ、敵の側背を狙う迂回包囲
はますます大胆となるべく唱導鼓吹せられ、
シユリーフェン時代となると戦闘正面はま

いたのである。

ポレオン時代の第二線決戦の風も当時残って

兵器特に撃針銃の採用進歩は散兵の威力を

強烈なる最高統帥の指揮を見なかった。

リーダーヒ大王やナポレオンの会戦のように

するだけで、実行は第一線司令官に委ね、フ

戦争準備によって敵国を撃破した。当時の会

戦は大体第一線兵団を戦場に向う前進に部署

モルトケ元帥は幕僚長で将帥ではない。殊

にモルトケ時代の普国の戦争には皆卓越せる

定的作用を及ぼしたのである。

ランス軍の会戦方針はやや第二線決戦的色彩
 第一線決戦主義に徹底して来た。会戦の方針
 は、既に集中決定の時に確立せられ、敵の側
 背に向い決戦を強行断行するのである。シュ
 リーフェンの「カンネ」の一節に「翼側に於
 ける勝利を希うためには最後の予備を中央後
 でなく、最外翼に保持せねばならぬ。将帥の
 慧眼が広茫数十里に至る波瀾重畳の戦場に於
 て決戦地点を看破した後、初めて予備隊を移
 動するが如き事は不可能である。予備隊は既
 に会戦のための前進に当り、脚下停車場より
 更に適切に云えば鉄道輸送の時から該方面に
 指向せられねばならぬ」と言っており、この
 大軍の会戦への前進はモルトケ元帥の如く単
 に方針のみを与えて第一線司令官の自由に委
 せるのではなく、全軍あたかも大隊教練のよ
 うに「眼を右、触接左」に前進すべき事を要
 求している。丁度フリードリヒ大王の横隊戦
 術を大規模にした観がある。

れるけれども、更に大観すれば三月から八月

の決を見るに至った。

普通に見れば一回の攻勢が一會戦とも言わ

敵の攻勢移転にあつて脆くも失敗、遂に戦争

攻撃は五回にわたって行なわれ、第五回目に

ドイツが最後の運命を賭した一九一八年の

事になる。

なる予備隊の使用に依つて会戦の決定を争う

帯を完全に突破する事は至難で、その後絶大

ちろんであるが、それだけでは縦深の敵陣地

奇襲に依り第一線決戦的に指導せらるる事も

二線決戦主義となつて来た。局部的戦闘では

増して来るに従い、会戦指揮の方針は自然第

々的に拡大した観を呈している。

ところ持久戦争に陥り戦線が逐次縦深を

ル又までの作戦はあたかもロイテン会戦を大

かつたが、兎に角独軍のベルギー侵入よりマ

を帯びていたが（勿論徹底せるものではない、

独軍は第一線決戦主義が極めて明確である。

シュリーフェン案の如く徹底したものではな

かつたが、兎に角独軍のベルギー侵入よりマ

ル又までの作戦はあたかもロイテン会戦を大

々的に拡大した観を呈している。

ところが持久戦争に陥り戦線が逐次縦深を

増して来るに従い、会戦指揮の方針は自然第

二線決戦主義となつて来た。局部的戦闘では

奇襲に依り第一線決戦的に指導せらるる事も

ちろんであるが、それだけでは縦深の敵陣地

帯を完全に突破する事は至難で、その後絶大

なる予備隊の使用に依つて会戦の決定を争う

事になる。

ドイツが最後の運命を賭した一九一八年の

攻撃は五回にわたって行なわれ、第五回目に

敵の攻勢移転にあつて脆くも失敗、遂に戦争

の決を見るに至った。

普通に見れば一回の攻勢が一會戦とも言わ

れるけれども、更に大観すれば三月から八月

に到着せるとき、これを左へ転廻せしめ巧みに

これがため大王は普軍の先頭がベルン村近く

「#底本240頁に地図あり」

察し、その左翼を攻撃して一挙に敵を撃破す

るの決心を固めた。

「#底本240頁に地図あり」

これがため大王は普軍の先頭がベルン村近く

「#底本240頁に地図あり」

察し、その左翼を攻撃して一挙に敵を撃破す

るの決心を固めた。

「#底本240頁に地図あり」

よりロイテン附近に陣地を占領せる敵軍を觀

い転進した。十二月五日大王はジュミーデ山

レージエンより撃攘せんとしブレスラウに向

大王は戦捷の余威を駆って一挙に奥軍をシュ

ロスバハに仏軍を大いに破ったフリードリヒ

としよう。

一、ロイテン会戦

としよう。

としよう。

第一線決戦の名手フリードリヒ大王の傑作

ロイテンと第二線決戦の名手ナポレオンの傑

作リーニの両会戦につき簡単に述べて参考

としよう。

「#底本239頁左上に地図あり」

で最後の勝利を得たのである。

「#底本239頁左上に地図あり」

「#底本241頁に地図あり」

である。

を一翼に集結し一挙に決戦を強要せる好範例

王が三万五千の寡兵をもって六万四千の奥軍を撃破せる大王会戦中の傑作であって、兵力

った。

本戦闘は午後一時より四時過ぎまで継続せら

れたがオーストリア軍の死傷は一万、砲百三十一門、軍旗五十五旒を失い、その捕虜は約

の処置を失い、たちまちにして潰乱するに到る攻撃と適切なる砲火の集中により全く対応

せられ、その翼をロイテン東方に下げて普軍に對せんとしたのであるが普軍の猛烈果敢な

じた。

午後一時大王は梯隊をもって前進すべきを命じた。奥軍は普軍の斜行前進によりその左翼を急襲

に凹地及び小丘阜を利用しつつ我が企図を秘

匿してロベチンス村に入り、横隊に展開せし

めた。

二、リーニール会戦

一八一五年六月十五日オランダ国境を突破せるナポレオンはネーデル将軍に一部を授けて英軍に対せしめ、主力（七万三千）を率いて、ブリュッヘル軍を攻撃すべくリーニールに向い前進した。

ブリュッヘルは三軍団の兵力（八万一千）をもつて、リーニール川の線に陣地を占領し、英将ウエリントンの来援を頼んでナポレオンと決戦せんと企図していた。

ナポレオンはフルイルス附近を前進中詳細なる偵察の後、一部をもつて普軍の左翼を牽制抑留し、右翼中央に対し攻撃を加えて普軍の全力を吸収消耗せしめ、その疲労を待って予備隊をもつて一挙に止めを刺さんと計画を立てた。

これがため敵の左翼に対してはグローチの騎兵隊をもつて牽制せしめ、敵の右翼に対しては第三軍団をもつてセント・アルマント村を中央に対しては第四軍団をもつてリーニール村

リ―二―に向い中央突破を敢行せしめた。普衛の一部、騎兵第四軍団、第六軍団を以ってもって普軍の中央に対し準備砲撃を加え、近した。ここに於てナポレオンは、砲七十門をかもよし、後続第六軍団はこの頃戦場に到着は全くその予備隊を消耗するに至った。あたず戦機の熟するを待った。午後七時過ぎ普軍前線を救援せしめたがなお主力は参加せしめ撃を加えてきた。ナポレオンは一部をもつてめ仏軍の左翼を包囲せんと企図し猛烈なる攻撃を加えてきた。ナポレオンは一部をもつて午後五時頃普将ブリュッヘルは待機中の残余部隊をリ―二―、セント・アルマント村に進

を攻撃せしめ、予備隊として近衛、第四騎兵軍団並びに後続第六軍団をあてた。戦闘は午後二時頃より開始せられた。グロ―チ元帥は巧妙なる指揮によりプロイセン第三軍団をその正面に抑留するに成功したが、我が左翼方面に於ては第三軍団は、セント・アルマント村の争奪を繰り返し、戦況は極めて惨澹たるものがあつた。

軍は戦力全く消耗して対応の策なく遂に敗退しブリュッヘルは危うく捕虜とならんとして僅かに逃るる事が出来た。本会戦はナポレオン得意の中央突破戦法であつて第二線決戦の好範例である。

第四章 戦闘方法の進歩

第一節 隊形

古代の戦闘隊形は衝力を利用する密集集団方式であつた。中世騎士の時代となつて各個戦闘となり、戦術は紊（みだ）れて軍事的にも暗黒時代となつた。ルネッサンスは軍事的にも大革命を招来した。火薬の使用は武勇優れた武士も素町人の一撃に打負かさるる事となつて歩兵の出現となり、再び戦術の進歩を見るに至つたのである。

火薬の効力は自然に古（いにしえ）の集団を横広の隊形に変化せしめて横隊戦術の発達を見た。横隊戦術の不自然な停顿と、フラン

最初戦線の正面は堅固で突破が出来ず、持

はむしろそれに遅れて行なわれた。

今度は先ず戦争の性質が変化し、戦術の進歩

戦争性質変化の動機ともなったのであるが、

ず戦術的に横隊戦術から散兵戦術に進歩し、

戦闘群に進歩した。フランス革命当時は、先

変転をしたのであるが、戦術もまた散兵から

第一次欧州大戦で決戦戦争から持久戦争へ

での歴史である。

したのがシュリーフェン時代から欧州大戦ま

にすすみ、散兵戦術の発展の最後の段階に達

て戦闘を開始し散兵をもつて突撃する」時代

式であった。それが更に進んで「散兵をもつ

力と密集隊の突撃力との併用が大体戦術の方

つた。それでもなおモルトケ時代は散兵の火

が火薬の進歩とともに散兵に重点が移って行

る補助で縦隊の突撃力が重点であった。それ

一概に散兵戦術と云うも最初は散兵はむしろ

しく述べたから省略する。

ス革命による散兵戦術への革新については詳

附録に「兵力節約案」というものが出ている

大正三年八月の偕行（かいこう）社記事の

大戦終了後のソ連邦ではないだろうか。

真に正しく面の戦法を意識的に大成したのは

が、ないから断定をばかるが、私の気持では

大戦に於ける詳しい戦術発展の研究をした事

に今日の面の戦法に進展したのである。欧州

なつて各個撃破を受くる事となるから、自然

に今日の面の戦法に進展したのである。欧州

わゆる数線陣地である。

しかし数線陣地の考えは兵力の逐次使用と

なつて各個撃破を受くる事となるから、自然

に今日の面の戦法に進展したのである。欧州

わゆる数線陣地である。

しかし数線陣地の考えは兵力の逐次使用と

なつて各個撃破を受くる事となるから、自然

に今日の面の戦法に進展したのである。欧州

わゆる数線陣地である。

しかし数線陣地の考えは兵力の逐次使用と

なつて各個撃破を受くる事となるから、自然

久戦争への方向をとるに至ったのであるが、

その後砲兵力の集中により案外容易に突破が

可能となった。しかし戦前逐次間隔を大きく

していた散兵の間隔は損害を避けるため更に

大きくなり、これは見方に依つては第一線を

突破せらるる一理由ともなるが、その反面第

一線兵力の節約となり、また全体としての国

軍兵力の増加は、限定せられた正面に対し使

用し得る兵力の増大となり、かくて兵力を数

線に配置して敵の突破を防ぐ事となった。い

わゆる数線陣地である。

しかし数線陣地の考えは兵力の逐次使用と

なつて各個撃破を受くる事となるから、自然

に今日の面の戦法に進展したのである。欧州

わゆる数線陣地である。

しかし数線陣地の考えは兵力の逐次使用と

なつて各個撃破を受くる事となるから、自然

に今日の面の戦法に進展したのである。欧州

わゆる数線陣地である。

しかし数線陣地の考えは兵力の逐次使用と

なつて各個撃破を受くる事となるから、自然

空中戦はなお補助戦法の域を脱し得ないが、
 二次欧州大戦でも依然決戦は地上で行なわれ
 否、今日既に体の戦法に移りつつある。第
 「#底本245頁左に図あり」

展するであろう。
 る。而してこの戦法もまた近く体の戦法に進
 法であり、今日の戦闘群戦術は面の戦法であ
 は実線と見、散兵は点線即ち両戦術は線の戦
 古代の密集集団は点と見る事が出来、横隊
 である。

ない我が軍事界のため一つの誇りと言うべき
 然りとせば今日までほとんど独創的意見を見
 恐らく最初の意見ではないだろうか。果して
 揮しているものであり、これが世界に於ける
 とするもので、面の戦法の精神を遺憾なく発
 火力の相互援助協力に依り防禦力を発揮せん
 間して鱗形に配置し、各独立閉鎖堡とする。

曾田中將の執筆でないか、と想像する。それ
 は主として警戒等の目的である。一個小隊な
 いし一分隊の兵力を距離間隔六百メートルを
 間して鱗形に配置し、各独立閉鎖堡とする。

あれだけの準備計画があっても、やって見る

らぬ。
しかし人智は儚（はかない）いものである

線決戦主義の真に徹底せる模範と言わねばな

ニンを指導者として実演したのである。第一

してツアー帝国を崩壊せしめ、後に天才レ

部の計画成立した後、第一次欧州大戦を利用

して無数の犠牲を払いながら実験せられ、革

命の原理、方法間然するところ無きまでに細

に よつて研究発展し、その理論は階級闘争と

して無数の犠牲を払いながら実験せられ、革

命の原理、方法間然するところ無きまでに細

るのである。
ソ連邦革命は人類历史上未曾有の事が多い。

特にマルクスの理論が百年近くも多数の学者

し ない間に底流は常に大きな動きを為してい

る 決して突如起るものではない。もちろんある

面 の戦法への進展である。総ての革新変化は

れ ない。線の戦法の時でも砲兵の採用は既に

体 の戦法への進展過程であることは疑いを容

難矛盾に対し、臨機応変の処理を断行したレ
 するのではないが、列強の圧迫とあらゆる困
 る事がソ連革命の一因をなしている事を否定
 に民度の低いロシア民族には相当適合してい
 べき全体主義の方向に合するものであり、殊
 マルクス主義の理論が自由主義の次に来たる
 の急―に対する大衆の本能的衝動であつた。
 単にうまく行かず、大なる危機が幾度か襲来
 した事と思う。それを乗越え得たのは「祖国
 たる事は勿論であるが、大衆生活の改善は簡
 単にうまく行かず、大なる危機が幾度か襲来

確な目標を与え大衆を掌握せしめた。
 ももちろん「無産者独裁」が大衆を動かし得
 ニンをしていわゆる「国防国家建設」への明
 のではないか。資本主義国家の圧迫が、レ
 攻撃がレ―ニンを救つたとも見る事が出来る
 ったろうと想像せられる。資本主義諸列強の
 たのではなからうか。少なくともその恐れはあ
 が放任して置いたらあの革命も不成功に終つ
 と容易に思うように行かない。詳しい事は研
 究した事もないから私には判らないが、列国

反動と称していたではないか。この気持が今ものと信じ、多くの革新論者はナチス革命はる憧憬余りに強くソ連の革命的方を正しい気が変ったが、国民が第一線決戦主義に對する憧憬余りに強くソ連の革命的方を正しいもの

第二二次欧州大戦特に仏国の屈伏後はやや空気が変ったが、国民が第一線決戦主義に對する憧憬余りに強くソ連の革命的方を正しいもの

盾は解消されつつ進展した。もちろん平時的な変革ではない。たしかにナチス革命であるが大した破壊、犠牲無くして大きな変革が行なわれた。大観すればナチス革命はソ連革命に比し遙かに能率的であったと言える。この

線決戦的になったと見るべきである。ナチス革命は明瞭な第二線決戦主義である。ヒットラーの見当は偉い。しかしヒットラーの直感には革命の根本方向を狙っただけで、詳細な計画があったのではない。大目標を睨みながら大建設を強行して行くところに古き矛盾は解消されつつ進展した。もちろん平時的な変革ではない。たしかにナチス革命であるが大した破壊、犠牲無くして大きな変革が行なわれた。大観すればナチス革命はソ連革命に比し遙かに能率的であったと言える。この

日も依然清算し切れず新体制運動を動（ややもすれば観念的論議に停顿せしめる原因となつてゐる。日米関係の切迫がなくば新体制の進展は困難かも知れない。

蓋（けだ）し困難が国民を統一する最良の方法である。今日ルーズベルトが全体主義国の西大陸攻撃（とんでもない事だが）を餌として国民を動員せんとしつつあるもその一例リンドバーク大佐がドイツより本土攻撃せられる恐れなしと証言せるは余りに当然の事、これが特に重視せらるるは滑稽である。

第二節 指揮単位

「世界最終戦論」には方陣の指揮単位は大隊横隊は中隊、散兵は小隊、戦闘群は分隊と記してある。理屈はこの通りであり大勢はその線に沿って進歩して来たが、現実の問題としてそう正確には行っていない。

横隊戦術の実際の指揮は恐らく中隊長に重点があつたのであろう。横隊では大隊を大隊

指揮単位を「中隊」としたのはこの辺の事情
 表第二に、散兵の下に「中隊縦隊」と記し
 中隊位となった。モルトケの欄（一―二―頁付
 隊も戦闘に加入するものは大隊の密集でなく
 進むに従い戦闘の重点が散兵に移り、密集部
 に大隊の指揮号令が可能である。散兵の価値
 揮単位は大隊であった。横隊戦術よりも正確
 縦隊突撃にあったのだから、実際には未だ指
 かしナポレオン時代は散兵よりも戦闘の決は
 戦術の指揮単位は小隊と云うのは正しい。し

の傾向はますます甚だしくなる。だから散兵
 増大し部隊の戦闘正面が拡大するにつれてそ
 先ず不可能と言って良い。特に散兵の間隔が
 の指揮すなわち前進や射撃の号令は中隊では
 散兵戦の射撃はなかなか喧噪なもので、そ
 ある。力大隊長の号令下にある動作を要求したので
 位は依然として大隊であり、傭兵の性格上極
 不可能とも言うべきである。しかし当時の単
 長の号令で一斉に進退せしむる事はほとんど

校卒業者は中学校に転校の制度はなかったの
 たは有産者即ち支配階級の子供であり、小学
 (ギムナジウム)に入学するものは右翼ま
 ったのである。欧州大戦前のドイツで中学校
 兵制度が日本社会の実情に合しない結果であ
 ったのである。ドイツ模倣の一年志願
 兵制度が日本社会の実情に合しない結果であ
 ったのである。欧州大戦前のドイツで中学校

す一例と見る事が出来る。
 更に正確に言えば、ドイツ模倣の一年志願
 兵制度が日本社会の実情に合しない結果であ
 ったのである。欧州大戦前のドイツで中学校
 兵制度が日本社会の実情に合しない結果であ
 ったのである。欧州大戦前のドイツで中学校

いうならば、日本民族はもう散兵戦術の時代
 に日本軍が散兵戦闘を小隊長に委せかねると
 いうならば、日本民族はもう散兵戦術の時代
 に日本軍が散兵戦闘を小隊長に委せかねると

を現わしたのである。
 日露戦争当時は既に散兵戦術の最後の段階
 に入りつつあり、小隊を指揮の単位とした。
 しかるに戦後の操典には射撃、運動の指揮を
 中隊長に回収したのであった。その理由は、
 日露戦争の経験に依れば、一年志願兵の将校
 では召集直後到底小隊の射撃等を正しく指揮
 する事困難であると云うのであった。若し真
 に日本軍が散兵戦闘を小隊長に委せかねると
 いうならば、日本民族はもう散兵戦術の時代
 に日本軍が散兵戦闘を小隊長に委せかねると

幹部候補生の特別教育は極めて合理的であるが、猥（みだ）りに将校に任命するのは同意し難い。除隊当時の能力に応ずる階級を附与すべきである。

序（ついで）に現役将校の養成制度について一言する。

幼年学校生徒や士官候補生に特別の軍服を着せ、士官候補生を別室に収容して兵と離隔し身の廻りを当番兵に為さしむる等も貴族的

教育の模倣の遺風である。速やかに一抛、兵と苦楽をともにせしめねばならぬ。率先垂範の美風は兵と全く同一生活の体験の中から生まれ出るべき筈である。

将校を任命する時に将校団の銓衡会議と言うのがある。あれもドイツの制度の直訳である。ドイツでは昔その歴史に基づき将校団員は将校団で自ら補充したのである。その後時勢の進歩に従い士官候補生を募集試験により採用しなければならぬようになったため、動（やや）もすれば将校団員の気に入らない

学校に入校せしめて将校を任命する。
 下士官中、将校たるべき者を適時選抜、士官
 これがため必要な学校はもちろん排斥しない。
 現役幹部志願者は先ず下士官に任命せられる
 人を志すものは総て兵役につく。能力により
 れが国防国家完成の時とも言える。そこで軍
 も速やかに到来する事を祈らねばならぬ。そ
 陸軍が幼年学校の必要を感じない時代の一日
 と軌を同じゅうするに至るべきである。即ち
 国民教育、青年教育総て陸軍の幼年学校教育
 える。しかし今日以後全体主義の時代には、
 は陸軍として最も意味ある制度であつたと言
 世の中が自由主義であつた時代、幼年学校
 を通じて一貫せる制度となるのである。
 私は更に徹底して幹部を総て兵より採用す
 る制度に至らしめたい。かくして現役、在郷
 を採用したものと信ずる。日本では全く空文
 で唯形式的に行なわるるに過ぎない。
 身分の低い者が入隊する恐れがある。それを
 排斥する自衛的手段として、将校団銓衡会議
 を採用したものと信ずる。日本では全く空文
 で唯形式的に行なわるるに過ぎない。
 私は更に徹底して幹部を総て兵より採用す
 る制度に至らしめたい。かくして現役、在郷
 を通じて一貫せる制度となるのである。
 世の中が自由主義であつた時代、幼年学校
 は陸軍として最も意味ある制度であつたと言
 える。しかし今日以後全体主義の時代には、

に支那事変以来の経験によって戦闘機の価値向が一時相当有力であったのである。しかる度の増加により戦闘機の将来を疑問視する傾向が一時相当有力であったのである。しかるくなる一方であり、その編隊戦法の進歩と速度の増加により戦闘機の将来を疑問視する傾向が一時相当有力であったのである。しかる中心となるものと判断せられ、飛行機は大きな中心となるものと判断せられ、飛行機は大きな工業地帯等となる。そして爆撃機が戦闘力の中心となるものと判断せられ、飛行機は大きな工業地帯等となる。そして爆撃機が戦闘力の

の革命であろう。この趨勢から見て次の「体」の戦法ではい

よいよ個人となるものと想像せられる。

位となる傾向にある。

今日「面」の戦闘に於ては指揮単位は分隊である。しかししてこの分隊の戦闘に於ては分隊が同時に単一な行動をなすのではない。ある組は射撃を主とし、ある組はむしろ白兵突撃まで無益の損害を避けるため地形を利用して潜入する等の動作を有利とする。操典は既に分隊を二分するを認めており、「組」が単

指揮刀なるものは自然必要なくなる。日本軍に狙撃せられた例が少くない。そうすればる事を切望する。猥（みだ）りに刀を抜き敵令をかける場合刀を抜く事は速やかに廃止する事にかけてもまた実戦の必要から言っても、号を出すのはこの時代の遺風と信ずる。精神上から言ってもまた実戦の必要から言っても、号が横隊戦術に停顿せしめたのである。号令をかける時刀を抜き、敬礼する時刀を前方に投出すのはこの時代の遺風と信ずる。精神上から言ってもまた実戦の必要から言っても、号令をかける場合刀を抜く事は速やかに廃止する事にかけてもまた実戦の必要から言っても、号が横隊戦術に停顿せしめたのである。号令をかける時刀を抜き、敬礼する時刀を前方に投出すのはこの時代の遺風と信ずる。精神上から言ってもまた実戦の必要から言っても、号

第三節 戦闘指導精神

横隊戦術の指導精神は当時の社会統制の原理であつた「専制」である。専制君主の傭兵が横隊戦術に停顿せしめたのである。号令をかける時刀を抜き、敬礼する時刀を前方に投出すのはこの時代の遺風と信ずる。精神上から言ってもまた実戦の必要から言っても、号令をかける場合刀を抜く事は速やかに廃止する事にかけてもまた実戦の必要から言っても、号が横隊戦術に停顿せしめたのである。号令をかける時刀を抜き、敬礼する時刀を前方に投出すのはこの時代の遺風と信ずる。精神上から言ってもまた実戦の必要から言っても、号重要な位置を占むるのではないだろうか。左右し、依然戦闘機が空中戦の花として最も重要な位置を占むるのではないだろうか。重要な位置を占むるのではないだろうか。左右し、依然戦闘機が空中戦の花として最も重要な位置を占むるのではないだろうか。左右し、依然戦闘機が空中戦の優劣が戦争の運命を撃機であるが、空中戦の優劣が戦争の運命を躍し、敵目標に潰滅的打撃を与うるものは爆力の大革命に依り、戦闘機の行動半径も大飛の行動半径は大制限を受けるのだが、将来動莫大の燃料を要し、その持つ量のため戦闘機は依然大なる事が判明した。今日の飛行機は

を構成しているから、とんでもない方から射
 いる敵は互に相側防し合うように巧みに火網
 のが我に対抗するのではない。広く分散して
 来た。敵は散兵の如く大体我に向き合ったも

「井底本254頁右上に図あり」

戦闘群の戦術となると形勢は更に変化して
 なるべく干渉を避けるのである。

隊の攻撃目標を示し、第一線中隊をして共同

動作「せしむるに在った。そうして大隊長は
 を尊重するのである。大隊戦闘の本旨は「大
 隊の攻撃目標を示し、第一線中隊をして共同
 動作」せしむるに在った。そうして大隊長は
 なるべく干渉を避けるのである。

「井底本254頁右上に図あり」
 戦闘群の戦術となると形勢は更に変化して
 来た。敵は散兵の如く大体我に向き合ったも
 のが我に対抗するのではない。広く分散して
 いる敵は互に相側防し合うように巧みに火網
 を構成しているから、とんでもない方から射
 いる敵は互に相側防し合うように巧みに火網
 のが我に対抗するのではない。広く分散して
 来た。敵は散兵の如く大体我に向き合ったも

「井底本254頁右上に図あり」

戦闘群の戦術となると形勢は更に変化して
 来た。敵は散兵の如く大体我に向き合ったも
 のが我に対抗するのではない。広く分散して
 いる敵は互に相側防し合うように巧みに火網
 を構成しているから、とんでもない方から射
 いる敵は互に相側防し合うように巧みに火網
 のが我に対抗するのではない。広く分散して
 来た。敵は散兵の如く大体我に向き合ったも

この統制の戦術のためには次の事が必要で

と指示している。

図の如く積極的に戦闘を指導す（第五百四

適時各隊に新なる任務を附与し…自己の意

四百八十）更に「…戦況の推移を洞察して

を遺憾なく統合發揮するにあり」と述べ（第

と各隊の適切なる協同に依り大隊の戦闘力

の戦況に応じ大隊長の的確かつ軽快なる指揮

大隊長の指揮につき「大隊戦闘の本旨は諸般

改正前の我が歩兵操典に大隊の指揮に対し、

ない。自由放任は断じてならぬ。昭和十五年

の意図を決定して明確な命令を下さねばなら

しかも戦況の千変万化に応じ、適時適切にそ

務を与え各隊間共同の基準をも明らかにする

定する。その目的に依じて、各隊に明確な任

来た。即ち指揮官ははつきり自分の意志を決

そこで否が応でも「統制」の必要が生じて

に陥る恐れがある。

合った敵を自由に攻撃させたなら大変な混乱

撃せられる。散兵戦術のように大体我に向い

社会が全体主義へ革新せらるる秋（とき）、
 となる。
 となり感激を失うならば自由主義に劣る結果
 ない。恐れ戦き、遲疑、躊躇逡巡し、消極的
 され、感激して自主的に活動せしめねばなら
 その任務達成のためには広汎な自由裁断が許
 理解感激せしめた上に各自の任務を明確にし
 を確立して大衆に明確な目標を与え、それを
 心の向うところを察し、大勢を達観して方針
 ならない。それ以外の場合には指導者は常に衆
 裕のない場合は躊躇なく強制的に命令せねば
 衆が迷っており、かつ事急で理解を与える余
 制と心得ている人も少なくないようである。
 いか。何か暴力的に画一的に命令する事が統
 近時のいわゆる統制は専制への後退ではな
 開顕した高度の指導精神であらねばならぬ。
 限を与うる事である。即ち専制と自由を綜合
 ため無益の混乱を避けるため必要最少限の制
 かつその自由活動を容易かつ可能ならしむる
 統制は各兵、各部隊に明確なる任務を与え

ないか。全体主義社会統制の重要道徳たる服
 とす」と示したのである。これ真に達見では
 身体を上官に致し、一意その指揮に従うもの
 に現われ、遂に弾丸雨飛の間に於て甘んじて
 (よ)くその目的を達し、衷心より出で形体
 6955 到なる監督、およびその感化力と相俟つて能
 たる觀念に基づき、上官の正当なる命令、周
 崇高なる徳義心により、軍紀の必要を覚知し
 の綱領に「服従は下級者の忠実なる義務心と
 明治四十一年十二月軍隊内務書改正の折、そ

陸軍の先輩は非常にこの点に頭を悩まし、
 である。
 を失つて軍隊の強烈な統制中の人となつたの
 習の裡(うち)に叩き込まれ、兵はその個性
 活変化である。即ち全く生活様式の変つた慣
 国民のため、西洋流の兵営生活は驚くべき生
 殊に集団生活、社会生活の経験に乏しい日本
 義の時代は全く社会と遊離した存在となつた。
 は反自由主義的な存在である。ために自由主
 軍隊また大いに反省すべきものがある。軍隊

裁を消滅せしむる事は日本民族昭和維新の新結果である。軍隊が正しき理解の下に私的制日本の困難は皆この道義心微（かす）かなるって成立する。朝鮮、満州国、支那に於ける協和は人を尊敬し弱者をいたわる道義心によ東亜連盟結成の根本は民族問題にあり。民族痛感する新鮮なる道義心に依らねばならぬ。に如何に弱者をいたわることの重大なるかを遺憾に堪えない。しかも単に形式的防圧ではならぬ。時代の精神に見覚め全体主義のため

殊に隊内に私的制裁の行なわれているのはならぬ。て「国民生活訓練の道場」たる実を挙げねばの時代に於て軍隊生活の意義を正確に把握しる。社会は軍隊と接近しつつある。軍隊はこの時代

従の真義を捉えたのである。しかし軍隊は依然として旧態を脱し切れないで今日に及んでいる。今や社会は超スピードをもって全体主義へ目醒めつつある。青年学校特に青少年義勇軍の生活は軍隊生活に先行せんとしつつある。社会は軍隊と接近しつつある。軍隊はこの時代に於て軍隊生活の意義を正確に把握して「国民生活訓練の道場」たる実を挙げねばならぬ。

道徳確立の基礎作業ともなるのである。

第五章 戦争参加兵力の増加と国軍編

制（軍制）

第一節 兵役

火器の使用に依って新しい戦術が生まれて来た文芸復興の時代は小邦連立の状態であり平常から軍隊を養う事は困難で有事の場合兵隊を備って来る有様であつたが、国家の力が

増大するにつれ自ら常備の傭兵軍を保有する事となつた。その兵数も逐次増加して、傭兵時代の末期フリードリヒ大王は人口四百万に満たないのに十数万の大軍を常備したのである。そのため財政的負担は甚大であつた。

フランス革命は更に多くの軍隊を要求し、貧困なるフランスは先ず国民皆兵を断行し、欧州大陸の諸強国は次第にこれに倣う事となつた。最初はその人員も多くなかつたが、国際情勢の緊迫、軍事の進歩に依って兵力が増

根本的革新に依り国民の能力を最高度に發揮

的に運用する事が第一の着眼である。教育の

国家総動員は国民の力を最も合理的に綜合

本改正を要するものと信ずる。

改革が行なわれたが、しかも更に徹底的に根

つある。兵役法はこれに従って相当根本的な

速に大増加を来たし、国民皆兵の実を挙げつ

増強、支那事變の進展により、徴集兵数は急

を免れる男子が多かった。ソ連極東兵備の大

離を輸送されるソ連軍に過ぎないために服役

き陸軍武力は一本のシベリヤ鉄道により長距

を執る準備も列強には常に出来ている。

日本は極東の一角に位置を占め、対抗すべ

は戦っていないが、必要に応じ全健康男子銃

模でなかつたため第一次欧州大戦だけの大軍

かつ陸上作戦は第一次欧州大戦のように大規

立ち、フランスまた昔日の面目がなくなり、

第二次欧州大戦では大陸軍国ソ連が局外に

が兵役に服する有様となった。

加せられ、第一次欧州大戦で既に全健康男子

今日は既成の観念よりせば国民皆兵制度の徹
 なった。全健康男子総て従軍する事となつた
 事となつて損害を受くるのは軍人のみでなく
 空軍の発達に依り都市の爆撃が行なわるる

を立って置かねばならない。
 空軍の発達に依り都市の爆撃が行なわるる
 事となつて損害を受くるのは軍人のみでなく
 なつた。全健康男子総て従軍する事となつた
 今日

戦時に於ける動員は所要兵力を基礎として
 ある年齢の男子を総て召集する。その年齢内
 で従軍しない者は総て国家の必要なる仕事に
 従事せしめる。自由企業等はその年齢外の人
 々で総て負担し得るように適切綿密なる計画
 を立って置かねばならない。

得るごとく奉仕の方向を決定する。
 総合的に調査し、各人の能力を充分に発揮し
 を統一的に合理化し、知能、体力、特長等を
 活用する事が出来ない。教育制度と検査制度
 徴兵検査では到底国民の能力を最も合理的に
 のものである。
 公役兵役につかしむるについては、今日の
 服せしむるのである。兵役は公役中の最高度
 国家に奉仕する制度を確立する。即ち公役に
 し得るようにするとともに、国民はある期間

の傾向を示したものと云える。

の黒シャツ隊とかヒットラーの突撃隊等はそ
 るるようになるのではなかろうか。イタリア
 に適した少数の人々が義勇兵として採用せら
 出したのであるが、今後の戦争では特にこれ
 数の兵員を得るため国民皆兵で誰でも引張り
 必要なくなるであろう。地上作戦の場合は無
 争のように敵を攻撃する軍隊に多くの兵力が
 空中戦を主体とするこの戦争では、地上戦
 精神を必要とする。

がこの惨禍に対し毅然として堪え忍ぶ鉄石の
 慮なく戦火の洗礼を受けるのである。全国民
 男女のみならず、山川草木、豚も鶏も総て遠
 すなわち国民皆兵の真の徹底である。老若
 英独戦争で明らかとなっている。

大都市、大工業地帯が選ばる事が既に今次
 隊でなく国民となり、敵国の中心即ち首都や
 民野火の禍中に入る端緒に入ったのである。
 次に来たるべき決戦戦争では作戦目標は軍
 底であるが、既に世は次の時代である。全国

義勇兵と言うのは今日まで用いられていた傭兵の別名ではない。国民が総て統制的に訓練せられ、全部公役に服し、更に奉公の精神に満ち、真に水も洩らさぬ挙国一体の有様となつた時武力戦に任ずる軍人は自他共に許す真の適任者であり、義務と言う消極的な考えから義勇と言う更に積極的であり自発的である高度のものとなるべきである。

第二節 国軍の編制

フリードリヒ大王時代は兵力が相当多くても実際作戦に従事するものは案外少なくなりその作戦は「会戦序列」に依り編成された。それが主将の下に統一して運動し戦闘するのであたかも今日の師団のような有様であった。

「#底本261頁に地図あり」

ナポレオン時代は既に軍隊の単位は師団に編制せられていた。次いで軍団が生まれ、それを軍に編制した。

ナポレオン最大の兵力（約四十五万）を動

かした一八一二年ロシア遠征の際の作戦は、なるべく国境近く決戦を強行して不毛の地に侵入する不利を避くる事に根本着眼が置かれた。これは一八〇六―七年のポーランドおよび東普作戦の苦い経験に基づくものであり、当時として及ぶ限りの周到なる準備が為された。

一部をワルソ―方向に進めてロシアの垂涎（すいぜん）の地である同地方に露軍を牽制し、東普に集めた主力軍をもってこの敵の側背を衝き、一挙に敵全軍を覆滅して和平を強制する方針であった。主力軍は二個の集団に開進した。ナポレオンは最左翼の大集団を直接掌握し、同時に全軍の指揮官であった。

「#底本262頁に地図あり」
今日の常識よりせばナポレオンは三軍に編制して自らこれを統一指揮するのが当然である。当時の通信連絡方法ではその三軍の統一運用は至難であったろう。けれどもナポレオンといえども当時の慣習からそう一挙に蟬脱

出来なかつた事も考えられる。何れにせよ事実上三軍にわけながら、その統一運用に不充分であつた事がナポレオンが国境地方に於て若干の好機を失つた一因となつており、統一運用のためには国軍の編制が合理的でなかつたという事は言えるわけである。

モルトケ時代は既に国軍は数軍に編制せられ、大本營の統一指揮下にあつた。シュリーフェンに依り国軍の大増加と殲滅戦略の大徹底を来たしたのであるが、依然国軍の編制はモルトケ時代を墨守し、欧州大戦勃発初期、国境会戦等であたかも一八一二年ナポレオンの犯したと同じ不利を嘗めたのは興味深い事である。

独第五軍は旋回軸となりベルダンに向い、第四軍はこれに連繋して仏第四軍を衝き、独主力軍の運動翼として第一ないし第三軍が仏第五軍及び英軍を包圍殲滅すべき態勢となつた。

第一ないし第三軍を一指揮官により統一運

用したならばあるいは国境会戦に更に徹底せる勝利となり、仏第五軍、少なくとも英軍を捕捉し得たかも知れぬ。そう成ったならマル与会戦のため更に有利の形勢で戦われる事であったろう。しかるに独大本営は自らこの戦場に進出し直接三軍を指揮統一することもなさず、第二軍司令官をして臨時三個軍を指揮せしめた。しかるに第二軍司令官ビューローは古参者であり皇帝の信任も篤い紳士の將軍であつたが機略を欠き、活気ある第一軍との意見合致せず、いたずらに安全第一主義のために三軍を近く接近して作戦せんとし、遂に好機を失し敵を逸したのである。

ナポレオンの一八一二年の軍編制や運営につき深刻な研究をしていた独軍参謀本部は、一九一四年同じ失敗をしたのである。一八一二年はナポレオンとしては三軍の編成、その統一司令部の設置はかなり無理と言えるが、一九一四年は正しく右翼三軍の統一司令部を置くべきであり、万一置いてない時は大本営

動を掣肘し得らるるわけだが、三元の世界即ち平面に住む生物には線を一本書けばその行勉強出来た。掛江教官が「二元の世界すなわんだ。数学の嫌いな私にもこれは大変面白く

戦争

かつて中央幼年学校で解析幾何の初歩を学

第六章 将来戦争の予想

のと言ふべきである。

とともに、その尊重すべきを深刻に教えるも

予見した識見はなかなか得られない事を示す

た事であつたらう。現状に捉われず、将来を

らば、戦争の運命にも相当の影響を及ぼし得

ないし第三軍を一方面軍に編成してあつたな

の編成となつたが、若しドイツが会戦前第一

軍を直接統一指揮すべきであつた。

自ら第一線に進出、最も大切な時期にこの三

うと通り抜けて行く」のであった。奥に寝て石川君の言によると「柱でも蚊帳でも総てすを上げて見ると女が本堂の奥に進んで行く。で名誉の戦死を遂げた石川登君が恐る恐る頷しまつた。この時豪傑中の豪傑、今度の事変で名譽の戦死を遂げた石川登君が恐る恐る頷を上げて見ると女が本堂の奥に進んで行く。石川君の言によると「柱でも蚊帳でも総てすうと通り抜けて行く」のであった。奥に寝て

ある夜の事豪傑連中（もちろん私は参加していない）が消灯後海岸に散歩に出かけ遅く帰って廊下にあつた残飯を食べていた。ところが突如音がして光り物が本堂に入つて来た。さすがの豪傑連中度胆を抜かれてひれ伏して

女なかなか利発もので生徒を驚かしていた。

ち体に住む我らには線は障害とならないが、面で密封したもののの中に入れられる時は全く監禁せられる。しかし四元の世界に住むものには我々の牢屋のようなものでは如何ともなし得ない」等という語を非常に面白く聴いたものである。

鎌倉に水泳演習の折、宿は光明寺で我々は

本堂に起居していた。十六羅漢の後に五、六

歳の少女が独りで寝泊りしていたが、この少

つある。第一次欧州大戦で全健康男子が軍に

の常識は、都市爆撃により完全に打破されつ

軍人以外は非戦闘員であると言う昨日まで

個人となるであろう。

指揮単位は分隊から組に進んでいる。次は

きだが、既に体の戦法に移りつつある。

である。今日の戦法は依然面の戦法と見るべ

想像も出来ない。体の戦法は人間戦闘の窮極

は同じ事であろう。

しかし我ら普通の人間には体以上のものは

宗教の霊界物語

四元に住むものとして幽霊の事が何だかよく

当てはまるような気がする。宗教の霊界物語

石川君の実感を詳しく聴くと、掛江教官の

四元に住むものとして幽霊の事が何だかよく

当てはまるような気がする。宗教の霊界物語

ろうと話しあったのであった。

知らず、ただ母は浅草附近にいとこの事であ

ったが、我らは恐らくその母親が死んだのだ

に寝ようとはしなかった。この少女は両親を

：「とて、それからはどうしても一人で本堂

と「知らない小母さんが来て抱くから嫌だ：

いた少女が泣出す。誰かが行って尋ねて見る

は戦争形態発達の極限に達するのであり、こ
 傾注に徹底する事となる。即ち次の決戦戦争
 単位が個人で全国民参加と云えば国民の全力
 しかして体以上の事は我らに不可解であり、
 ら見ても次の決戦戦争は正しく空中戦である
 体の戦法、全国民が戦火に投入と言う事か
 与え得る事となつて初めて実現するであらう。
 体となり、一挙に敵国の中心に致命的打撃を
 次の決戦戦争はどうしても真に空中戦が主
 敵の正面は突破至難である。

をもつても、良く装備せられ、決心して戦う
 事が出来る。火砲、戦車、飛行機の綜合威力
 の全正面を防禦し得べく、敵の迂回を避ける
 即ち一国の全健康男子を動員すればその国境
 の状態でも依然持久戦争となる公算が多い。
 国競争力の甚だしい相違からきたので、今日
 決戦戦争となつたが、これは前述せる如く両
 争の渦中に投入せらるる事となる。
 第二次欧州大戦では独仏両強国の間にさえ
 従う事となつたのであるが、今や全国民が戦

が要求せられる。全体主義はあたかも運動選
 全国力を徹底的に發揮するため極度の緊張
 る。であり、「自由」から「統制」への躍進であ
 体主義は国力の超高速増強を目標とするの
 国防国家体制への急進展となりつつある。全
 ソ連の全体主義的国防建設が列強のいわゆる
 は驚嘆すべき有様であり、特にドイツおよび
 第一次欧州大戦を契機として軍事上の進歩
 統一の序曲に他ならない。
 戦争の終結と云う事は国家対立の解消、即
 ち世界統一を意味している。最終戦争は世界
 第二節 歴史の大勢
 の大勢をわきまえぬのである。
 識にまねている人々は戦争の大勢、世界歴史
 と呼ぶのは適当でない。西洋人の独断を無意
 世界戦争である。過去の欧州大戦を世界大戦
 次の決戦戦争は世界最終戦争であり、真の
 れは戦争の終末を意味している。

手の合宿鍛錬主義の如きものであり、決勝戦の直前に於て活用せらるべき方式である。一地方に根拠を有する戦力が抵抗を打破し得る範囲により自然に政治的統一を招来するこれがため武力の進歩が群小国家を整理して大国家への発展となった。欧州大戦後、軍事および一般文明の大飛躍は国家の併合を待つ余裕をあたえず、しかも力の急速なる拡大を生存の根本条件とする結果、国家主義の時代から国家連合の時代への進展を見、今日世界は大体四個の大集団となりつつある事は世人の常識となった。

昭和十六年一月十四日閣議決定の発表に「肇国（ちようこく）の精神に反し、皇国の主権を晦冥（かいめい）ならしむる虞（おそれ）あるが如き国家連合理論等は之を許さず」との文句がある。興亜院当局はこれに対し、国家連合理論を否定するものでなく、肇国の精神に反し皇国の主権を晦冥ならしむる虞あるものを許さぬ意味であると釈明したとの事で

着き、しかも絶えずその統制強化に向って進
 い。結局各集団の状況に応じ落着くべきに落
 りその強化を阻止する作用も依然なかなか強
 らるる反面、民族感情や国家間の利害等によ
 り力を発揮し得るのだから統制の強化を要望せ
 なるべく強く統制せらるるものが、良くその
 確に数個の集団となるであろう。その集団は
 欧州戦争に依りその速度を増して間もなく明
 家連合の時代に入りつつある世界は、第二次
 国

る一国家となる事は疑いを許さぬ。しかしそ
 基づき、政治的には全世界が天皇を中心とす
 人類文化の目標である八紘一宇の御理想に
 なるは遺憾に堪えない。

ある。若し国家連合の理論を否定する事があ
 るならばそれはあまりにも人類歴史の大勢に
 逆行するものであり、皇国は世界の落伍者た
 る事を免れ難き事明瞭である。興亜院当局の
 言は当然しかあるべきである。然し閣議決定
 発表の文がかくの如き重大誤解を起す恐れ大
 なるは遺憾に堪えない。

むものと考えられる。合理的に無理なくその強化が進展し得るものが優者たる資格を得る事となるであろう。

右の如く発展をしながら各集団の間に集散離合が行なわれてその数を減じ、恐らく二個の勢力に分れ、その間の決戦戦争によつて世界統一の第一段階に入るものと想像せられる。二個勢力に結成せらるるまでが人類歴史の現段階であり、戦争より見れば第一次欧州戦争以来の持久戦争時代がそれである。持久戦争と云うても局部的には決戦戦争が行なわれて集団結成を促進するのであるが、武力の活動範囲に未だ制限多く自然に数集団となるわけである。今日はこの意味に於て人類の準決勝時代と云うべく、この時代の末期である世界が二個の勢力に結成せられる時、次の決戦戦争の時代に入り最終戦争が行なわれる事となる。

ラテン・アメリカの諸国は人種的にも経済的にも概して合衆国よりも欧州大陸と親善の

今日民主主義、全体主義の二大陣営と言う
 は如何に成り行くであろうか。
 んとしつつあるが、果してしからばその将来
 連は巧みにその中間を動いて漁夫の利を占め
 主主義陣営と枢軸陣営の二大分野に分れ、ソ
 連は巧みにその中間を動いて漁夫の利を占め

現下の事変はその陣痛である。
 これらの未完成の四集団は既にいわゆる民
 主主義陣営と枢軸陣営の二大分野に分れ、ソ
 連は巧みにその中間を動いて漁夫の利を占め

排除しつつ、一個の集団へ結成せんとしつつ
 あるが、我が東亜は今日最も不完全な状態に
 ある。しかし遠からず支那事変を解決し、必
 ずや急速に東亜の大同を実現するであろう。
 本はその実力によって欧米霸道主義の侵略を
 排除しつつ、一個の集団へ結成せんとしつつ
 であるが既に大国家とも見る事が出来る。日
 は最もよく結合の実を挙げ、今日は名は連邦
 方策により輝かしき成果を挙げている。ソ連
 州連盟の結成に努力し、恩威併行の適切なる
 天才ヒットラーにより戦争の中に於て着々欧
 戦以後は急速に米州連合体の成立に向いつつ
 ある事は即ち歴史の必然性である。ドイツは

従であるかに在る。この差は今日の日本人に
 題はその程位如何にある。何れが主で何れが
 素であり、これを重んじないものはない。問
 治を重視する。道と力は人生に於ける二大要
 於て我らは徳治を理想とするに對し彼らは法
 尚ぶが、我らの守る処は道である。政治上に
 宗教的生活を捨て去っていない。西洋は力を
 する生活を続けたのである。東洋人は太古の
 て来た。しかし反面常に天意に恭順ならんと
 明に遅れ、西洋人に比し誠に生温い生活をし

いとなるものと信ずる。我ら東洋人は科学文
 この見地から究極に於て、王霸兩文明の争
 る。
 心となつて世界が二分するであろうと想像す
 明の進展するところ、結局は矢張り主義が中
 関係ないし地理的關係が主である。しかし文
 秋波を送りつつある。主義よりもむしろ利害
 味方に編入し、殊に全体主義の最先鋒ソ連に
 に民主主義という英、米は全体主義の中国を
 も必ずしもそれは主義によるのではない。現

は大したものではないと思わるるかも知れない。しかしこれが大きな問題である。今日の日本人は西洋文明を学び、大体覇道主義となっている。あるいは西洋人以上の覇道主義者である。見給え、平気で「油が入用だから蘭印をとる」と高言しているではないか。西洋人でも今少しは齒に衣（きぬ）をかけた言い方をするであろう。日本人は一時心も形も全部西洋風となったのであった。近時所謂日本主義が横行して形は日本に還ったが、しかし彼ら

の大部の心は依然西洋覇道主義者である。八紘一字と言いながら弱者から権利を強奪せんとし、自ら強権的に指導者と言い張る。この覇道主義が如何に東亜の安定を妨げているかを静かに観察せねばならない。

クリスティーの『奉天三十年』には日清戦争当時のことについて「若し総ての日本人が軍隊当局者のようであったなら、人々は彼らの去るのを惜しんだであろう。しかし他の部類のものもあつた。軍隊の後から人夫、運搬

夫等に、そして雑多なる最下級の群が来て、
 それらは支那人から恐怖の混じた軽蔑をもつ
 て見られた。：：彼らは兵士の如く嚴格なる
 規律の下に置かれなかつた」と述べてある。
 軍隊は兵卒に至るまで道義的であつたらしい。
 しかるに日露戦争については「この前の戦争
 の時に於ける日本軍の正義と仁慈が謳歌され
 総ての放埒は忘れられていた。戦争者が満州
 の農民と永久的友誼を結ぶべき一大機会は今
 であつた。度々戦乱に悩まされたこれらの農
 民達は日本人を兄弟並みに救い主として熱心
 に歓迎したのである。かくしてこの国土の永
 久的領有の道は拓けたであらう。而して多く
 の者がそれを望んだのであつた。しかるに日
 本人の指導者と高官の目指した処は何である
 にもせよ、普通の日本兵士並びに満州に来た
 一般人民はこの地位を認識する能力が無かつ
 た。：：かくして一般の人心に、日本人に対
 する不幸なる嫌悪、彼らの動機に対する猜疑
 (さいぎ)、彼らと事を共にするを好まぬ傾

向が増え、かつ燃えた。これらの感情はこれを根絶する事が困難である」と記している。

日露戦争では既に兵士のあるものは非道義的に傾いた。今次事変は如何であろうか。悪いのは一般日本人と兵士だけに止まるであろうか。北支の老人は「北清事変当時の日本軍と今日の日本軍は余りに変った」と嘆いてい

るそうである。若し我が軍が少なくとも北清事変当時だけの道義を守っていたならば、今日既に蒋介石は我が戦力に屈伏していたではないだろうか。蒋介石抵抗の根柢は、一部日本人の非道義に依り支那大衆の敵愾心を煽つた点にある。「派遣軍将兵に告ぐ」「戦陣訓の重大意義もここにありと信ずる。

北清事変当時の皇軍が如何に道義を守ったかに関して北京の東亜新報の二月六、七、八日の両三日の紙上に「柴大人の善政、北城に残る語り草」と題し、今なお床しき物語が掲載されている。それを参考までに大略申述べるところこんな事である。

(一)、千仏寺胡同、この北京の北城の辺こそ、我ら日本人が誇りとしてよい地区なのである。

光緒二十六年、つまり明治三十三年の七月二十一日は各国連合軍が北京入城の日であった。日本軍は朝陽門より守備兵の抵抗を排除して先ず入城、順天府署に警務所を設け、当時公使館附武官であった柴五郎大佐が警務長官となった。

柴大佐は後の柴大将であるが、大将の恩威並び行なう善政は全く北京人をして感涙にむせばせたものであった。

柴長官は先ず安民公署という分署を東西北八胡同と西四牌樓北報子胡同の二個所に設け布告を発して曰く、
 『軍人の住民の宅に入りて捜査するを許さず、若し違反する者あらば住民はその面貌等を記して告発す可し』
 と。そして清刑部郎中・端華如等をしてその事務を処理させた。

(二)、「ここは鼓樓東大街の北である。そして日本軍の善政ゆえに更生した街である。橋川時雄氏の調査によると、当時の柴大人(ツァイターレン)の仁政として今も古老の感謝しているところは、大人が警務長官となるや各米倉を開いてその蓄米を廉売し、いわゆる“糧荒”の虞(おそれ)なからしめた事であるそうである。その他に現存している古老が口伝している柴大将についての挿話には次のような話がある。

【古老の話 その一】

その頃柴五郎というお方は日本人ではない。満州旗籍の出身だが日本に帰化したのだ。つまり柴大人がこのような仁政を施すのは故郷へ帰ってきてきて故郷を愛するためだという噂が専らでした。この話は当時その恩に感じた住民達が半分想像まじりで話した噂だろうが、本当の事として宣伝されたわけである。

【古老の話 その二】

柴大人が職を去って日本へ帰る日はいやは

や大変な事でした。柴公館には、その日朝暗いうちから人がわんさと押しかけて皆餞別の贈り物をしました。その多くは貧民や苦力どもで、皆手に手に乾鶏等を贈ってその行を惜しんだのです。あの時の有様は今でもありありとこの眼に浮かんで来ます。

【古老の話 その三】

柴大人の威勢というものはその頃は大したものので、流行歌にまで歌われたものです。つ

い二十年位までは、この北城一帯では子供らがあんまり悪戯をすると母親達は“柴大人来”了（ツアイターレンライラ）”（そんなおいたをする）と柴大人が来ますよ）と言つてなだめていた程です。

この三つの口伝は橋川氏の集めたものであるが、またもって日本軍人柴大人の威徳を偲ぶに充分なるものがあるではないか

（三）、「宝鈔胡同の柴大人の民心把握の偉大な事蹟をたずねた方がこの際特に意味深いであろう。

満州人敦厚の“都門紀変三十首絶句”とい

うのは多分拳匪の乱を謳ったものらしいが、

その中の第七首“肅府”にこういうのがある

そうだ。

桐葉分封二百余、蒼々陰護九松居、

無端燬倣渾間事、同病忪憐道士徐。

この詩にいう道士徐というのは東海に行っ

た徐福が戦乱に苦しんでいる民衆を慰めてい

るというわけで、柴大人の仁政を謳ったもの

であると解釈されている。この詩の中には“

安民処処巧安排、告示輝煌総姓柴”と云って

柴長官の告示によって人民が安心した事も詠

(よ)まれている。“拳匪紀略”には、

『日本軍が北城を占領したので、市民は初

めて外国兵が北京に入城した事を知ったのは

二十三日である。それに便乗して土匪が数百

家を荒し尽したが北城は何の事もなかった。

ここは日本兵が占領していたからで、北城の

人民達は皆日本兵の庇護を受けた』

とあり、また“驢背集”という詩集には、

自肅しなければ国民の怨府となるであろう。た。今日軍は政治の推進力と称せられている。ちその横暴となつて間もなく国民の信を失つ原因となり、政党ひとたび力を得るやたちまゆる藩閥横暴となつた事が政党政治招来の大原因となり、政党ひとたび力を得るやたちま明治維新以後薩長が維新の功に驕つていわ

事が出来、残る文書に読む事が出来る。英、仏の乱暴の跡といみじくも正邪のよい対照をなして居るではないか」：：以上は東亜新報掲載記事である。

事蹟は、四十年後の今なお古老の口から聴く

『日本軍の入城に依つて宮城が守られ、逃げる隙なく宮中に残つた数千人のものは日本軍に依つて食を与えられた。宮中には光緒帝も西太后も西巡していて恵妃（同治帝の妃）のみが国璽を守っていたが、柴大人に使を派して謝意を述べ、大人の指示によつて宮中の善後措置を講じた』
 という意味の談がある。

はいらぬ。天皇の思し召しがそれである。我
 々の結合がむしろ力以上の力である。議論
 である。しかし力は力に敗れる。結局道をも
 力をもつてする方法は端的であり、即効的

る。民が急速に皇道に目を醒しつつある証左であ
 ある。しかし東亞連盟論の急速なる進展は国
 有。東亞連盟論に対する反対はその現われで
 き力の信者、即ち霸道主義が目下圧倒的であ
 悲しい哉、我が日本に於ても東亞の大同につ

ソ連の統一も総ては力中心の霸道主義である

想は道義による世界統一である。

る道は道義治国であり、八紘一宇に依る御理
 今日ソ連外交にも劣らざる権謀、謀略の歴
 史であるとも言える。しかし我が国体の命ず
 明徴となつた時代の日本人は西洋人にも優る
 義的でなかつた事が明らかである。国体が不
 覇道の実行者ともなつた。戦国時代の外交は
 今日ソ連外交にも劣らざる権謀、謀略の歴
 史であるとも言える。しかし我が国体の命ず
 る道は道義治国であり、八紘一宇に依る御理
 想は道義による世界統一である。

日本に於てさえ道義より力、物を中心とし

ねばならぬ。

を急速に摂取、最終戦争に必勝の体制を整え
 やかに目を醒ますとともに一方西洋科学文明
 るのは決して困難でない。一方東方道義に速
 する事は至難であるのに、我らが力を獲得す
 を軽視しないが、霸道主義者が道を真に信奉
 も力を軽視するものではない。西洋人も道義

ずるものである。

もちろん我らは道義を中心とするが、しか

地から最終戦争の中心は太平洋であろうと信

現せねばならない。

結局世界最終戦争が王、覇両文明の決勝戦
 であり、東亜と西洋の決勝戦である。この見
 道主義に対抗してこれを屈伏、八紘一字を实
 御心を信仰して東亜の大同を完成し、西洋覇
 の憧憬であった。我らは、大御心を奉じ、大
 るにせよ、王道は東亜諸民族数千年来の共同
 ばならぬ。幾多のいまわしい歴史的事実があ

ていた時代が多い。霸道は動物的本能であり、王道への欲求、憧憬が人間の万物の霊長たる所以である。今後人類は本能の暴露を繰返すであろう。しかし大道は人類の王道への躍進である。王道に対する安心定まった時、人類は心から、天皇の御存在に心からの感謝を覚え、不退の信仰に入り、真の平和が来るであろう。而して日本民族の正しき行ない、強き実行力が人類の道義に対する安心を定めしめるのである。

第三節 将来戦争に対する準備

科学文明の急速なる進歩が最近世界を狭くし、遠からず全世界は王道、霸道両文明の二集団に分るる事となるべく、その日は既に目前に迫りつつある。

その二集団が世界統一のための最終戦争を行なうためには、これに適した決戦兵器が必要である。静かに大勢を達観すれば、世界二分と決戦兵器の出現は歩調を一にして進んで

してもなかなかロンドン市民の抵抗意志を屈
 第一の原因である。またロンドンを日夜爆撃
 ある。これ飛行機の滞空時間が長くない事が
 の制海権もなかなかドイツに入り難い様子で
 潜水艦のそれに及ばぬらしい。あの英仏海峡
 に出入している。飛行機による船舶の破壊は
 見えるが、しかし依然多数の船舶は英国の港
 今日ドイツが大体制空権を得ているように
 決戦戦争に於ては武力戦が瞬間的に万事を決
 定するであろう。

この二点が最も肝要である。この徹底せる
 2、防空対策の徹底
 1、世界最優秀決戦兵器の創造
 この最終戦争に対する準備のため、
 の発明せらるる時である。
 時は既に両集団に決戦を可能ならしむる兵器
 範囲を拡大し、世界二分の政治的状態成立の
 ち、兵器の発達は自然に人類の政治的集団の
 文化的に最も密接な関係があるのである。即
 いる。それは当然である。この二つの間には

日は主として質の時代となる。新しき革命的

ない。

今日主として量の時代である。しかし明

い決戦兵器が出て来る事、断じて疑いを容れ

二分となった頃には、必ず今日の想像し得な

飛び出して来るか知れない。何れにせよ世界

う。怪力光線であるとか何とか、どんな物が

は瞬間に戦争の決を与える力ともなるである

あろう。またそのエネルギーを用うる破壊力

事が出来、世界は全く狭くなる事が出来るで

航空機は長時間すばらしい速度をもって飛ぶ

うになったならどうであろうか。これにより

か。原子核破壊による驚異すべきエネルギー

戦戦争はまるで夢のようであるが、既に驚く

とんど不可能の有様で、太平洋を挟んでの決

力が足りぬのである。

僅かに英仏海峡を挟んでの決戦戦争すらほ

伏せしむる事が出来ない。今日の爆弾では威

防献金は国防思想の徹底向上に効果ある事は
 奨励した事は止むを得ない。また自発的の国
 時代に於て軍費の不足を補うため国防献金を
 国家は先ず国防献金等を停止する。自由主義
 れで私は資産家特に成金の活用を提唱する。
 る。しかしそれはほとんど不可能に近い。そ
 い得るならば国家的事業とするも可なりであ
 その人物に万事を一任して発明の奨励を行な
 る人があり、国家がその人物を中核として、
 しの人物に万事を一任して発明の奨励を行な
 し難い。若し真に優れた天才的直感力を有す
 る人があり、国家がその人物を中核として、

研究機関の設備を必要とする。
 発明奨励は断じて官僚的方法では目的を達
 ねばならぬ。これがためには発明の奨励と大
 つはこの科学的発明とその大成に指向せられ
 道の光明を与えるのである。国策最重点の一
 せらるる革命的兵器出現の可能性が我らに一
 間に西洋霸道主義者を追越すため、この予想
 科学文明に遅れて来た東亜が僅かの年月の
 が最終戦勝利者たるべき第一条件である。
 最終戦用決戦兵器を敵に先んじて準備する事

否定しない。しかし今日は国防の如き最高国
 家事業は総て税金に依つて為すべきである。
 今日には既に軍費が問題でなく国家の生産能力
 が事を決定する。国防献金もはや問題とな
 らない（但し恤兵（じゅっぺい）事業等は郷
 党の心からなる寄附金による事が望ましい）。
 資産家特に成金を寄附金の強制から解放し
 彼らの全力を発明家の発見と幫助（ほうじよ
 に尽さしめる。国家の機関は発明の価値を判
 断して発明者には奨励金を与え、その援助者
 には勲章、位階、授爵等の恩賞をもつて表彰
 する。一体統制主義の今日、国家の恩賞を主
 として官吏方面に偏重するのは良くない。恩
 賞は今日の国家の实情に合する如く根本的に
 改革せねばならぬ。信賞必罰は興隆国家の特
 徴である。
 発明は単に日本国内、東亜の範囲に限る事
 なくなるべく全世界に天才を求めねばならぬ
 しかし科学の発達著しい今日、単に発明の
 奨励だけでは不充分である。国家は全力を尽

して世界無比の大規模研究機関を設立し、綜合力を發揮すべきである。發明家の天才と成金の援助で物になったものは適時これをこの研究機関に移して（發明家をそのまま使用するか否かは全くその事情に依る）、多数学者の綜合的力により速やかにこれを大成する。研究機関、大学、大工場の関連は特に力を用いねばならない。今日の如くこれらがばらばらに勝手に造られているのは科学の後進国日本では特に戒心すべきである。

全国民の念力と天才の尊重（今日は天才的人物は官僚の権威に押され、つむじを曲げ、天才は葬られつつある）、研究機関の組織化により速やかに世界第一の新兵器、新機械等々を生み出さねばならない。

次は防空対策である。何れにせよ最終戦争は空中戦を中心として一挙に敵国の中心を襲うのであるから、すばらしい破壊兵器を整備するとともに防空については充分なる対策が必要である。

第一に官憲の大縮小である。統制国家に於

「最終戦論」で提案したのは、

その他はなるべく分散配置をとる。そこで

かが重大問題である。見透しが必要である。

完全防空をする。どれだけをその範囲とする

必要最少限の部門はあらゆる努力を払って

唱道した。

を目標として防空の根本対策を強行すべしと

そこで私は「世界最終戦論」に於て、二十年

度より推論して全く抛り処無いとは言えぬ。

一つの空想に過ぎない。しかし戦争変化の速

であろうと主張して来た。この事はもちろん

私は最終戦争は今後概ね三十年内外に起る

についても真に達人の達観が切要である。

生産力、国力の増進を阻害する。防空対策に

また消極的防衛手段が度を過ぎれば、積極的

恐らく攻撃威力の増加に追いつかぬであろう。

深く隠匿する等の方法を講ずるのであろうが

不可能であろう。各国は逐次主要部分を地下

恐るべき破壊力に対し完全な防空は恐らく

るる者の数は国家の必要との調和は全く考え
ない。勤労を欲しない。しかもこの教育せら
その人は柔弱で鍛錬されておらない。勇気が
その教育は実生活と遊離して空論の人を造り
力によらず父兄の財力に応じて行なわれる。
自由主義教育のためである。教育は子弟の能
今日社会不安、社会固定の最も有力な原因は
明治以後の急発展は教育の振興にあったが、
第二は教育制度の根本革新である。日本の
大が人口集中の一因である。

官憲は大縮小の可能なるを信ずる。官憲の拡
が国民には適當でない。この見地から今日の
度の低いロシア人に適する方法は必ずしも我
いのみならず、我が国民性に適合しない。民
で統制しようとするのは統制の本則に合しな
る。今日の如くあらゆる場面を総て官憲の力
をして喜び進んで実行せしむる事が肝要であ
べからざる事を確實迅速に決定して、各機関
強力は必ずしも範圍の拡大でない。必要欠く
てはもちろん官の強力を必要とする。しかし

以上の方法をもってして都市人口の大縮小を加うべきである。

市人口の大縮小を来たすであろう。

民学校を除き全部これを外に移転し得る。都

とする。そうすれば自然都市の教育設備は国

發揮せしむる主旨に合しない。中等学校以上

は全廃、今日の青少年義勇軍に準ずる訓練を

全国民に加え、そのうち、適性のものに高度

な教育を施し、合理的に国民の職業を分配す

べく、教育と実務の間に完全なる調和を必要

第三には工業の地方分散である。特に重要

なる軍事工業は適当に全国に分散する。徹底

せる国土計画の下にその分配を定める。大河

内正敏氏の農村工業はこの方式に徹底すれば

日本工業のためすばらしい意義を持ち、同時

に農村の改新に大光明を与える。取敢えず今

日より建設する工業には国家が計画的に統制

を加うべきである。

第七章 現在に於ける我が国防

なつた。

計画も、今日は国民に尤（もつと）もと思わしむるに足る昭和維新原動力の有力な一つとなつた。

右のような一年前に空想に過ぎなかつた大にも大切である。今日、日米戦争の危機が国民に防空の絶対必要を痛感せしめた。

針を確立し、その目的達成のために現実の逼迫を巧みに利用して勇猛果敢に建設事業に邁進する。方法は自然にその中に発見せられ、勇敢に訂正、改善して行く。その後を学者連中が理論を立てて行くのである。

何ら組織的準備のない日本の昭和維新は断じてマルクス流に依るべきでない。否やりたくとも計画がない。否でも応でもヒットラー流の実行先行の方式に依らなければならぬ。それには万人を納得せしむる建設の目標が最

速やかに東亞諸国家大同の実を挙げ、その力を総合的に運用して世界最終戦争に対する準備を整うるのが現在の国策であらねばならぬ。明治維新の廃藩置県に当るべき政治目標は「東亞の大同」である。

「東亞大同」はなるべく広い範囲が、なるべく強く協同し、成し得れば一体化せらるる事が最も希望せらるるのであるが、それはそう簡単には参らない。範囲は大アジアと書いても一つの空想、希望に過ぎない。我が（我が国および友邦）実力が欧米霸道主義の暴力を制圧し得る範囲に求めねばならぬ。東亞連盟の現実性はそこにある。爾後東亞諸民族により時代精神が充分理解せられ、かつ我が実力の増加に依り範囲は拡大せらるるのである。協同の方式も最初は極めて緩やかなものから逐次強化せられる。即ち国家主義全盛時代にも言われた善隣とか友邦とかから東亞連盟となり、次いで東亞連邦となり、遂には全く一体化して東亞大国家とまで進展する事が予想

速やかに東亞諸国家大同の実を挙げ、その力を総合的に運用して世界最終戦争に対する準備を整うるのが現在の国策であらねばならぬ。明治維新の廃藩置県に当るべき政治目標は「東亞の大同」である。

「東亞大同」はなるべく広い範囲が、なるべく強く協同し、成し得れば一体化せらるる事が最も希望せらるるのであるが、それはそう簡単には参らない。範囲は大アジアと書いても一つの空想、希望に過ぎない。我が（我が

ねばならない。最初は善隣友好の範囲を遠くある。理解の進むに従って統制を強めて行か
 に心からの協同は至難である。無理は禁物で
 いる。幸い近く平和が成立したところで急速
 日華両国は現に東亜未曾有の大戦争を交えて
 ある点では大国家的存在とも言える。しかし
 は両国は連盟の域を脱して、既に連邦的存在
 強度の統制が行なわれている。見方によって
 日満両国間はその歴史的關係によって相当
 れねばならぬ。

題である。それゆえ統制はなるべく強化せら
 の民族を統制してその実力を発揮するかが問
 は過ぎ去った。如何にして多くの国家、多く
 一国だけで世界の氣勢に伍して進み得る時代
 く時代の大勢を知らない旧式思想である。
 との議論もあるようである。かくの如きは全
 て連盟各国家を統制指揮するは怪しからぬ等
 国家の上に統制機関を設け、その権力をもつ
 近頃、東亜連盟は超国家的思想である。各
 せられる。

らせらるる天皇に対し奉る信仰に到達したな
 って結ばれ、王道の道統的血統的護持者であ
 は物判りの良い東亞諸民族が、真に王道に依
 即ち連邦となる日と言うべきである。あるい
 るであろう。元来東亞連盟の完成した日は、
 れば連盟の統制機関も相当に準備せられてい
 た日であります」と述べている。その頃にな
 主と仰がる日、即ち東亞連盟が真に完成し
 「最終戦論」には「天皇が東亞諸民族から盟
 統制機関を設置すべきである。

解の進むに従い適切に敏活なる協同に要する
 ある。
 しかしそれは決して理想的状態でない。理
 とんど統制機関を設けようとしていないので
 ある。そこで「東亞連盟」論では、今日はほ
 らない。法的問題は理解の後に続行すべきで
 主義者は先ず心からの理解を第一とせねばな
 義務を決定しようとするに反し、我らの王道
 出づる事は適當であるまい。霸道主義者は力
 をもって先ず条約的に權益ないし両国の権利

以来同志の主張に基づき東亜連盟の結成を昭
 「昭和維新方略」なる短文を草し、満州建国
 じ、九月一日大洗海岸で暴風雨を聴きながら
 う命ぜられたので軽率な私は予備役編入と信
 は大臣に取次ぐから休暇をとって帰国するよ
 病気のため辞表を提出した際、上官から辞表
 強調する勇気を失っていたが、昭和十三年夏
 後の満州国、北支の状況上、東亜連盟を公然
 官が東亜連盟の文字を見られた最初であろう。
 協和会の公式声明を知らなかった私はその

各部長等に呈上せられた筈である。恐らく上
 と言っている。この文は印刷せられ次長以下
 三国協同の実を挙ぐるに在り。
 現今の急務は先ず東亜連盟の核心たる日満支
 決はこれを南洋特に濠州に求むるを要するも
 研究に依り決定するを要す。人口問題等の解
 三、東亜連盟の範囲は軍事経済両方面よりの
 亜連盟を完成するに在り。
 二、右戦争の準備として目下の国策は先ず東
 てその時期は必ずしも遠き将来にあらず。

和維新の中核問題としたのである。しかるに同年九月十五日の満州国承認記念日に、陸相板垣中将がその講演に東亜連盟の名称を用いられた。更に次いで発表せられたいわゆる近衛声明は東亜連盟の思想と内容相通ずるものがある。実は私は板垣中将が関東軍参謀長時代から東亜連盟は断念しているだろうと独断していたのであったから、これには相当驚かされたのであった。爾後板垣中将は宮崎正義氏の「東亜連盟論」や、杉浦晴男氏の「東亜連盟建設綱領」に題字を贈り、かつ近衛声明は東亜連盟の線に沿うたのである事を発表せられた。

昭和十五年天長の佳辰に発せられた総軍司令部の「派遣軍将兵に告ぐ」には、事変の解決のため満州建国の精神を想起せしめ、道義東亜連盟の結成に在る事を強調せられた。これに誘致せられて中国各地に東亜連盟運動起り、十一月二十四日南京に於ける東亜連盟中国同志会の結成となり、昭和十六年二月一日

しく強く生長、東亞大同の堅確なる第一歩に
 感慨深からざるを得ない。東亞連盟運動が正
 は民国革命初期以来数十年ぶりの現象である
 運動者には既に同志的気持が成立している事
 調して来るであろう。兎に角東亞連盟の両国
 事と言うべきである。将来は逐次具体的に強
 見える。しかしこれらは両国の事情上当然の
 見えているのに中国は政治独立に特別な関心が
 しているのに中国は政治独立に特別な関心が
 日本が国防の共同、経済の一体化を特に重視
 しているのに中国は政治独立に特別な関心が
 経済一体化に対して経済提携と云っているし

日本が国防の共同というのに中国は軍事同盟
 に未だ完全な一致を見ていないようである。
 日本が国防の共同というのに中国は軍事同盟
 する。東亞連盟の内容については日華両国の間
 国東亞連盟運動発展の一動機となったのであ
 ないのにこの協会だけは急速な進展を見、中
 十五年春季から運動が開始せられた。在来の東
 亜問題に関する諸団体は大体活発に活動を見
 るもの成立、機関紙「東亞連盟」を発行、翌
 日本に於ては昭和十四年秋季東亞連盟協会な
 東亞連盟中国総会の発会式となった。

最大方針が国民に理解せられたならばたちま
 られ、かつ実践せられつつあるが故に、一度
 かし一面建国の精神は一部人士により堅持せ
 るところ、一度は陥るべきものであるう。し
 いない。明治以来の日本人の惰性の然らしむ
 和運動は今日まで遺憾ながらまだ成功しては
 を示したのである。満州国内に於ける民族協
 ぬ。満州建国の民族協和はこの問題の解決点
 皇道に基づき正しき道義観を確立せねばなら
 んど例外なく失敗して来たった事を深く考え

台湾、満州国に於て他民族との協同に於て殆
 の大問題であり、日本民族も明治以来朝鮮、
 家連合の時代を迎えた今日、民族問題は世界
 が最大の問題である。国家主義の時代から国
 特に我が皇道即ち王道、東方道義に立返る事
 東亜連盟の結成には、根本に於て東亜諸民族
 現時の国策即ち昭和維新の中核問題である
 第二節 我が国防
 入る事を祈念して止まない。

ち数十年の弊風を一掃して、東亞諸民族と心からなる協同の大道に驀進するに至るべきを信ずる。

この新時代の道義觀の下に、世界最終戦争を目標とする東亞大同の諸政策が立案実行せられる。しかしそれがためには我が東亞の地域に加わるべき欧米霸道主義者の暴力を排除し得る事が絶対条件である。即ち東亞（我が国防全からずして、東亞連盟の結成は一つの夢にすぎない。

東亞連盟の結成が我が国防の目的であり、同時に諸政策は最も困難なる国防を全からしむる点に集中せらるる事とならねばならぬ。国策と国防はかくて全く渾然一体となるのである。いわゆる国防国家とはこの意味に外ならない。

東亞連盟の結成を妨げる外力は、
1 ソ連の陸上武力。
2 米の海軍力、これには英、ソの海軍が共同すると考えねばならぬ。

である。我らは一日も速やかに飛躍的兵備増の軍備の間に生じた差と全く同一種類のものである。ナチス政権確立以来数年の間に独仏間由主義的日本の建設の能力の差を良く示している。ナチス政権確立以来数年の間に独仏間になったのである。全体主義的ソ連の建設と自由主義的日本の建設の能力の差を良く示している。ナチス政権確立以来数年の間に独仏間の軍備の間に生じた差と全く同一種類のものである。我らは一日も速やかに飛躍的兵備増

飛行機を持っている。それに対する我が在満兵力は甚だしい劣勢ではあるまいか。この不安定が対ソ外交の困難となり、また一面今次事変の有力な動機となった。而して日ソ両国極東兵備の差は僅々数年の間にこんな状態と

三十個師団以上に達し、約三千台の戦車及び

ねばならぬ。

陸軍当局の言うところによれば極東ソ軍は

であるからこれに対し、
1 ソ連が極東に使用し得る兵力に相当するものを備え、かつ少なくともソ連のバイカル以東に位置するものと同等の兵力を満州、朝鮮に位置せしむ。

2 西太平洋に出現し得べき米、英、ソの海軍力に対し、少なくとも同等の海軍力を保持せ

強を断行せねばならぬ。アメリカ最近の海軍大拡張はどうであるか。海相は数は恐るるに足らぬ。独自の兵備によってこれに対抗し、断じて心配ないと言っているし、また一部南進論者は三年後には米国の製艦により彼我海軍力に大きな差を生ずるから今のうちに開戦すべしと論じている。しかし更に根本的の問題は、我らは万難を排してソ連の極東軍備およびアメリカの海軍拡張に対抗せねばならぬ。いことになる。ソ連が極東に三十師団を持つて来れば我が軍も北滿に三十師団を位置せしむべく、ソ連戦車三千台なら我も三千台、また米国が六万屯の戦艦を造るなら我もまたこれと同等の建艦を断行すべきである。

そんな事は無理だと言うであろう。その通り我が国の製鉄能力は今日ソ連の数分の一、米国に比しては更に著しく劣っているのは明らかである。しかし造るべきものは造らねばならぬ。断々乎として造らねばならぬ。この一步をも譲ることを得ざる国防上の要求が我

が経済建設の指標であり昭和維新の原動力である。この気力無き国民は須からく八紘一宇を口にすべからず。

三年後には日米海軍の差が甚だしくなるから、今のうちに米国をやっつけると言う者があるが、米国は充分な力がないにおめおめ我が海軍と決戦を交うると考うるのか。また戦争が三年以内に終ると信ずるのか。日米開戦となったならば極めて長期の戦争を予期せねばならぬ。米国は更に建艦速度を増し、所望の実力が出来上るまでは決戦を避けるであろう。自分に都合よいように理屈をつける事は危険千万である。

我が財政の責任者は今次事変の直前まで、年額二三十億の軍費さえ我が国の堪え難き所と信じていた。然るに事変四年の経験はどうであるか。

日本が真に八紘一宇の大理想を達成すべき使命を持っているならばソ連の陸軍、米の海軍に対抗する武力を建設し得る力量がある事

は天意である。これを疑うの余地がない。国防当局は断固として国家に要求すべし。この迫力が昭和維新を進展せしむる原動力となるしかしてかくの如き龐大な兵器の生産は宜しく政治家、経済人に一任すべく、軍部は直接これに干与することは却って迫力を失う事となる。国防国家とは軍は軍事上の要求を国家に明示するが、同時に作戦以外の事に心を勞する必要なき状態であらねばならぬ。全国民がその職分に応じ、国防のため全力を尽す如き組織であらねばならぬ。

以上陸、海の武力に対する要求の外更に、
3 速やかに世界第一の精鋭なる空軍を建設せねばならない。

これは一面、将来の最終戦争に対する準備のため最も大切であるのみならず、現在の国防上からも極めて切要である。

ソ連が東亞に侵攻するためにはシベリヤ鉄道の長大な輸送を必要とするし、また米国渡洋作戦の困難性は大である。即ち極東ソ領や

ヒリップピン等はソ、米のため軍事上の弱点を形成し彼らの頭痛の種となるのであるが、その反面、ソ、米は我が国の中心を空襲し我が近海の交通を妨害するに便である。それに対し我が国は有利なる敵の政治、経済的空襲目標もなく、敵国に対し、死命を制する圧迫を加える事はほとんど不可能に近い。即ち彼らは片手を以て我らと持久戦争を交え得るのに対し、我らは常に全力を傾注せねばならぬ事となる。持久戦争に非常な緊張を要する所以である。

この見地から空軍の大発達により我が軍も容易にニューヨーク、モスクワを空襲し得るに至るまで、即ちその位の距離は殆んど問題でなくなるまで、極言すれば最終戦争までにはなるべく戦争を回避し得たならば甚だ結構であるのであるが、そうも行かないから空軍だけは常に世界最優秀を目標として持久戦争時代に於ける我らの国防的地位の不利な面を補わねばならない。

ばならない。かくの如き特長は互に尊重せら
 と考えられる。海軍は常に長距離に行動せね
 空部隊は軽快で特に速度の大なるものが有利
 空爆目標に乏しいのであるから、対ソ陸軍航
 て）余り遠くなく、しかも極東には有利なる
 空基地は満州国境から何れも（西方は別とし
 補う如くせねばならぬ。例えば、東ソ連の航
 た運用についても不断の研究によって長短相
 密接な協力が行なわれているであろうし、ま
 に慶賀の至りに堪えない。器材方面では既に
 密接な協力が行なわれているであろうし、ま
 た運用についても不断の研究によって長短相
 補う如くせねばならぬ。例えば、東ソ連の航
 空基地は満州国境から何れも（西方は別とし
 て）余り遠くなく、しかも極東には有利なる
 空爆目標に乏しいのであるから、対ソ陸軍航
 空部隊は軽快で特に速度の大なるものが有利
 と考えられる。海軍は常に長距離に行動せね
 ばならない。かくの如き特長は互に尊重せら

ドイツ空軍は第二次欧州大戦の花形である
 時に海上に出て、時に陸上部隊に、水も洩ら
 さぬ緊密な協同作戦をする。真に羨ましい極
 みである。我が国の国防的状态はドイツと同
 一ではなく、ただちにドイツの如くなり得な
 い点はあるであろうが、極力合理的に空軍の
 建設を目標として着々事を進むると同時に、
 航空が陸海軍に分属している間も一層密接な
 る陸海空軍の協同が要望せられる。この頃そ
 のために各種の努力が払われているらしく誠
 に慶賀の至りに堪えない。器材方面では既に
 密接な協力が行なわれているであろうし、ま
 た運用についても不断の研究によって長短相
 補う如くせねばならぬ。例えば、東ソ連の航
 空基地は満州国境から何れも（西方は別とし
 て）余り遠くなく、しかも極東には有利なる
 空爆目標に乏しいのであるから、対ソ陸軍航
 空部隊は軽快で特に速度の大なるものが有利
 と考えられる。海軍は常に長距離に行動せね
 ばならない。かくの如き特長は互に尊重せら

兵器工業は民間事業を特に活用するを要するものと信ずる。各種会社、工場等は自ら高射砲を備えしめては如何。そうして応召の予定外の人にて取扱い者を定めて練習せしめ、時に競技会でも行なえばただちに上達する事請合いである。弾丸だけは官憲で掌握しておれば心配はあるまい。有事の場合必要に応じてその配置の統制も出来る。航空部隊を除く防空はなるべく民間の仕事とした方が良いのではあるまいか。

しかし防空全般に関しては今日以上の統制が必要である。防空総司令官を任命（成し得れば宮殿下）し、これに防空に任ずる陸海軍部隊および地方官憲、民間団体等を総て統一指揮せしめる。

持久戦争であるから上述の軍需品の他、連盟の諸国家国民の生活安定の物資もともに東亜連盟の範囲内で自給自足し得る事が肝要である。即ち経済建設の目標は軍需、民需を通じて、統一的に計画せられねばならない事は

鉄資源としては日本は砂鉄は世界無比豊富
 を獲得し得るであろう。
 必ずや近き将来断じて覇道主義に劣らざる力
 用し、全国力を総合的に運用し得たならば、
 配置が宜しい。我らが科学の力を十二分に活
 源はすばらしく豊富にある。殊にその地理的
 り、科学の力である。日、満両国だけでも資
 ある。資源以上に重要なものは人の力であ
 の物は科学の力により生産し得るに至りつつ
 ちろん重要であるが、今日の文明は既に大抵
 鎖状態が彼らの科学を進歩せしめた。資源も
 まれざる資源に在ったとも言える。即ち被封
 ドイツの今日あるはあの貧弱なる国土、恵
 建設と言うも、言うは易く実行は至難である
 戦争は最大の浪費である。戦争とともに長期
 外国との紛争を招く事は充分警戒を要する。
 に於て我らの力の現状を無視していたずらに
 し得ないのである。最少限度の物資獲得の名
 アメリカでさえ総ての物資は自給自足をな
 言うまでもない。

であり、満州国の鉄はその埋蔵量莫大である
 精錬法も熔鋳炉を要しない高周波や上島式の
 如き世界独特の方法が続々発明せられている
 石炭は無尽蔵であり、液化の方法についても
 福島県下に於て実験中の田崎式は必ず大成功
 をする事と信ずる。その他幾多の方法が発明
 の途上にあるであらう。熱河から陝西、四川
 にわたる地区は世界的油脈であると推定して
 いる有力者もあると聞く。断固試掘すべきで
 ある。

その他必要な資材は何れも必ず生産し得ら
 れる。機械工業についても断じて悲観は無用
 である。天才人を発見し、天才人を充分に活
 動せしむべきである。

国家が生産目標を秘密にするのは一考を要
 する。ソ連さえ発表して来た。国民の統制完
 全であり、戦争目的第一であるドイツは機密
 としたが、日本の現状はむしろ勇敢に必要な
 数を公表し、国民に如何に彪大な生産を要望
 せらるるかを明らかにすべきであると信ずる

国民の緊張、節約等は適切なるこの国家目標の明示により最もよく実現せらるるであろう。今日のやり方は動（やや）もすれば百年の準備ありしマルクス流である。理論や機構が第一の問題とせられる。いたずらにそれらに遠慮してしかも気合のかからぬ根本原因をなし
ている。

どんな事があっても必ず達成しなければならぬ生産目標を明示し、各部門毎に最適任者を発見し、全責任を負わしめて全関係者を精

神的に動員して生産増加を強行する。政府は各部門等の関係を勇敢親切に律して行く。そうすれば全日本は火の玉の如く動き出すであろう。資本主義か国家社会主義か、そんな事は知らない。どうしても宜しい、無理に資本主義の打倒を策せずとも、資本主義がこの大生産に堪え得なければ自然に倒れるであろう。時代の要求に合する方式が必ず生まれて来る。昭和維新のため、革新のための昭和維新ではない。最終戦争に必勝の態勢を整うるための

州に対する有利な位置は在満州国の兵備が充
 衛する事は至難であるが、満州国のソ領沿海
 防の根拠地である。東亜連盟が直接新疆を防
 心に迫る事となる。満州国は東亜連盟対ソ国
 的と言える。日華両国を分断しかつ両国の中
 満州国の喪失は東亜連盟のためほとんど致命
 的である。最も重要なものは第一である。

一は満州国であり、第二は外蒙方面より蒙疆
 地方への侵入、第三は新疆方面である。その
 中で東亜連盟のため最も弱点をなすものは第
 三であり、最も重要なものは第一である。

ソ連が東亜連盟を侵す径路は三つある。第

第三節 満州国の責務

昭和維新である。必勝せんとする国民、東亜
 諸民族の念力が自然裡に昭和維新を実行する
 のである。
 この意気、この熱意、この建設は自然に世
 界無比の決戦兵器をも生み出す。即ち今日持
 久戦争に対する国防の確立が自然に将来戦争
 に対する準備となるのである。

次不安となつて来た。この影響はただちに治
 り、統制経済による不安と相俟つて民心が逐
 日本人の専断が、民族協和を困惑する形とな
 一方大量の日系官吏の進出と経済統制による
 後事変の進むに従い漢民族の心は安定を欠き
 恐らく最良の状態にあつたものと思う。その
 比較的安定した支那事変勃発頃の満州軍は、
 国内に於て民族協和の実が漸次現われ、民心
 原因を探求すべきである。満州軍の不安は実
 に満州国の不安を示しているのである。満州

背反者をすら出す事がある。しかし深くその
 するところである。たしかに満州軍は今日も
 るに満州軍に対する不信は今日なお時に耳に
 建国史上に特筆せらるべきものである。しか
 払われた。これに従軍した人々の功績は満州
 満州軍の建設には人知れざる甚大な努力が
 依り日満両国軍隊共同これに当るのである。
 この大切な満州国の国防は、日満議定書に
 ととなる。

隊を編制すべきである。現に蒙古人は蒙古軍
 当るのであるが、それ以外の民族は各別に軍
 満議定書に基づき、日本軍隊に入つて国防に
 正しいと信ずる。即ち満州国では日本人は日
 複合民族の国家では各民族軍隊を造る事が

御申訳ないと自責しているのである。
 ながら実現せられていない。私としては誠に
 深く感激したことがある。これは今日も遺憾
 の名を無くして貰いたいとこの御言葉を賜つて
 着任、皇帝に拝謁の際、皇帝から「日系軍官

心せねばならぬ。
 かつて昭和十二年秋関東軍参謀副長として
 建国精神、即ち民族協和の実践である事を銘

を防がんとしても至難である。
 満州国防衛の第一主義は民心の把握であり
 れているのに日系警官や憲兵でスパイや謀略
 ればスパイの防止も自然に出来る。民心が離
 軍は大して心配の必要なく、民心真に安定す
 明らかにし、国内で真に王道を行なえば共産
 い。共産主義が西洋覇道の最先端にある事を

ら出稼ぎに来た人々に簡単に理解せられない。く反省せねばならぬ。他民族の心理は内地かが満州国不安の一大原因となっているのは深く入れて指導する考えらしいが、この日系警官が満州国不安の一大原因となっているのは深く反省せねばならぬ。他民族の心理は内地か

田舎の満州人警察の中に少数の日系警官を有せらるるは適当でない。漢民族の軍隊の中に「日系軍官」なる名称の吏は日系、満系、朝鮮系等のあるは自然であるが、軍隊は各民族軍隊を造るのであるから漢民族の軍隊の中に「日系軍官」なる名称の

官の名称を止めよと仰せられた御趣旨もここにありと拝察する。諸民族混住の国に於て官吏は日系、満系、朝鮮系等のあるは自然であるが、軍隊は各民族軍隊を造るのであるから漢民族の軍隊の中に「日系軍官」なる名称を止めよと仰せられた御趣旨もここに

隊を造っているが、朝鮮軍隊も編成すべきである（一部は実行せられているが大々的に回々（イスラム）軍隊も考えられる（これは朝鮮軍隊ほど切実の問題ではない）。軍隊は兵器を持って危険な存在だから、言語や風俗を異にする民族の集合隊は適当と言えぬ。

日本人が漢民族の軍隊に入って働くのを反

対するものではない。しかしそれは漢人の一

員たる気持であらねばならぬ。皇帝が日系軍

官の名称を止めよと仰せられた御趣旨もここ

にあると拝察する。諸民族混住の国に於て官

吏は日系、満系、朝鮮系等のあるは自然であ

るが、軍隊は各民族軍隊を造るのであるから

漢民族の軍隊の中に「日系軍官」なる名称の

有せらるるは適当でない。

田舎の満州人警察の中に少数の日系警官を

入れて指導する考えらしいが、この日系警官

が満州国不安の一大原因となっているのは深

く反省せねばならぬ。他民族の心理は内地か

ら出稼ぎに来た人々に簡単に理解せられない。

北満の開発が大切であり、北辺工作はその目

糧秣その他作戦軍の給養を良好にするため

られるが、その急速なる成功を祈念する。

国経済建設はこれを目途としている事と信ぜ

国で補給し得るようにせねばならない。満州

な作戦資材、特に弾薬、爆薬、燃料等は満州

地として作戦する事自明であるが、その膨大

有事の日は、日本陸軍の主力は満州国を基

制するようすべきである。国兵法の採用に

より画期的進歩を期待したい。

たり、逐次警察に移し、満州軍は国防軍に編

州国内の治安は先ず主として満州軍これにあ

になってから急速に良くなったのである。満

実に満州軍が主として匪賊討伐にあたるよう

治安を悪化する虞が大きい。満州国の治安は

良民の区別が困難であり、各種の誤解を生じ

日本軍を用うるは決して適当でない。匪賊と

満州国内匪賊の討伐は実験の結果に依ると

り、また満州人警官の取締りも適切を欠く。

警官には他民族の観察はほとんど不可能であ

我ら軍人自ら昭和維新の先駆でなければな
く反省せねばならぬ。
地式生活から蟬脱出来ない帝国軍人は自ら深
新体制とか昭和維新とか絶叫しながら、内
北満経営の第一線に立たねばならぬ。

を自らの手で実行し、自ら耕作しつつ訓練し
ため、東亜連盟結成のため、満州国防完成の
ため、我らは率先古賀氏のような簡易な建築
の要求に合し得るものと信ずる。浮世が恋し
い人々は現役を去るが宜しい。昭和維新のた
め、東亜連盟結成のため、満州国防完成の
ため、我らは率先古賀氏のような簡易な建築

々進んでいるから、これを採用すれば必ず軍
幸い青少年義勇軍の古賀氏の建築研究は着

ない。
今日までの如き立派なものでは到底間に合わ
ない。
て来れば我もまた十個師団を進めねばならな
い。それには迅速に兵営等の建築が必要だが
増加せば我もまた五個師団、十個師団を持っ
に明確な自覚を必要とする。ソ連が五個師団
的が多分に加味されている事は勿論である。
しかし日本軍自体もこの点については更に更

らぬ。それがために自ら今日の国防に適合する軍隊に維新せねばならぬ。北満無住の地は我らの極楽であり、その極楽建設が昭和の軍人に課せられた任務である。

(昭和十六年二月十二日)

底本：「最終戦争論・戦争史大観」中公文庫

中央公論社

1993(平成5)年7月10日初版

1995(平成7)年6月10日5版

底本の親本：「石原莞爾選集3 最終戦争論
たまいらば

1986(昭和61)年3月

※丸括弧中に示したページ数は、底本のそれである。

入力：林孝司@石原莞爾デジタル化同志会

校正：KOKODA@石原莞爾デジタル化同

以下の文字が用いられています。（数字は、

この作品には、J I S X 0 2 1 3 がない

にしました。傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示

にある文字は、画像化して埋め込みました。

「くの字点」をのぞくJ I S X 0 2 1 3

「# :」は、入力者による注を表す記号です。

このファイルは W 3 C 勧告 X H T M L

1 . 1 にそった形式で作成されています。

●表記について

校正、制作にあたったのは、ボランティアの

皆さんです。

青空文庫（<http://www.aozo>

このファイルは、インターネットの図書館、

青空文庫作成ファイル：

2006年5月19日修正

2001年8月29日公開

志会

底本中の出現「ページ-行」数。(これらの文字は本文内では「※」「#」「…」の形で示しました。

「血+半」

62-12、70-5